に今汝之を食ふ、これ百姓を害するなり、汝霞あらば我を害せよ、百姓を害する勿れと、遂に蝗を食ふ、これよりまた災を爲さず、即この故事なり。◉すき者のものすき、そることと。◉都をば云々春の霞のたつころ都を出でしが、春過ぎ夏去りて今白川の關を越えんとすればはや秋風がふいてゐる、さても旅を長くしたわい。◉白川のせきに岩代國西白河郡ありしなり。◉念なしおもしろみなし。◉次◉披露◉古今著聞集橘成季の著二十卷あり。

九、天の川

◉あら海や云々北海のあらがむれば水天髣髴たる天の一角に天の川のよこたへたらんが如くに見ゆとなり。◉稲妻や云々夕立のくもがあちらこちらに日々ところ定めずあらはるさまをいへるなり。◉しら露や云々折角玉の如くに立派におきたる露も、おきどころのあしきために人馬のためにちらされたとなり。◉行水の云々いまや秋の最中のことゝてどこにも蟲の唧々として行水の水のすてどころさへなきほどぞといふ意。◉かれ枝に云々萬木凋落して塒にやどる烏の數さへ見ゆる程になつてはや晩秋となつたとなり。◉三井寺の云々さてもこよひの月のよさよ獨ながめんも心なかるべし。三井寺の僧でも訪れて共に賞しやうかの意。◉名月や云々空もくまなく照せる月は、座敷の中まで月光がさして、松影婆娑として疊の上におつるとなり。◉欄干に云々月明にしく菊の影へ明にうつれりとなり。◉黄菊白菊云々菊の花には黄菊白菊其種さまゞあれど、黄菊の風韻の高くしていさぎよきにまされるはなしとなり。◉化もの云々おぼろ月夜に妖怪かと思はれたのは、正體を見とどけて見れば化物にはあらずして、枯尾花であつたとなり。

一〇、白峯の陵

しらみねのみさゝぎ崇德大皇の御陵なり

◉相阪の關守近江國にあり、この關を境として東を關東、西を關西といふ關守は關を守る役人。◉許され關守の許を得て相阪を越して以來。見すごしがたく。◉鳴海潟尾張國愛知郡にあり。千鳥の名所として聞ゆ。◉浮嶋が原駿河國駿東郡。◉清見が關駿河國庵原郡、こゝに關所ありしなり。◉大磯、小磯相模國。◉むらさき匂ふ武藏野の原武藏はむらさき草(菫)の名所なりければなり、古今集の歌に「むらさきの一本ゆゑに武藏野の、草はみながらあはれとぞ見る」とあり。◉鹽竈陸前宮城郡。◉象潟羽後由利郡。◉蜑が苫屋蜑は海邊にゐる漁夫のこ

と、苫屋は苫草にて葺きたる小さき家、漁師村のこと。◉佐野上野國安蘇郡。◉心のとゞまらぬ方ぞなきく心の留まらぬ事なれども面白し。

◉歌枕見まほし歌の材料を得んとて、歌枕は名所といふ程の意。◉葭がちる難波の枕詞。◉筋◉そぼ降るしよぼ降る。◉兒が嶽◉おぼつかなき心細き。◉うばら(荊棘いばら)。◉かづら葛。◉うらがなしきに「うら」は心のこと、心にかなしく感ずるなり。◉かきくらまされ暗涙にむせぶ。◉紫宸、清涼共に宮中の御殿の名。

◉百のつかさ人人多くの役人○百官。◉藐姑射の山仙人の住む山をいふ、上皇の御所を仙洞御所といふ故、なぞらへて上皇の御事をいふ。◉玉の林立派の御所の意、ほめていふことば。◉しめさせ給ひしを仙洞御所(法皇の御所)に占めてゐ給ひしものを。◉思ひきや後文の「神がくれ給はんとは」の下におきて解すべし思ひよるべきか、思ひもよらぬの意。◉麋鹿鹿のこと。◉おどろいふ雑草を。◉神がくれ崩ずること。◉萬乘の君(天子のこと)天子は車萬乘を有すると云ふ事孟子にあり。◉宿世の業人のこの世に生れてくる前の世にて罪を犯せるものは、この世に種々の苦患を受くといふ佛教の説なり、宿世はさきの世、業は罪のこと。◉添ひ前世の因縁が身につきそふなり。◉供養回向、むらふ。◉誦しへる。◉松山の浪云々涙の景色は昔も今も同一なれど、御君(崇德上皇)はおかくれになつてあと形もなくなつておしまひなすつた(かたは形に潟をかけたり)。◉神清みく心がにごりなしで來て。◉骨冷え却し。◉骨冷え體も冷し。◉物とはなしになく。◉すさまじくものすごおそろし。◉上田秋成大阪の人、餘齋と號す、無腸公子、鶉居の別號あり、加茂眞淵の門人にして有名の國學者なり、及俳諧をよくす、文化六年歿す、年七十八。

一一、文話一則文章上のはなし一つ

◉上乘最も上手なもの。◉近松門左衛門巢林子と號す。◉逸事散逸した其人のおこなひ。◉含蓄その文字の上に意味をふくむ○餘情○餘韻。◉緊要大切。◉會得了解。◉具體的形を以てあらはるゝもの。◉抽象的物の共通した性質をぬき出して、それを綜合したるをいふ。◉貧窶まづしい。◉漠然とりとめのないこと、ぼつと。◉晦暝くらい。◉瞭々はつきりとあきらか。

◉歸結最後の歸着するところ。◉次第順序。◉懈る◉能文文章の上手。◉白石新井君美、德川時代の碩學なり。◉折たく柴の記白石の自傳。◉眞率すなほにしてかざりけなきこと。◉神韵文學の凡ならぬおもむき。◉乃父父。◉蘆澤◉胡頽子◉三昧心を一事に集注して動かず、心を靜寂にして亂さざるを云ふ、凡人のさかひを脫して神域に達すること。◉和ぎ◉索然少し味のなきかたち。◉森田文藏「思軒と號す、歐米小說の飜譯を以て聞ゆ、「探偵ユーベル」「暫使者」等就中好評を博せしものなり、明治卅年歿す。

一二、空論を避くべし

◉歸納的推理許多の事業をあつめて一致の點を求め、其中に存する原理を案出して更にこれより最高理に論及せんとする推理法をいふ。◉結論じつめたる結局のことば。◉空理空論實際とはなれたる理論。◉常識健全なる普通一般の理解、又は道義心。既知の原理より漸次論下して、現在の事實に到達し其理を說明すること。◉懺悔話過去の罪惡を悟りて後悔する話。◉六部六十六として諸國を巡拜して法華經を日本六十六國の靈地に納むる行脚僧を云ふ。

一三、讀書の選擇

◉さらぬらぬ。◉群書多くの書物。◉涉獵あれもこれもあさりよむ。◉徒費○涙費○空耗。◉覓む◉煥發大に開ける。◉神餒元氣がとろへる。◉阻み疲れる。◉頽然ぐつたりとして。◉生氣いきいきし◉覺醒す。◉措いておく。◉自覺自分でさとる。◉審美の美。◉靈光くしびなる光、一種ふしぎなる光景。◉庶幾くは◉天才○先天的才筆。◉名篇立派な文章○名文。◉大作大文章。◉親炙親しく近よりなじむ。◉逍遙あそぶ。◉趣味趣味を感ずる知識。◉警醒いましめます。◉啓發ひらきだす○開發。◉斬新極めて新らしい。◉涵養しなふ。◉萬葉萬葉和歌集、平安朝以前の歌をあつめ、我國最古の歌集なり。◉源語源氏物語、紫式部の作れる小說にして五

十四帖あり。◉近松名は門左衛門巣林子と號す、元祿時代の淨瑠璃作者にて古今獨歩と稱せらる。◉偏狹せまくか たよる。◉固陋がんこでいやしい。◉反故 ◉投棄すてる。◉價値ねうち。◉淘汰えらびぬく、よきものは年月を經るも尙世人の賞贊を受け、あしきものは歲月と共に世に忘れらるゝをいふ。◉賭し(賈して)。◉蟻集ぎしゅう蟻のあまきに集るごときをいふ。◉鑑賞かんしゃう鑑定し賞翫する。◉散佚さんいつちらばりうせる。◉痴ばか、おろか。◉野卑いやしい。◉適合てきがうよくかなふ。◉敷演ひきのばす。◉讀破どくはむ。◉新刷しんさつ新しき出板物。◉推する敲かう文章をねりきたへていくたびもなほす。◉沒趣味まつしゅみ無趣味に同じ、少しもおもしろみのなきこと。◉時弊じへい當時の弊害。◉最好手段さいかうしゅだんいちばんよき方法。

一四、室鳩巣に與ふ

◉佐々政一さささいち醒雪と號す帝國大學文科の出。◉鶉衣うづらごろもひよう鶉衣は俳人横井也有の俳文を集めたるもの。◉評釋 俳文を集めたるもの。

德川幕府の儒官、名は直清、鳩巣はその號なり、木下順庵の門人、享保十九年八月、七十七歲にして歿す、この書狀は火災見舞の文なり。

◉拜見はいけん拜見に同じ。◉驚愕きやうがくおどろく。◉是非ぜひに及ばずがない。◉火急くわきふ尤も急なる。◉異狀いじやうかはり。◉拮据きつきよほれたる勉勵。◉手錄しゅろくの、自分で書いたもの、てびかへ。◉憑みてたのまぬ書物の必要はあれど書物になづみかゝはらぬ、(悉く書を信ずるは書なきに如かず)。◉令郎れいらう御子息。◉貽し ◉買田問舍はいでんもんしゃ子孫の爲に田を買ひ家をたてたりする。◉家藏かざう家にもつて居る。◉書目の簿しょもくの書籍の目錄を書いた帳面○藏書目錄。◉四書學ししょ論語、孟子、大中庸の四種 ◉史記しき司馬遷の著。◉漢書かんじょ班固の著。◉恩賜おんし君公より頂戴した。◉廉潔れんけつに金錢を借りぬをいふ)。◉同門どうもん同じ門人、白石も鳩巣も共に門人なればなり○同窓。◉秦風しんぷう詩經の編の名。◉與レ子しとはをなじ同レ袍ぢんぎ君ときものを共にきやう。

一五、成吉思汗

◉黃禍論わうくわろん黃色人種が他人種を侵害すると云ふ論。◉席卷せきけん席をまくが如くに片端より次第々々に土地を侵略すること。◉羈圖はと大名頭たらんとの計畫。

◉遊牧民牧畜を業として水草を逐うて居をうつす民。◉酋長蠻族の長。◉隷屬他人の支配にしたがひて部下となること。◉部落一地方の人民の集りたる地域。◉兵機兵を用ゐる機會。◉識略知識才略。◉駕御つかひまはす。◉締盟約束をかたくむすぶこと。◉韃靼追諡おくりな。◉豪邁たけしくすぐれる。◉果斷おもひきりのよきこと。◉無辜つみなきもの。◉屠殺戮すること。◉風手風姿の立派なるさま。◉魁偉からだの人なみすぐれて大なるを云ふ。◉風采その人の

一六、武士道

◉尙武武を尊ぶ氣風。◉氣象氣風。◉胚胎生ず、はらむ。◉成形なり道德。◉實行武力の實行をいふ。◉一種の氣象忠君愛國的の精神をいふ。◉基礎もとゐ、どだい。◉儒教孔子の佛教の道。◉融合調和一致する。◉特異べつだん。◉人倫人間の守るべきみち。◉秋霜烈日秋の霜の冷氣夏の

やけつくやうな日に照らされるが如きはげしくきびしきをいふ。◉ストア哲學宗教倫理を中心として騎士の位あるものは、信を守り名を重んじ、心寬かに禮義ありて强をくぢき弱をたすけたる一種の制度にして、又當時の理想なりしなり。◉騎士風歐洲の中世紀に行はれしものにろか。◉勳功てがら。◉侮辱あなどりはず。◉同日一つの。◉眩すど我國維新前まで封建制度なりしなり。◉壞滅ほろびす。◉形骸かたち。◉封建制度領主を地方々々におきて、其地方の政治を行はしむる制度をいふ、即大名政治にして翼くたす。◉異端聖人の道にあらざる說のことにて、こゝ確くくはしく、◉運用○行使。◉果斷決行思ひきつてやる事。◉志士社會國家の爲に盡す人。◉與し○加擔し。◉扶翼ぼくめつ。◉撲滅うちほろぼす。◉間斷たえま。◉精

一七、如意輪堂

◉安部野の合戰細川顯氏、山名時氏の勢六千餘騎を、楠正行、二千餘騎にて安部野に擊破したる激戰なり。◉堰き落されて敵兵皆先を爭ひ渡邊の橋を渡

らんとして溺死する者おびたゞしかりしをいふ。◉かひなきたゝぬ。やくにも◉秋の霜「霜月廿六日の事なれば」を此所におきて解すべし。◉氷◉小袖鎧の下に着ける衣。◉引きこと。與へる◉物の具よろひかぶと。◉色代して。禮を◉京勢の軍なり。賊、足利方◉むげ〳〵さん。◉蜂起蜂の巣をつゝきて蜂の飛び出す如く俄に起る。◉周章〇狼狽。◉催勢急に集め軍勢。◉帶刀◉正行◉舍弟弟。◉庇弱病身にてよわいこと。◉威を碎き威勢をやぶり。◉先朝後醍醐天皇を申す。◉宸襟天皇の御心。◉扶持養ふ。◉御代に卽け天子の御位につけ奉る。◉手を碎き手を盡し。◉遺言おき。◉武略武士の意なり。◉有待將來事業をなさんと、その時機を待つ身にしての意、待つ身、無常の身。◉思ふに任せぬ思ふまゝに習ならぬはうきよのならひ。◉早世わかじに。◉雌雄まけ。◉龍顏天子の御顏。◉參內朝廷にまゐる。◉傳奏の役人。◉直衣◉濡し◉主上後村上天皇。◉南殿紫宸殿のこと宮中の正殿なり。◉照臨御覽〇みそなはす。◉叡慮天子の御心。◉累代代々。◉神妙〇殊勝。◉安否安危といふに同じ。◉進退いくさの◉度に當りしきをうること。◉機に應ずをりを見てよき方法をとる〇臨機應變。◉心懷本足に於ける知くにたよりに思ふ。◉勅答御答。◉最後この世の皇。◉御廟みたまや、おはか、◉如意輪堂の側にあり。◉過去帳死者の名を記錄するもの、こゝ云々此度の戰には生きては歸らぬと覺じめ考居れば紀念の爲に過去帳に入るべき法名を此壁に書きつられた、弓は一度矢を放てば再び歸らぬものなれば歸らぬ事のたとへ、「いる」は「入る」に矢を「射るしをかけたり。◉鬢髮もとゞり。

一八、人臣の道

◉王土帝國。◉高名たかみやうてが。◉迹を惘み遺族を憫む。◉きほひ競ふ、彼是と不足をいふ。◉危あやむるくする。身を危

◉前事の轍前に非望を抱きて身を誤りしもの　◉ありがたき すくなき、まれ又なかなかむづかしい。　◉制符禁止の令。　◉宣旨のり。　◉召し具しれる。引つ　◉かたらはるゝ徒黨に引入れられる。　◉かけあひ戰爭に出ること。　◉家子一門一族。　◉郎從家來。　◉節に死ぬる忠義のために命をすてる。　◉はし始め、端。　◉朝家朝廷。

◉かろがろしさ輕視せらるゝ式微。　◉樞機大切なる(戸のクルル)。　◉あからさまにも假そめにも。　◉蔑あなどり輕んずる。　◉堅き冰は、霜を履むより至る何事も突然とあらはるゝものでない、小さい事をつゝしまぬ處から段々大きくなる。　◉末世季。　◉〇澆許由を、耳のけがれなりとて耳を洗ひし潔白の人。　◉帝堯　◉潁川　◉巢父許由と同じ頃の隱者なり。　◉五臟六腑こゝろのこと。　◉顧みざらむ何故に顧みろこと をせぬのであらう。　◉萬姓萬民。　◉頒たせ　◉しらせめ。治　◉崩しころる。出るを　◉羞づる　◉謀反　◉將門　◉かくのみ如くにの み。　◉高祖項羽と共に秦を亡し、後項羽と爭ひて遂に天下を取る。　◉蕭何、張良、韓信功臣。高祖の　◉籌を帷幄の中にめぐらし軍略を幕の中即ち陣營の内にめぐらす。　◉留地名。　◉封ぜ主となること。もらつた領地の　◉奥の秦衡奥州の藤原泰衡。　◉直實一谷合戰に敦盛を打つて名高き熊谷次郎直實也。　◉下文將軍より臣下に下す文書。　◉いみじき此上もなき、非常の。　◉おかし面白し。　◉これまでの心こゝろそなからめ今の世は名を重んじ利を輕んずる程の心もなきをいふ。　◉ありし世昔。　◉東國の風儀重忠、直實の如き風俗。　◉公家朝廷

一九、はれぬ雲くも

◉行宮あんぐうかりごてん。　◉うへのをのころ殿上をゆるされた人。〇殿上人。　◉題をきぐり歌の題をとりて歌をよむなり。　◉五月雨だれ　◉都みやこだに云々繁華な都會でさへも五月雨の頃はさびしかつたのに、雲の晴間なき吉野山の奥に來りては殊にさびしさにたへかねない。　◉鳥のねに

云々「鳥の音」は鷄人の曉を唱ふることにて、御垣守の者が火の用心とて夜まはりをするなり、其夜まはりの聲に眼がさめて曉方のねざめにつくづくと國をどう治めたらよいかと心配する。◉身のよそに云々　我身は出家してうき世を離れて居るけれども、以前殿中にありて宮中の花を見て樂しみし昔のことが思ひ出されてこひしいとなり。◉みはしのはな　宮中の御階にて、ご◉あやめひく云々　五月端午の祝日には菖蒲をとつて枕の下にしく也、我は始終旅に出て草の枕に寐るのだが、今晩はなつかしき都の人も草枕をするで有らう。◉文貞公　◉めぐりあふ云々　生きてぬてもとても會ふ事もできぬが前の世からの約束ならば、生きて憂き目をみんよりかへつて死んだ方がましである。◉なかなかにてのの意。◉勢多　◉けふのみと云々　命はけふかぎりと思ふ夢の如きはかなき此身が、せたの長橋といふ長い橋をわたるとはどうしたものぞ。◉故郷に云々　年が立つた事であるから今ま故郷に生きて歸つたところで知つた友も死んでしまつて昔がたりをする人もぬぬで有らう。

二〇、道德と法律との關係　その一

◉風敎　道を以て下をみちびきをしふる。◉唱道　◉弊風　◉權利　法律によつて己の享受すべき利益にして、物事を自由に處分すべき分限を云ふ。◉義務　法律が規定して强制せる行爲、又は不行爲の稱。◉刻薄　殘忍にして人情なきを云ふ。◉度外　きまつたほかの事としてすておく。◉倫理　人の善惡正不正を判定する標準。人の行ふべき道。◉道德　善なる意志によつて善なる行をなすこと。◉要求　しひてもとむる。◉標準　めあて。◉干涉　たちいつてせわをやく。◉條項　箇條。◉侵害　他よりおかしそこなふこと。◉理非　道理にあたつて居るかどうか。◉法庭　裁判所。◉非難　缺點過誤などをとがむること。◉紛爭　もつれあひ。◉私法　私人相互の權利義務を定したるもの。憲法、民法商法等。◉公法　權力關係を規定したるもの。行政法律等を云ふ。

二一、道德と法律との關係　その二

◉裁可　君主が臣民の奏議を許可したまふを云ふ。◉局に當る　事にたづさはる人。◉間然　善惡をいふべきこと。◉行政官　行政

事務をあつかふ官吏。◉主權者（しゅけんじゃ）國家を統治する最高權力者。◉秩序（ちつじょ）事物のすぢ目及び次第。◉紊亂（びんらん）みだれる。

二二、忠度（ただのり）と俊成（としなり）

◉いづくよりか歸（かへ）り來（きた）られけむ　平家一門、源氏の爲めに敗れて、都を落ち行きし忠度は何處よりか引かへして歸り來れるなり。◉召（め）し具（ぐ）し　◉俊成卿（としなりきやう）有名の歌人、元久元年年九十一。◉敵（たゝ）き　◉な開（ひら）かれ候（さふ）ひそ　開き給ふなかれの意、「な」は「なかれ」の意、「そ」はさし示す助辭。◉この際（きは）　この門のそばまで。◉直垂（ひたゝれ）　よろひの下に着る直垂なり。◉小具足（こぐそく）　鎧を着ず、腹卷に籠手臑當を着ること。◉體（ていやう）ありさま。◉年來（としごろ）　◉申（まう）しうけたまはり　教を受けし後（忠度は俊成に平氏一族。◉疎略（そりやく）を存（ぞん）ぜず　歌道を忘る心はなけれど。◉勅撰（ちよくせん）　天皇の勅を奉けて歌を撰ぶ。◉君　安德天皇、（平氏安德帝を奉じて西海に落ちしなり）。◉さりぬべきもの　歌集に入れて差支のなき歌。◉御恩（おん）を蒙（かうむ）り　おなさけでわが歌を其の中へ撰び入れらるゝをいふ。◉草の蔭（かげ）　死んだ後。◉遠（とを）き御守（おんまもり）　死して、かの世から守護する。◉鎧直垂（よろひひたゝれ）　よろひの下にきる直垂。◉上（たてまつ）らる　◉怨劇（そうげき）　戰爭（いくさ）。○兵馬倥偬。◉思（おも）し召（め）し忘（わす）れぬ　歌の道を心にかけて忘れぬ。◉ありがたく　神妙に。◉向後（こうご）　これから後。◉曝（さら）さ　◉今世（こんじやう）　この世。◉前途程遠（ぜんとほどとほし）、馳二懷於雁山之暮雲一（くわいをがんざんのぼうんにはす）　この詩は勃海の周文德が我國に來りし時送別によみ會ふこともむつかしく、これが一生のわかれとおもへば落涙おさへがたしなり。那の都より胡の國へ通ふ道にあり、意はこれから行くさきは遙かに遠ければ再び◉勅勘（ちよくかん）　天子のとがめ○罪人。◉故郷花（ふるさとのはな）　◉さゞなみや　志賀の枕詞。◉志賀（しが）の都　近江にあり天智天皇の都せし地、一首の意は志賀の都は荒れ果てゝねるが花のみは昔のまゝに咲いて居る。◉仔細（しさい）　致方なし。

二三、知己（ちき）難（なん）

◉朋友（ほういう）　常に交際する同輩。◉知己（ちき）　己の心をよく知れる友、○心友。◉仲達（ちゆうたつ）　幼にして聰明、博學洽聞を以て聞ゆ、魏軍の將となりて、しば〳〵諸葛孔明と戰ふ。

◉祁山渭水の空營敵の仲達は孔明の死後、其陣營の跡を見廻りて、孔明の軍略の才を認めて歎息せり。◉按じ見ること。◉孔明亮、名は琅琊の人蜀の劉玄德を助けて魏吳と鼎足の勢をなさしむ。◉玄德卑賤より身を起して遂に蜀の天下を創立す、謚を昭烈皇帝といふ、孔明の南陽に耕作せる時に孔明の大才を認めて三度までその草廬を訪問し懇請して遂に軍師としたるなり、常に曰く、予に孔明あるは魚に水あるが如しと。◉著すれば執着するなり。◉竹馬の友竹馬にのり合ひし幼年よりの友。◉同窓の友室を同うして共に學びし友、○學友。◉同臭味同じくせる人がない、君のみ梅の香のほんとの美は了解せらるゝのだ。◉君ならで云々あなたでないと外に見しまつた上は琴を彈じても天下に伯牙の琴を聞わける耳をもつた者がないとて、琴の絲を斷ち切つて又彈ぜなかつた。◉鍾子期楚の人彈琴を能くす。◉伯牙楚人、鍾子期は伯牙の琴の音をほんとに聞わけたれど子期の死んで殺さる。◉高漸離燕の人、筑をうつ名人◉荆軻壯士、燕太子の母に頼まれて秦王を擊たんとして、事あらはれ◉筑一種の樂器。◉楊巨源◉詩家清景在ニ新春ニ、柳嫩鵞黄色未レ匀、若待ニ上林花似上レ錦、出レ門皆是看レ花人詩人のほんとに愛するのは新春の景である卽ち柳の芽が出揃はず、色もまちゝの時がいゝのだ、錦のやうに花の咲きみちたのを愛するは常人のことであつて、花の知己は詩人である。◉汪洋ひろ〳〵としてはてのなきかたち。◉玄閒宇宙。◉薄る◉卜するみさだめ。◉得會ふ。◉鍵なくしてかぎを以て胸函をひらかなくつても心中の祕密をしるなり。◉嘻笑ふ。◉怒罵いかりのしる。◉神祕ひみつ。

は洵、老泉と號す、弟は轍、世に三人の父子を三蘇と稱して文名天下に揚る。◉東坡宋時代の人、姓は蘇、名は軾、東坡は其の號なり、父◉重辟重き刑、詩を作りて罪を得、黄州に配せらる。◉是處青山可レ埋レ骨、他年夜雨獨傷レ神、與レ君世々爲ニ兄弟、又結來生未了因この場所は山は青々として骨を埋むるにいゝ、いつか夜の雨の淋しき時獨り心をいためかなしむ時もあるだらう、どうぞ我々は再生する時又兄弟と生れてとげぬちぎりを全うしたい。◉雙々兄も弟も兩方。◉未了因この世でまだ遂げない。◉古往今來昔から今まで。◉生面初めて見た人。◉賈生年少にして諸家の書に通じ、文帝の世に博士となる、後梁王の太傅となる。◉屈原楚の國の人なり尤も世に稱せらる。博學强記にして詩文に通ず「離騷」◉孟軻孟子のこと、孔子を祖述して王道仁義を說く。◉周公周の武王の弟、古の聖

帝なり。◉濃到（のうたう）情のこまやかに到れること。◉キケロ（狀師）並に辯士として知らる、コンスルに撰ばれて叛徒を鎭む、三頭政治の結果として國外に放逐せられしが、又よびかへさる、後害にあふ。◉スキピオ（キケロの心友、ポンペユスの岳父として、共にカイザルと戰ひて敗れ、ポンペユスの死後、再び亞非利加のダプスに戰ひ、大敗して自殺す。◉荊棘（けいきよく）いばらなどはへたる荒野。◉漫（みたりむや）みに。◉浮世（ふせい）現世。◉名刺（めいり）名譽利達。◉魏徵（ぎちよう）鄭公に封ぜらる。◉人生感（ズ）意氣（ニ）、功名誰（カ）復論（ゼム）人の世は互に其の意氣（こゝろだて）に感ずるばかりである、功名の如きは論ずるに及ばぬ。◉吐露（といろ）らはす。◉（せいさつ）けがれなき（ふ）ふかき幸福。◉床（とこ）を並（なら）べる、東坡黃州の配に赴く時、弟轍と別るゝ時、雨大に降り、即詩を作りて與ふ、其詩中「對レ床」云々とあり、故にかくいへるなり。◉千（せんこ）古の懷（おもひ）しからのおもひ。

二四、桃李不言（たうりものいはず）

◉桃李言（たうりものい）ハザレドモ、下自（しもおのづ）ラ蹊（こみち）ヲ成（なし）ス桃やすもゝは自ら何もいひはせぬが美しい花を人がめて來て其の下には自然に蹊ができるやうに人は自らてらはなくとも己に實力さへあれば人がその價値をみとめて來るから實力を養へとの意。

察（さつ）ナレバ、徒（と）ナシ。水が清すぎると魚のすまぬやうに人も餘に細かいとこまでやかましくふと人はきらつて己に從はぬやうになる、察はよく氣のつき過ること。◉瓜田（くわでん）ニ、履（くつ）ヲ納（いれ）レズ李下（りか）ニ冠（かんむり）ヲ整（たゞ）サズ疑をうけるやうなことはせぬがよいとの意。◉恆產（こうさん）ナキ者（もの）ニ恆心（こうしん）ナシ一定の財產なきものはみさを正しく動かないやうな心はない。◉普天（てん）ノ下（もと）天の徧く敵ふ下。◉率（そつと）土ノ濱（ひん）河海の陸地とつゞく所即ち陸地のあらん限り。◉王臣（わうしん）ニアラザルハナシ（どこまでいつても）天皇の領地でない所はなく、又陸地の有らん限りそこにをるものは天皇の臣民でないものはない。

二五、棧（かけはし）の記

◉あくがれ心（こころ）そぞろにきたつこと。◉桃源（たうげん）支那湖南省武陵郡にありと云ふ秦の亂をさけたる民の住める所。◉背戶（せど）ぐち。◉茱萸（ぐみ）

◉馬の背や云々馬上ゆたかに夢をのせて行けるなりから風徐に來りて椎の花繽紛として馬背をうつとなり。◉つくづくつら。◉樵夫（せうふ）こき

り。◉青嵐あをみたる山氣。◉あやとるあちらこちらに程よくまとひつける。◉ただ中なか。◉畫の中よりのやうな景色のなかより。◉慇懃いんぎんていれ。◉やさし柔和。◉つはもの軍兵。◉夢の名殘り見はてぬ夢の殘り惜しきを云ふ。◉古を偲ぶ懷古の情をなこす。◉旅枕旅宿。◉折からの云々折角の木曾の旅路を、五月雨のためにながめを妨げられたとなり。◉雨の脚降雨のこと。◉なぶられ戯弄せらるゝ。◉蒸し重り生えかさなる。◉あはひ間。◉何心なく。◉ひやひやつめたく。◉おぼしおもはるゝ。◉古の俤古昔のやうす。◉むかしたれ云々昔は何人が雲の往來する跡をつけて行つて此の懸崖絶壁のところに棧をかけたのであらうぞとなり。◉寢覺牀◉俎板岩◉殊勝げらしく。◉工匠木工のこと。◉峨峨山のかどかどしく聳え立つこと。

二六、わが國の海運

◉杳渺はるかなるさまにいふ語。◉操舟舟をあやつる。◉濶歩おほうやうにあるきまはる。◉羈束つなぎとめて自由を得しめざること。◉天馬駿馬。よくかける馬。◉伏櫪伏して動かざること。◉勃然にはかにおこりたつ。◉蘊蓄ふかくたくはへる。◉素養たしなみ。◉發揮はつきあらはし出す。◉無目籠めなしかご◉慕進にすゝむ。◉肅愼しゅくしん◉綏撫やすんじやすんぜる。◉善隣のよしみ。となり同志◉玉帛ぎよくはく玉や布帛。◉聘問へいもん音物をもつて訪問する。◉八幡船はちまんせん足利の末に九州邊の海賊が明國の海岸を侵略せしに八幡大菩薩とかきたる旗をおしたてたるによつていふ。◉震慄しんりつふるひおそれる。◉葡萄牙ほとがる◉西班牙いすはにあ◉欵待くわんたいしんせつにもてなす。◉使節しせつ國家又は君主の命をうけて他國に使する人。◉派遣はけん出張せしむること。◉劫奪かうだつおびやかしうばふ。◉致命傷ちめいしやう死の原因となるべききず。◉封侯ほうこう大名に封ぜらるゝこと。◉天主教てんしゆけうきりすと教の一派。◉非望ひはう分際をこえたるのぞみ。◉朱印船しゅいんせん幕府の許を受けて海外貿易を行ふ船。◉峻酷しゅんこくするどくむごい。◉鎖港こう外國との通商を禁止すること。◉角逐かくちく互に勝負をあらそふ。◉桎梏てつこく手足を束縛する。

◉萎靡なへちゞんで勢力のふるはざること。◉沈滯しづみどむく。いきほひ　◉國是是とする國論。◉嚆矢はじまり。◉紛擾たこてはりあふ。◉頡頏互にはりあふこと。◉驚倒びつくりする。◉横行おもふまゝにゆく。◉堂堂雄大なるさまに云ふ語。◉爭衡輕重を爭ふ。◉競爭する。◉消長のびちゞみ。さかんになつたりおとろへたり。

二七、蘭學事始　その一

◉西鄙西の方の片いなか。◉外科　◉本草植物。◉通辭通譯。◉和解譯をつける。◉腑分からだの解剖。◉奇遇ふしぎの出會。◉穢多中古以後平民の下級にありし賤民の稱。◉野曝

二八、蘭學事始　その二

◉懶眠なまけて眠る。◉警鐘眠をよびさまする。◉趨勢おもむく。◉瓦解物事の分裂して全からざること。◉對抗向つてはりあふ。

◉面目なし恥しい。◉尤も千萬むりはない。◉宿願年來の願。◉憤然いきどほりて激す。◉斜ならずひとかたならず。◉俚言ことば。◉艅艎ろかい。◉茫然ぼんやり。◉盟主同盟者中の主長。◉連城の璧卞和の璧を云ふ。楚人卞和璧を得て趙王に獻ず秦王十五城を以て易へんと請ひたればこれより連城璧と云ふなり。

修訂中等國語讀本巻六字解　終

修訂中等國語讀本巻七字解

一、忠信の義

◉孔門孔子の門人。◉顔子名は回字は子淵亞聖の稱あり十哲の首に居る年三十二にして卒す。◉閔子騫名は損字は子騫德行を以て あらはる十哲の一人なり。◉仲弓名は雍字は冉德行を以て あらはる十哲の一人なり。◉有子名は若字は子有。◉曾子名は參字は子輿十哲の一人なり志孝道に存す孔子ために孝經を作る。◉工夫品性の修養に心を用ゐること。◉切實にかなへるもの。◉日三省吾身省は察なり日に幾度も心に思ひ事を行ひたる端につきて是非善惡を考ふることを云ふ。◉爲人謀不忠乎人の爲めに事をはかりて心底をつくさないところがありはせぬかと思ふなり。◉與朋友交不信乎朋友と交りて言を實にせざることろなきかとおもふとなり。◉傳而不習乎師より受けては習熟せずして師に對して教を空しくする樣のことはなきかとなり。◉猛省精神をふるひおこして反省すること。◉魯鈍のろくにぶきこと。◉親炙親近して薫炙せらるゝなり。(自然の感化を受ける。)◉亞聖聖人に亞ぐ賢人。◉簡約かんたんにしてつゞまやかなること。◉千古の確言幾年の後までも動かざるたしかなことば。◉體認自分の身にしたしくひきあてゝのみこむ。◉約言つゝめて云ふ。◉折言わかちて云ふ。◉盡己おのれの眞心を十分に人につくす。◉伊川程頤字は正叔伊川は號なり宋人にして、哲宗の時崇政殿說書となる。◉明道程顥字は伯淳明道は其の號なり仁宗に仕へ、鄂上心底をつくす。◉循物無違種々の出來事に遭遇して、言ふ所其實に反することなきを云ふ。◉天の道人爲のものにあらずして自然にできたる道。◉隨神の道自然の命する所に從ふ道。◉不臣臣たる道にそむく。◉淺見絅齋◉明晰はつきりしたること。◉鴻溝の境を出でず漢王項王と約し天下を中分して鴻溝以西の者をさきて漢となし、以東を楚人となさんとせしを云ふ。◉昭烈劉備。◉蜀を取らず劉備始め

劉璋と結び、後龐統の謀を用ゐ、巴より蜀に入り劉璋を襲ひ成都に入り、自立して漢中の王となりしを云ふ。◉匹夫（身分のひくき人。）◉慈養生息（生あるものをいつくしみやしなひ民をやすんずること。）◉所を得る（境遇にやすんずる。）◉表裏支吾（裏表の一致協合せざること。支吾は相支ふる義。）◉成憲（定りておきて。）◉前哲（昔の賢者。）◉後宮（おくごてん。）◉いにしへの文見るたびにの歌（昔の書物を讀むたびに、古聖賢哲の國を治むる狀態をみて、自分の治めて居る日本國は、古の人に對してゆづるところはなきかと思ひ出づるとなり。）◉聖躬（なきやうにする。）◉聖心（なきやうにする。）◉擴充（おしひろめて缺陷なきやうにする。）◉唐虞（堯、舜、時代。）◉三代（夏、殷、周。）◉臥す龍の云々の歌（世に用ゐられずして、民間に雪ふみわけて訪れ問ふ人は誰ならんとなり。）◉言外に靄然たり（おことばのほかに十分みえて居るとなり。）◉姜后（周の宣王の后。）◉身をつみての歌（おのれの身をかざれるさまざまの裝飾をとりさりて、節儉自らひきゐるの心あるにあらずんば、旭日の光の空に威勢よくうつるが如く、日の本の光は外の國までもあらはるまじとなり。）◉かへりみての歌（おのれ心に反省して自問自答して見たならばおのづから是非善惡の道も明らかにして此のたゞしき道にふみまよふのであらふかとなり。）

◉關關和樂（くわんくわんしわらく關々は鳥の雌雄相こたへて聲のやはらげるを云ふ。雎鳩は水鳥の名なり。此鳥雌雄のつがひ定りて相みだれず、常にむつみて遊べども、亦隔りてなることなく、人そのむらがりたるを見ずと云ふことにて、雎鳩の關々としてみだれず相和らげるが如しと云ふ意。）◉相懋（あひつとめ）◉叨に（みだりに）◉摘發（てきはつとり出して）◉庶幾（こひねがはくは）◉聽納（ちやうなふ）

二、今上御製（きんじやうぎよせい）

◉つかさ人の歌（百官の御裁可を得んとてさしあぐる文書の數は多くあれども、一々これを裁斷する間にも、花鳥風月をたのしむひまはあるぞとなり。）◉としどしにの歌（毎年夏が來ると林泉しづかなるところに、暑をさけばやとおもふけれども、政務のいそがしければその心のおもふまゝならずとあそばされしなり。）◉園もりやの歌（むかしわがあつめておいた秋草は、今をさかりと咲きみだるゝことならんが、政務に忙しければ見るひまもなし。さだめし園丁はこれをひとり見ることであらうとなり。）◉しづがやの歌（いまや秋納まつたくをはりて、戸々につみあげし軒端の秋霜がましろくおくよとなり。）◉あさみどりの歌

あぬの如く、すみからすみまですみわたりたる大空のひろき如きを、おのれが心としたものじやとなり。◉積りてはの歌ちりほこりほどの事じやとおもつて油斷をして居ると いつのまにかつもり累りて掃ひかたきまでになるものなれば、物事は些事なりとてうちすてゝおいてはならぬぞとなり。◉こゝろあるの歌思慮深き人の忠言は、病なき人々の藥ともなり、身を益することの多きものなれば、聽き入るべきものなりとなり。◉たらちぬの歌兩親のいましめたまふ家庭の教訓はせまきやうだけれども、やがてはそれが世上にたつ基礎となるものなれば、家庭の教言はゆるがせにしてはならぬぞとなり。◉よもの海の歌四海兄弟とおもうて居る世の中に、なぜなれば風波を起して干戈相交るが如きことの出來るのであらうぞとなり。◉神がぎにの歌衆庶の參拜せるものの中には、神殿に向つて涙をそゝぎて拜んで居るものが見ゆるが、あれは我が父我が夫の覬旋をゆびをりかぞへて待つて居つた妻や子らであらうぞとなり。◉とこしへにの歌千萬世の後までも民やすかれと祈るわが心を諒として、我が皇祖太神宮も我が世を守らせたまへとなり。

三、花の譜

一、梅

◉荒磯の隈あらき涙のすみ。◉歪み◉ゆかしおくゆかし。◉衡門二本の柱をたてゝ笠木をぶせくるしく。◉をかしき趣がある。◉俗を易ふる俗をかへて厚くするをいふ。◉出師の表安子順曰「諸葛武侯の出師の表を讀みて涙を墮さざるものは其人必ず不忠なりといへり。◉墮さぬ◉奴僕。

二、雪

◉紫陽花團花樹の名、高さ五六尺、葉圓くして皺あり、夏の初、小花むらがり開く、花の形まりの如く、初め青く後白し。◉雪と雪の如く。◉偏り◉道に進み道義心の修養成り。◉位高く品格の高きこと。

三、芙蓉

◉巖桂けい。◉瑞香ずいこう。◉薔薇◉海棠◉牡丹◉芍藥◉媚き◉狎る

ゝを許さざるきこと。◉儔なく　◉霧　◉霧立ち罩むる　◉あこがれしむこがれてむれをなやます。◉一しきり一さかり。◉機に先ちぬ時機の來らさきに。◉漣小さゞなみ波。◉枯び果て　◉茄蓮の莖。◉赭く　◉蜂の巣なせる蜂のすの如き、蓮の實のこと。◉趣なからず趣味のないことはない。

四、厚朴

◉朴　◉塵寰世俗○うきよ。◉嘯き立てる嘯きてざましなり。立派◉心花の中心にある蕊。◉差ひ　◉而影ち。◉かうがうしく神々しく、けだかい。◉たゞ人人。凡◉武帝漢の孝武帝、大略あり、四方を討伐して功を收む。◉太閤豐臣秀吉、こゝにて豐臣秀吉の事なり。

〇、石竹

◉瞿麥　◉優し　◉獨言たしむ　◉歌心歌をよまんと思ふ心。

四、振天府拜觀記

◉御意匠御考案。◉宸襟天子のおほみこゝろ。◉扁額よこにながきがくめん。◉疎ならず疎略にはせず。◉かうがうしたうとくおごそかなること。◉砌下階の石疊にしたる所。◉四阿あづまや　◉鏁くさり　◉勾欄かうらんてす　◉防材港内に入るを防くために設けたる材。◉ものし給ふおつくらせあそばした。◉目もくれ目もくれもる。◉胸塞るむねがつまる。◉長押なげし　◉とりどりそれぞれに。◉あざやかはつきりと。◉いたましあはれなり。◉かしこしやこと恐れ多きだ。◉日本錦やまとにしき　◉表裝へうさう　◉草むくさ　◉屍云々かばね兵士の野原にさらした屍に草の生するさまをあはれと思召して也。◉心惹かれこころひかれ氣が　◉目留りめとどまれて。目が他へうつらぬ。◉ひが言道理にあたらぬ言。◉かけまくも畏し言葉にかけて申しあげんも畏多し。

◉櫛風沐雨　雨に體をあらひ風に髪をくしけづる人民をいふ。　◉一本一人　國民の　◉御垣の内　禁苑内。　◉餘榮　死後の　◉御勞　御勤勞。　◉率先　人のさきにたつて。　◉青人草　にて禁中をさす語。

五、聖駕の凱旋を賀し奉る表

◉陛下　天皇皇后太皇太后皇太后に奉る詞。　◉允文允武　文武の德まこと盛なること。　◉資　天質。　◉列聖　代々の天子。　◉洪緒を纘ぎつき　大なる事業をつぐ、天皇の位にまふたいふ。　◉群品　人民。　◉時雨の化　草木發生の時に及んで膏雨のふるが如く教化のよろしきこと。　◉霑ひ　◉盟を渝へ　約に反く。　◉拯難救ふ。　◉震怒　天子の御いかり。　◉大本營　天皇自ら軍事を統監し玉ふ本陣。　◉供御を損じ　めしあがりものをへらす。　◉宵衣肝食　朝はあけはなれぬ内より起き出でて後食事をする、即朝夕勉勵して事に從事せらるゝをいふ。　◉統べ　○統御。　◉百僚有司　もろもろの役人。　◉皇謨　天皇のはかり　◉贊襄　助け成す。　◉納れ　償金を出す。　◉懷く　◉天兵　天子の兵。　◉鷄犬も驚く　人民を掠奪する等の事なきをいふ。　◉渝盟　違約。　◉幣を納れ　◉嬉和　なかよ　◉訂し　◉善鄰　隣國にまじはる、　◉舊誼　もとよしみ。　◉版圖　領地、新に土地を取れば地圖に書き入れるを以て版圖といふ。　◉光華　◉六合　天地四方。　◉現御神　主上のこと。　◉威稜　御威光。　◉五洲　世界の五大洲。　◉伊弉諾尊　◉伊弉冊尊　◉天の瓊矛　◉大八洲國を畫き成し　伊弉諾冊二神、天上より天の瓊矛を以て、大海をかきまぜて矛を引き上げ給ひし鹽のしたゝりよりなりしを、おのころ島といふ、即二神こゝに天降り給ひて、それより日本の國々をつくり給ひしよし神代記に見ゆ。　◉寶劒　三種の神器のひとつ。　◉天つ日嗣　天子の位を繼く。　◉神璽　みしるし。　◉三韓　今の朝鮮なり、（阿部比弁韓辰韓の三つに分る（神功皇后の三韓征伐）。　◉肅愼　今の蒙古なり、日本の古名、武勇羅夫の征伐せしところ）。　◉細矛千足　のすぐれたる意。　◉天

業の業。◉恢弘れる。◉報效國恩に報ゆ。◉華冑華族。◉藩屏らすまがきのこと、即家のまもりとなるもの、故に華族を國の藩屏といふなり。◉丹誠○赤誠。◉聖駕の天子の御のりも陛下のこと。◉還幸へり。◉以聞こえあげる、申上げる。◉萩野由之文學博士、東京帝國大學教授。

六、北京の光景を報ず

◉清里一清里は五町五十四間三尺。◉天津◉消息(通信)。◉宿次ど。◉贏け得得ること。◉帝都首府下。○輦◉遼、金、元、明支那の各時代の國號。◉惰時隨の時代。◉舊蹟ふるいあと。◉高麗朝鮮。◉經由○通過。◉痕迹あと。◉燕國◉風蕭々しくして大きするさびしき分易水寒蕭々は秋風の何となくさびしきといふ、荊軻の歌ひし歌なり。◉翠黛みどりのまゆずみ。◉直隷◉萬戸澤山の人家。◉街區ち。◉瞰伏して見る。◉綠甍青きいらか。◉堂々りつぱに。◉紫禁城天子の宮。◉無垠かぎりなきこと。◉塹壕ほり。◉交民巷居留地。◉緩急危急の場合。◉皮相○外觀。

七、宇治川の先陣その一

◉院法後白河皇。◉狼藉斜ならず亂暴すること一方でない。◉牢籠くるしみこまること。◉顯官、顯職高き職官。◉卿相卿公。◉雲客○雲殿上に仕ふる人々のうへ人。◉誼しみ◉箴しいまし。◉無下にに一向。◉源氏義仲たいふ。◉舊臣もとのけらい、平氏のこと。◉ゆかしし奥ゆかしくてたはしい。◉與力同心力を合せ心を一にす。◉逆鱗天子の御いきどほり。◉侍所家人宿侍の役所なり、その長官を別當といひて諸侍を指揮し、刑罰を決するを司る、次官を所司といふ。◉案の内心配することごとく、てたるたる。◉ゆゝしき大變な。◉引きぬけるとりの◉なべてすべて。◉亂杭川中に打たる

杭。◉逆茂木鹿角の如くに荊棘の枝を以て籬を作りたるもの。◉大名將軍の家臣中守護地頭の領地の大なるもの。◉小名守護地頭の小なるもの。◉黨武士より集れる一團。◉高家身分高き人。◉佐々木高綱。◉梶原景季。◉生嗟◉磨墨◉若白毛◉落し逆落しに馬を走らす。◉かくる駈け向ふ◉引くぞく。◉自然の犬死むだじに。◉木曾殿を傾け義仲を征伐し亡す。◉傍若無人傍らに人もなけに、無遠慮に。◉賜はばや生嗟を與へなんか。◉蒲冠者の弟範頼。◉推參の所望しひてのぞみ。◉狼藉らんぼう、けしからぬこと。◉たばでも賜らいでも、あたへざらんも。◉眞平ひたすら。◉まかり預らむ頂戴せんの意。◉落居○落着。◉辰八午前八時。◉早參朝早くより參殿する。◉所存ある體のある思はく何か思はくある樣子。◉下向ぞ近江よりこの鎌倉に下りしか。◉見參御目にかゝり。◉料ため。◉自由受け渡して勝手に。◉馳せ損じはしらせてはしためる。◉知音知るべ。◉心勞こゝろをわづらはす、心配。◉神妙奇特。◉朝威

朝廷の御威光◉先陣渡されなむや汝はさきがけなして宇治河をわたるであらうか。◉大庭三郎◉殿原貴殿達。◉禦矢◉さしたる事なし之といふ賞美もせず。◉相構へて其考で。◉希代めづらしい。◉勝事れ。◉賜ばざりき◉相計ふん便宜を與へとなり。◉隨分なか。◉そゞろかずがず。◉軍場◉その旨を存ぜられよそのつもりよ。

八、宇治川の先陣　その二

◉大手表門よりせめかゝる兵。◉搦手うら門よりせめかゝる兵。◉垣楯を垣の如くならべる。◉搔きかきなる。◉河の耳河の岸、河端。◉分内場所。◉御曹子部屋住の人をいふ。◉雜色無位の身分のひくき役人。◉歩走かちはしりめしつかひのべ。◉在家百姓の家。◉のゝしり叫ぶ。◉續松松明。◉さりともとまさかにやきはらひはすまいと。◉高

櫓　◉矢立　◉剛の者けきもの。　◉注しす。　◉見參に入るお目にかける。　◉勇をなし勇氣を振ひ起し。　◉色めきけしき立つ、　◉とどめきやかましくさわぐ。　◉鳴をしづめおとをたてずしてしづかにする。　◉軍將大將義經。　◉目をかくけ目をつける。　◉郎等家來。　◉家子奴僕。　◉舍人飼馬。　◉物具〇甲冑。　◉瀬踏瀬の深淺をふみはかる。　◉矢筈を取り弓を射る時に矢の頭を弦にかくる、矢を射るかまへをする。　◉引き取り矢を取りつがひて續々と。　◉剛座に即かむ剛の者の列に入る、剛の仲間に加はるをいふ。　◉橋桁橋板を支へたる横木。　◉振舞はせはたらかせる。　◉弓杖弓を杖につくをいふ。　◉はらはらばた。　◉小冠者元服した少年。　◉名告り　◉潭々水深き樣。　◉滌々ひびろたるかたち。　◉瀧水　◉虹の橋桁虹の如くかかれる橋桁。　◉雁齒の構橋の上に横へたる材木の段の雁の行列の如く、つくりたるなり。雁木の如くに段をつらへる。　◉奇しみ。　◉矢ごろ矢を射るに都合のよき間隔。　◉發ち　◉ゆり合はせの入るすきまのなきやうにするなり。　◉矢閒（矢狹間）矢の飛び來る隙間。　◉たばひる。　◉裏搔くに通る。　◉事新しに及ばず今更いふの意、即事新しくはずともあれの意。　◉春立つ日影春の日かげ。　◉細谷川細き谷の流。　◉その事なり馬の用意をしたのもこの川を渡さんが爲なり。　◉木蘭地赤黃色にして少しく黑味を帶ぶ。　◉黑革威黑色の革で鎧の小札を綴る。　◉三枚兜段になりたるしころの三枚かぶと。　◉滋籐の弓少しづゝ間をおきて細き籐にて卷きたる弓。　◉小中黑矢の羽の、眞中に黑き斑ふある羽にてつくる矢。　◉鍬形打ちたる　◉鍬形　◉錬鐔れりかはのつば。　◉褐藍色の濃き也。　◉小櫻を、黃に返しよろひの革を藍に染めて櫻の花の小さき紋を出し黃色に之を染めかへす。　◉笛籐笛の如く黑くぬりて卷きたるなり。　◉石打の征矢石打の羽　◉鞦韆輪鞍の緣邊を黃金にて裝へるなり。　◉究竟もない。　◉逸物ぐ

兜　双角の如きものをつけたるかぶとをいふ。　◉嗔物造いかめしき太刀なり。　◉虎の皮の尻鞘を作る、一種、征矢は普通いくさに用ゐる矢。　◉一段は一種、征矢は普通いくさに用ゐる矢。　◉二段一段は六間。　◉たばかられされ。　◉御邊御身、あなた。　◉鐙　◉究竟この上もない。　◉逸物ぐ

れたる馬。◉さゞめかし水なざわ〳〵と音をたてゝ。◉曲に渡し眞直に渡るなり、曲は曲尺のこと。◉除け　◉流渡急流に流されながら斜にわたる。◉源平盛衰記二條天皇より安德天皇まで三十餘年間の源平盛衰の跡を記述す四十八卷あり。

九、平家雜感

一、都落

◉めざまし事の意外なるにおどろく。◉餘燼やけのこり。◉墨股美濃國にあり。◉信越俄に雲亂れ木曾義仲が益ふるひて、惟盛、通盛等具利加羅谷に大敗せしなどをいふ。◉み吉野の古今集の歌に「み吉野の山のあなたに宿もがな、世のうき時のかくれがにせん」とあるによれり。◉いかにもならんうちじにすること。◉別路　◉六波羅、池殿、西八條家の邸のある所なり。◉凌辱りようじよくはづかしめ。◉宿房しゆくはう　◉一炬の煙きよけむりしまふこと。◉鳳闕御所○皇居。◉椒房皇后の御殿。◉夜々よなゝ　◉さすらふ彷徨さまよふ○と。◉餘哀あいすぎさつたあとのあはれ。◉狃れなれ　◉弓矢武藝。◉翠華搖々羽を以てかざれるはたにて天子いこと。◉東關平維盛源頼朝追討の大將として東國に下るや、其勢三萬なりしが、富士川に至るときは東關七萬餘騎となりて、源平富士川を狹みて對陣せしをいふ、十萬餘騎は大凡にいへるなり、東關は關東のこと。◉纜ともづな　◉渚水端。◉あなたの空都をいふ。◉舳　◉笛吹く人重盛の三男左中將清經のこと。◉三軍全軍の意。◉敲つ　◉高山林次郎仙臺の人、樗牛と號す、文學博士となり明治廿五年歿す年三十二。

二、清盛入道

◉案ずふ考。◉耽りふけり一方に心を傾く。◉荒ばんあれる、平家滅亡をいふ。◉先世、後代　◉梭機織に用ゆる具なげひともいふ歳月の一たひ行きて再びかへらぬをいふ。◉すべて。◉絲片絲に難きをかけたり。◉よりくづれ縒り崩れたるとは片絲の緣語によりて世の亂

れたるに譬へたるなり。◉風雅風流、歌道のことをいふ。◉一題の遺詠平家一門都落の折、平忠度がたゞ一騎、戰場詠草を取出して、勅選の集に加へられよ、これ今生の本懷なりと頼みしをいふ。◉今生の本懷この世の共に屋島にありしが、都にとゞめ置きし妻子のことを思ひ、ひそかに脱して熊野まで歸り來りしが、途既にふさがりて都に入るを得ず、遂に出家して熊野海に入水す年二十七歳なり。◉恩愛にほだされ惟盛、一門と◉己身◉とこしへ永遠。◉さるにてもそれにしても。◉入道相國清盛のこと。◉おもしろ興味あり。◉いさをし勳功。◉朝家朝廷。◉權柄けんぺいよく。◉私封領地。◉攝籙攝政關白◉成敗政治。◉こゝ平家のこと。◉殿上の交をだに嫌はれし人清盛の父忠盛をさす、忠盛鳥羽院の御願寺、得長壽院を造營せし功によりて、但馬國を賜ひ昇殿を許さる、廷臣皆これを嫉み、豐明節會の夜に乘じて、やみうちにせんとはかれり、即平氏と共に殿上に立つことをいさぎよしとせられざりしなり。◉禿童清盛の間者につかへの童子三百人を選び、髮をかぶろにきり、赤き直垂を著せて、京中に放ち、平氏をそしる者あらば、六波羅につれ來らしむ。◉十善十惡を行はぬこと、佛敎にて十善を行へば天上にうまるといふ、故に天子を十善の君といふ。◉外戚母方の親戚。◉八幡、賀茂の御幸天皇讓位の後は、先づ石清水(八幡)、皇御讓位の後嚴島に詣でんとせしなり、嚴島は清盛の尊崇の社なり。◉八重の潮路海上遠く隔てたとへ。◉ことわり道理。◉不敵大たん不法。◉人もなげ傍若無人。◉ゆゝし忌々しい、甚だしい。◉射山藐姑射の山は支那にて仙人の住め御所なる仙洞を稱し奉るの語となれり。◉重代の帝座代々の都、京都。◉愛宕の里のあはれ平安城のあとのあれはてあはれをとゞむるをいふ。◉なかなかにしさうはいふものゝ、しながら。◉咲きも殘らず櫻花の滿開なるをいふ。即平家驕者の絶頂に達せるにたとふ。◉嵐なくともゝ風がふかないでも、そのまゝに永久にあるべからず。◉東關急を傳へて源氏が關東より起り攻めのぼるをいふ。◉競はす振はず(盛ならず)。◉萌黃匂の鎧萌黃色の糸にてどしたるよろひ。◉運錢蘆毛蘆毛の馬に淡濃の灰色の圓き斑あるもの。◉金覆輪ふちを金にて輪かざるなり。◉容儀すがた。◉帶佩衣服などのきなし。◉富士川の水鳥源平富士川を隔てゝ對陣せしに、夜雁の亂れて立ちけ

れば、平軍、敵の襲來せりと思ひ、一戰にも及ばずして空しく都ににげ上りたり。◉算を亂し算木をちらす。◉北土木曾義仲北陸道より起る。◉木曾の山氣義仲の兵。◉兩山園城寺延暦寺と。◉衆徒坊主。◉反覆平氏に反くこと。◉憶ひ◉命の際○いまはのきは。◉つらかりし無情なりし。◉帝座を驚し天子の御位を動かす。◉擁しひきゐる。◉幽閉おしこめる。◉非道人臣の道にはづれる。◉小松の内府清盛の子重盛卿。◉乃父其父清盛。◉きづな(絆)。◉歸依信仰。◉入道三位以上の佛道に歸依したる人をいふ。◉煩惱佛教の語、人世の慾情苦慮等の煩はしく惱ましきを云ふ、悟の反對なり。◉絆わづらひ。◉大事のきは臨終。◉名利名聞利慾の心。◉淨樂極樂淨土。◉欣求願ふ。◉今は臨終。◉孝養供養。◉執著しふとくいつまでも思ふこゝろ。◉三世の因果過去現在未來の三世の因果應報。◉怨敵をんてきかたき。◉眇軀小さき身。◉浮塵うかべるちり。

一〇、山時鳥

◉山口素堂甲州の人、俳人、享保元年八月歿。◉目には青葉、山ほとゝぎす初鰹夏が來て木の葉がしげつ山ほとゝぎすの聲もする、さて初鰹もとれ出したと初夏の自然界が動き出した感じを叙せる也。◉向井去來◉みづうみの水まさりけりさつき雨五月雨の毎日〳〵ふりつゞて湖水の水もいつになくましたとなり。◉大島蓼太◉五月雨やある夜ひそかに松の月五月雨の空がいつの間にはれて雲間よりもりくる月は松の木の間を照したといふこと。◉凡兆◉渡りかけて藻の花のぞく流かな橋わたりかけたるにふと藻の花のあるを見て思はず立ちどまつてのぞいて見たとなり。◉上島鬼貫攝州伊丹の人、郡山に住し、後大阪に移る、元文三年歿す。◉ゆくみづや竹に蟬なく、相國寺蟬がとまつて鳴いてゐる、しかも其が相國寺といふ寺の境内で有るといふ閑寂の光景也。◉高井几董京都の人、俳人、蕪村の高弟、寛政元年歿す。◉やま寺や、緣のしたなる、苔清水

山寺といへばすでに涼氣肌にせまる、しかも其山寺の縁の下は苔むせる岩石で、玉のやうな清水が沸いてゐる、冷味掬すべし。◉炭太祇京都の人、初世紀逸の門人、明和八年歿す。

◉橋落ちて、人岸にあり、なつの月急雨が降つて水かさが増して橋も落ちてしまつた夏の夕、人は岸にたゝずむで雨後の月を見てゐると、涼しき景色を歌へる也。◉榎本其角近江堅田の人、蕉門十哲の一人、寳永四年歿す。◉夕立や、家をめぐりて、家鴨鳴く沛然として急雨がやつて來たところ頓狂の家鴨のにげ場を失ひて家のまはりをかけまはれる農家の夏景をよみたるなり。

一一、十八樓記

◉亂山一樣ならざる多くの山。◉引きはへはず。◉行きかひ住來。◉高欄高き樓の らんかん。◉鵜飼

◉涼風一味來る涼風。

一二、筍あらそひ

◉初アト主人公「シテ」に對する人物の甲。◉某なにがし◉さいての音便。◉重寳結構。◉參る程に、これぢまゐる内に、これがそのはたけだ。◉シテ主人公のこと。◉結はせ◉總じてすべて。◉何時◉取らしまおとりになすりますか。◉何何と仰せられる。◉なぜに取る申さるゝかの意。「何故に取るか」と◉なかなか謡曲、狂言に用ゐること ばにて「左樣」又は「然り」の意。◉わごりよ汝、こなた。◉構やるなかまひなさるな。◉身共私。◉お主ぬしおまへ。◉ていと是非。◉目に物見せう痛い目に會はすぞ。◉だてる風をするの意。◉おりないらぬ。◉出で合へこい。皆こい。◉後アト主人公(シテ)に對する人物の乙。◉待たしめれよ。待たれよ。◉なうなうこれ。◉出さしましたれた。來合さ◉あれがのがふのが。彼方のいが。◉賴むことではないみはせぬ。汝たの◉さゝぬ差し込まぬやう。◉律義直正。◉おこせよこせ。◉理分勝ち。◉埒が明かぬつかぬ。◉詠まう◉あ

れ汝の意。◉思はず知らぬ考もなく。◉一段ほとく。◉おしやれ申してくれい。◉馬屋

◉相撲角力。◉行司勝負の判者。◉お手ッ「おこて」にて手を一本まゐるなり。◉遣るまいぞじ、がすまいぞに同ず「やるまいぞ〳〵」にて終るなり。◉かやせに同じ。◉狂言記狂言は足利時代に發達せしもの、謠曲の眞面目なるに反し、滑稽諷刺の趣を演ずる樂劇なり、狂言記は狂言を編纂せるものなり。

一三、丈夫の志

◉學究はたらきのなき つまらぬ學者。◉大化大に感化をうけて進歩する。◉優遷すぐれたる方に すゝんでゆく。◉崇拜信仰してあがめたつとぶ。◉欽慕つゝしみしたふ。◉撰定撰定をさだむること。◉壽と夭長命と短命。◉畢生生涯。◉宛としてあたかも。◉建業只期云々事業の基を建つるには、心の中に和聖東の成業を期待して居る。闘爭はひとり邪波翁の如きをれがふのである、よもすがら劍をひつさげて寒月に對して古今を仰俯すれば、古今の興亡成敗の跡が眼中にあり〳〵と顯れて來る。◉天縱天よりゆるされた。◉私淑敬慕する人があるも、親しく其人に接すること能はずして、唯其書をよみて我が身をよくするといふこと。◉切瑳琢磨きりみがきわりてみがく。◉水平線上の人世間普通より すぐれたる人。◉古人に得た範を古人に取つて自分の才能を修得する。◉偉器大なる器量人。◉青蛙の黄犢學青蛙の前岸にある小牛を見て、それ遂に仆れたりと云ふ說。◉顧眄あとふりかつて得意を示す。◉青衿學生。

一四、自警

◉日晷一たび移る月日が經過すると。◉形神既に離るる體と心とがはなれて生死の境を分つ。◉悠悠たりとして心ながきこと。◉自ら強うす自ら心をはげまして意志をかたくする。◉規矩を行ふ規律に從ふ。◉人に規矩を待つ人を規律に從はしめんと期待する。◉空言實行のともなはない行。◉清談老子莊子などの道德經を談するを云ふ。◉一間のちがひ。

一五、白石と宣長

◉白石新井君美の號。◉宣長本居舜庵。◉漢意儒學。◉多面面多くの他方。◉排斥おしのける。◉綿密まかい○詳密。◉敏腕うできゝはたらきのあること。◉卓絶ぬける。◉卓見たぐれた見識。◉皇學國學。◉神道かんながらの道日本國有の道德。◉千古不滅千萬年の後までもほろびない。◉異彩他に異つた光彩。◉峻嚴きびしき事、秋の霜の肌をさすが如し。◉溫厚風の面にこゝろよきが如し。◉廟堂政治を執るところ○朝廷。◉堂々大きく立派、○さかんな。◉忌諱いみきらはれる。◉世の外俗塵を外にする。◉從容自適ゆつたりとつちくつろぐ。◉偉能才能大きな。◉學風學問の流儀。◉實質じつしつなみ。◉創始人のまだ手をつけない事をはじめる。◉啓發あらはす。◉考證いろ〳〵と考へ合せてものゝあかしをする。◉既に前人がとつくに。◉既成こしらへた。◉綜合あつめる。◉組織たて。◉讀史餘論十二卷、史論を收む。◉東雅二十卷、物名の語源を釋く。◉東音譜一卷、五十音を支那音に對照せるもの。◉前人を拔きぬける。古人に出事記の注釋なり。◉玉の緒七卷、てにをはを釋く。◉古事記傳四十八卷、古五十音の外のんの音を發するもの。◉三音考漢唐吳音を論ず。◉半濁音パピプペポの音。◉統一める。◉蕃語外國語。◉鼻音りとする考。◉溷濁深くにごる。◉清純す。◉理想自分の理性によりて最も完全なる考。◉選庭けじめ、ちがひ○差異。◉選路すぢみち○經歷。◉失意不平、おもしろからぬこと。◉參與あづかる、寬永六年、家宣の將軍となるや自石從ひて殿中に給事し、祿五百石、白石從五位下筑後守に仕ぜられ、事を掌る、かくて常に家宣の顧問となり、謀議する所用ゐられざるはなし。◉土屋侯土屋利直といふ、白石の父正濟は侯の足輕なりき。◉時勢の變家宣正德二年に薨じ、儲君も亦次で歿す、是に於て白石の議も用ゐられざるに至れるなり。◉山室山宣長の墓所、◉感懷おもひ。◉軒輊おとりまさり○輕重。◉優然ゆつたり。◉混亂の溷中ごたぐ〳〵としたうづの如き中。

一六、門を造る説

◉左右の翼両側のそで。◉しつらへふる。◉價の定豫定。◉意を得るこゝろ。◉かつかつじて。◉いかめしくおごそかに。◉にくげ氣がすかない。◉片落つりあひを失する。◉似げなしにあはない。◉建仁寺垣竹をわり皮を外にならべきかき。◉澪標みをじるしみを示すために立つるしるし。◉怪しきみたとも見ない。◉飜譯體王朝文平安朝以前の古文をさす。◉覇府文鎌倉時代の文。◉何でう事何とて不思議なること。◉要とある主意とするところ。

一七、そぞろごと五篇

一、雪の朝

◉人のがり人の許へ。◉ひがひがしからむ心のねぢけてひがむる人、無風流。◉くちをしきなさけない。◉をかし興がおもしろし、◉かりしかに「かりきし」に同じ。◉徒然草吉田兼好法師の隨筆。

二、青き眼

◉さしたる事なく之といふ用事もなく。◉むづかしかし煩しいろさい。◉障りさしつかへ。◉いとはしげるさげ。◉心づきなきらぬ氣のの。◉なかなかてかへつの意。◉同じ心にる心の合た友に。◉つれづれさびしくたいくつ。◉阮籍支那の竹林の七賢の一人。◉青き眼阮籍がすきな人の來る時は青き眼をつくり、すかぬ人の來る時は白き眼をなせる故事。◉その事となきに之といふ用事のなきに。◉のどかにゆつくりと。◉聞えさせねはり何ともたよりせざれば。

三、過ぎにし方

◉せむ方なき○やるせなし。　◉すさびなぐさみ。　◉具足物品○什器。　◉反古　◉やり棄つる破り棄つる。　◉なき人亡き人、死んだ人。　◉かきすさびなぐさみにかきすてたるもの。　◉ある人の文今現にいきて居る人の文でさへも。　◉あはれなる興ある。

四、賤しげなる物

◉居たるあたり居る左右に。　◉調度の器具。　◉硯箱なり。　◉持佛堂佛間。　◉前栽壺の内、◉願文佛に願ひ申す文。　◉作善願文に、經を寫して奉るとか、金穀を供へ上は何れも見苦しく賤しきものなり」の意を加へて見るべし。　◉書き載せたるこの下に「以ごみはいくら多くても見苦しからずとなり。　◉文車書物を入れるたなに車をつけて座敷をひきあるくに便せるもの。　◉塵塚のちりてばのごみす

五、見ぬ世の友

◉見ぬ世の人昔の世の人。　◉こよなう此上なく。　◉文選梁の昭明太子蕭の編すると。　◉白氏文集唐の白樂天の文集。　◉老子周の老聃の著、老子道德經とも云ふ。　◉南華の篇莊子といふ書物のこと。　◉博士學問ある人。　◉徒然草吉田兼好法師の隨筆なり。

一八、熊野落

◉大塔宮二品親王後醍醐天皇の皇子護良親王。　◉般若寺奈良の北方にあり。　◉主上天子、後醍醐天皇の御事。　◉囚れ◉虎の尾を履む恐るべき事のたとへ○戰々競々。　◉薄り　◉長夜に迷へるし、暗路を辿るといふが如く安き心なきをいふ。　◉鶉の牀くさばらの牀をいふ。　◉御涙を爭ひ鶉の棲む叢に葉末の露のこぼるるたれ玉ふを云ふ。　◉孤村の辻里の辻。　◉イ

みたちどまる。◉何處（いづこ）◉候人（こうじん）門跡に仕はるゝもの。◉好專（かうせん）◉透間（すきま）◉紛れて（まぎれて）混雑に乗じまぎらし出るなり。

◉おし膚脱がせ（はだぬがせ）おしは接頭語、膚を脱がせ給ふこと。◉期（とき）場合。◉もしや若し逃れなほして。◉御佛殿（ごぶつでん）佛壇、佛像を安置せるところ。◉大般若（たいはんにや）◉唐櫃（からびつ）四本の脚をつけて唐風につくりたる櫃。◉思し召し（おぼしめし）反しへ（かへし）考へ、◉蓋（ふた）◉隱形（おんぎやう）の呪（じゅ）身を隱す呪文。◉兵（つはもの）敵の兵がさかし出して。◉こゝにこそ親王がこゝにおはせりといふをまち給ふとなり。◉淺（あさ）かるべし想像も及ばぬ。◉これ體（てい）の物（もの）こんなもの。◉底（そこ）を飜（ひるがへ）し◉開（あ）け◉案（あん）の如（こと）く思つた如く。◉覺束（おぼつか）なし不安心なり。◉玄奘三藏（げんさうさんざう）支那の僧、印度に渡りて三藏を得て歸る、三藏は佛教の經藏律藏論藏なり、大般若は即ち玄藏の釋したる經なればなり。◉柿（かき）の衣（ころも）柿色の無紋の衣、山伏のきるもの。◉笈（おひ）を掛け巡禮者、山伏などの着ける衣。◉頭巾（ときん）山伏のかぶるもの。◉眉半（まゆはん）にせめ眉の半分かくれるまでつめてかぶるなり。◉先達（せんたつ）先導する修驗者の頭。◉龍樓（りゆうろう）鳳闕（ほうけつ）天子の御殿、宮殿。◉長（ひとゝな）らせ◉華軒（くわけん）香車（かうしや）貴人の乘らるゝ車。

◉單皮（たび）皮足袋のこと。◉脚巾（はゞき）脚絆のこと。◉歷衣（ろき）。◉草鞋（わらぢ）◉草臥（くたびれ）たる疲れたる。◉奉幣（ほうへい）神前に幣物を捧げあげる（奉納）。◉宿々（しゅくく）◉路次（ろじ）途中。◉道者（たうしや）山伏修驗者。◉由良（ゆら）地名、紀州日高郡。◉澳漕ぐ（おきこ）◉櫂（かい）をたえな「櫂の「な」は「緒」なり、かぢの緒がきれて、行方の定めなきにいふ新古今集の歌に「由色の戸を渡る船人かぢをたえ、行方もしらぬこひの路かな」とあり。◉濱（はま）ゆふ（濱木綿）草の名、葉のいくへともなく繁るもの故、「幾重」のかけことばに用ゐしなり。◉紀伊路（きいぢ）◉藤代（ふじしろ）◉和歌（わか）、吹上（ふきあげ）地名、紀州海草郡。◉瑩（みが）ける◉玉津島（たまつしま）地名、和歌の浦にある神社。◉さらでだに（それでなくてさへも、即、普通の旅行でさへもの意。◉長汀（ちやうてい）長いみぎは。◉曲浦（きよくほ）海灣、長き路をいふ。◉切目（きりめ）の王子（わうじ）地名、日高郡切目村王子。◉叢祠（そうし）草村の中のやしろ。◉かたしき衣の袖を敷くこと。◉伊（い）弉諾（いざなぎ）、伊弉冊（いざなみ）◉應作（わうさ）機に應じて化身すること。（うまれかはり）。◉苗裔（べうえい）子孫。◉朝日（あさひ）天子のこと。◉浮雲（うんうきぐも）朝敵のこと。◉冥闇（めうあんくら）やみ。◉玄鑒（ゆんかん）神の照覽。◉丹誠（たんせいひじ）無二（なしびなき）まごゝろ。◉感應（かんおう）神のりやく○靈驗。◉御窮屈（ごきゆうくつ）御疲

勢。◉御目睡とれむる。◉鬢結ひたる髪を兩方へ分けて、わかれて下げたる結方。◉三山那智、新宮、本宮、共に觀現社の所在地。◉十津河　◉道指南ない。◉枕を欹て頭を枕に托するをいふ、れること。◉空翠山氣。◉青壁青き絶壁、◉碧潭あを〳〵としたふち。◉嶮難けはしき　なんじよ。◉太平記花園天皇の文保二年より後村上天皇の正平二十六年に至る、五十餘年間の戰亂をしるす、小島法師の作と云へり。

一九、舊都の月

◉新都攝津の國福原にて、清盛、安德帝を京都より迎へて新に都を定めたり。◉事始造營の開始。◉遷幸天子の御うつり。◉舊き都平安。◉あさましかりつる情けない。◉名所の月須磨、明石などの景色のよき所をいふ。◉源氏の大將源氏物語の主人公、光源氏の事、假作の人物也。◉蹤◉須磨源氏物語に須磨明石の卷ありて光源氏こゝに閑居したる事を作れり。◉迫門海峽。◉繪島が磯淡路の名所なり。◉白浦、吹上、和歌の浦何れも紀州の名所。◉住吉、難波攝津の名所。◉高砂播磨加古郡。◉尾上名所。◉曙を眺めて歸るして月を見て夜をあかすをいふ。◉伏見山城紀伊郡にあり。◉廣澤山城國。◉實定文治建久年間の人、鎌足公十七代の孫、公能の男なり。◉滋し　◉蓬が杣蓬の林の如く生茂りて生ひたあれはてたるをいふ。◉淺茅が原疎らに生ひたる原。◉鳥のふしどみか。鳥のすみ貴人につけたまはる護衛兵をいふ、こゝは從者の意。◉紫蘭草の一種。◉近衞河原京都近衞通りの東河原なり。◉隨身朝廷より守護の爲◉總門外構の正門。◉蓬生のあれはて、草のはへ茂りて、露をはらひてたづねくる人もなき宿にの意。◉さはべらば左樣ならば。◉つれづれくつ。◉格子　◉源氏の宇治の卷源氏物語の宇治の卷に優婆塞の宮、即ち太上天皇の八の宮の、琵琶を前にあきて、月に對せること見えたり。◉優婆塞俗人にして佛門に入れる人をいふ。◉夜もすがら夜。◉撥に

て招き宇治の卷に「柱にすこし居かくれて琵琶を前におきて、撥を手まさぐりにしつゝ居たるに、雲かくれたりつる月の、俄にいとあかくさし出でたれば扇ならでも、これ（撥）しても月は招きつ

べかりけり」云々と見えたり。◉小侍従女、大僧都法印光清の和歌をよくす。◉小夜さは發語、夜といふに同に。◉今様平安朝より行はれたる歌の一體七五調四聯より成る。◉くまなくてりわたりて、かくれたる處もなくてらすこと。・◉おしかへしくりかへす。◉三反べん。◉沾らされ涙をながす。◉平家物語平家繁昌の事より其沒落に至るまでの事蹟をおもしろく書き記したるもの、はじめ盲人をして琵琶に合せてうたはせたるもの。

二〇、月夜逗子より友人に寄す

◉既望十六日のこと。◉晩餐夕めし。◉悠々然たり。◉携へ◉口碑くちづたへ。◉三浦義盛勇にして射をよくす、頼朝に從ひて軍功あり、實朝の時、兵を擧げて北條氏を滅さんと謀り、事ならずして殺さる。◉恩澤おんたくげ。◉絶壁けはしいがけ。◉斗出つきいでる。◉小坪岬こつぼみさき◉恰當丁度よい、あつらへむき○恰好。◉蒼茫ひろびろ○茫洋。◉當面たうめん正面。◉雪舟人、備中の雪舟、通稱は小田等揚、有名の畫工なり、寛正六年明に渡りて大に學ふ所あり、永正三年二月歿す、年八十七。◉淡墨たんぼくぐわすみ畫ゑ。◉恍惚くわうこつうつとりとみとれる。◉突つきたち兀そびえる。◉妙義山◉聯歩快談れんぽくくわいだん秩をつらねて歩みつゝたのしく談話する。◉帽簷帽の縁。◉きしり上りすれ〳〵にのぼる。◉相模洋◉海上に天あり云々月、海上をてらして空が水面にうつれるさまなり、賈島の詩に「棹は穿つ波底の月、舟は壓す水中の天」と、新後拾遺集の歌に「水や空、空や水とも見えわかず、かよひてすめる秋の夜の月」とあり。◉濤◉錦繡にしきやぬいのあるきれ。◉瀾◉玄深○幽玄○深奥。◉蛇行うねりゆく。◉祠堂やしろ。◉嶮巖けんがんきつた岩。◉東鑑高倉天皇治承四年より八十餘年間の鎌倉幕府の記錄なり。◉武衛衛府の唐名なり、頼朝兵衛佐たりしを以ていふ。◉小笠懸射的のこと。◉憶う◉しのばれ出す。◉經照てらし◉井上梧陰故文部大臣、明治二十七年死。◉別墅べつしょ○別業。◉門を敲たゝく○訪問。◉提路みち。◉亙わたり。◉奇礁きめづらしいは。◉狂巖きやうがんおもしろき岩。◉榻腰掛。◉庭除にはさき。◉婆婆木の影の動くさま。◉江湖の漫談こうこまんだんせけんばなし、よもやまのはなし。◉生憎あやにく◉掠めるかす◉三五の村舍三軒又五軒

とちらば　つた村家。◉御最後川　◉汀ぎは。◉蘆洲へたす。◉蘆洲あしのは　◉黯淡まつく　ろい。◉零ち

二一、荒野の末

◉石川依平遠江の人本居宣長の門人、柳園と號す、安政六年五月歿す。◉ものゝふの云々武士が命を露と輕ろんじて戰つたる此荒野が原に秋風が吹くよと秋風瑟々たる故戰場を詠ぜしなり。◉加納諸平遠江の人、和歌山に住す、安政四年六月二十四日歿す。◉笠置山云々晩秋故戰場を過ぎて詠める歌なり、一首の意は秋のくれ方、笠置山をすぐれば、空はかきくもりて、明日より降るべき時雨さへ先き立ちて、狂風ふきすさびてものすごく、當年の事さへ思ひ出さるゝとなり、笠置山は後醍醐天皇のしばしこもらせ給ひし所、山城相樂郡にあり、あすの時雨云々は、時雨は冬のもの故。今日は晩秋の事なれば、明日より降るべき時雨を、はや今日より降せての意。◉飯田年平大平、諸平に學ぶ、石園と號す東京に住す、明治十九年六月二十六日歿。◉こしかたは云々過ぎて來た方を顧れば遠く霞みわたりて、こゝ春草の生ひ茂つてゐる青野が原の古戰場にはきゞすの聲がしてゐる、青野原は應暦元年、北畠顯家兄弟が、土岐頼遠、桃井直常等の兵を破りたる故戰場なり。◉土岐秋充傳詳かならず。◉ふき下す云々木の葉のちるを見るもぞつとするとなり、倶利加羅山に義仲が平氏を木葉を散するやうに討滅した其倶利加羅下ろしの山風が吹き下して來るゝに擊破す、平軍木葉の如くにこの谷におち入りて死せりといふ。◉山田百枝倶利加羅は壽永二年五月、木曾義仲、平維盛の大軍をこは今の世にも瀬の流と共に世に名高く傳はるとなり、佐々木高綱、梶原景季が宇治川の先陣を爭ひしこと前にあり。

二二、故郷その一

◉繡ぬいある美しき衣。◉沐猴冠者猿に冠を着せた如くふつり合でいやしきものを指す漢の項羽をあなどりていへる語なり。◉眞理誠の道理。◉蘊み　◉笈を負ひて遊學する事、笈は本箱なり。◉懷ふかたち。◉歸心矢の如く故郷へかへりたくてたまらぬ。◉戀戀した　◉大宰相臣総理大臣なり　◉郷先生故郷で學んだ教師。◉ミニスター(minister)英語にては、ミニスターといふ時は大宰相といふと新教の傳教師といふ二樣の意味を含めり。◉改宗宗旨をかへる。◉胡ぞ　◉戯言ぞんじやうだんをいふ。◉焉ぞして。◉與る

◉さがりぬ　◉韓信漢の高祖の三臣の一人、少時辱を忍んで野人の跨下をくぐり、發奮して榮達するや昔日自分に辱を與へたる惡少年の恨に報ゆるに德を以てまはる。

せり。　◉擧げげる。　◉都尉知事。　◉漂母川に衣を洗つてゐた老婦なり、韓信曾て漂母のめぐみを受けたる故、立身して其恩に報ひしなり。

◉六國の相印六國合縱の策を立て、成功して六ヶ國の宰相となれるなり。　◉炊がし　◉嫂兄嫁。　◉紝はた。　◉蛇行匍匐

下座する。　◉郊迎郊外に出迎ふ。　◉漢高漢の高祖。　◉豐沛　◉父老老人。　◉小田原陣天正十八年の北條征伐。

◉旋るする。　◉銀杏村秀吉の故郷。　◉退休大統領を止めて退く。　◉依然とのつばりも通り。　◉爛立派。　◉草

澤、山野草ぶかい片山里。　◉不世出世に稀なる。　◉秋風埋レ骨故郷山孤軍奮闘したれども、運命窮まりてすでに矢盡き刀折れ、

如何ともする事が出來ない、たゞしかしうまれ故郷の秋風吹くところ、屍をうづめるはせめてもの本懷なりとの意。　◉好遇ていれいのあしらひをうける。　◉虐待むごいあしらひをうける。

◉魯孔子は魯の昌平郷に生る、然れども其本國に遊歴の間に送れり。　◉遲々ぐずぐず。　◉基督クリスト　◉儕せい

◉偕に　◉豫言者未來の事を知つて告げる人。

二三、故郷その二

◉眼孔めがこうめ、みかた。　◉近隣きんりんとなりきんじよ。　◉客觀的自己を離れて存する事物。　◉感觸感情に觸れる。　◉客舍幷州已

十霜、歸心日夜憶咸陽、無レ端更渡三桑乾水一、却望二幷州一是故郷幷州の客舍に居ること

已に十年である、郷里に歸りたくて日夜故郷なる咸陽を思ふて居つた處が、今回端なく更に桑水や乾水を渡り、幷州を出たところ夫より却つて客たりし幷州をのぞみ見れば、却つて故郷の感がする。

◉愛郷故郷をしの念たふ心。　◉神聖きよくして俗念に汚されぬ。　◉聯感一つの事より他の事を思ひ出す感じ○聯想。　◉茫々ぼうぼうひろ

◉馳驟はしりまはる。　◉碧血赤き血汐。　◉勃々おこるぼつぼつかんに。　◉恍然うつとりとして。　◉白熊しろぐまの如き猛獸の住ねる恐ろしき地。

◉倣すみとめる。　◉混々もや〳〵とした。　◉怪霧ロンドンは年中霧を以てとさるゝを以て有名なり。　◉インスピレーショ

ン(Inspiration)。◉活歴史活きた歴史。◉千絲、萬縷たくさんの絲。◉濃◉想念おもひ、かんがへ。◉詞宗文豪。◉告別こくべつかれのことば。◉漂ひ◉波瀾なみ。◉泛々水に浮び漂ふ樣。◉風雲の氣意志の方面の發展なり。◉兒女の情感情の方面の發動。◉熱腸あつき感情。◉五丈原ごじやうげんとう蜀の地名、諸葛亮こしに魏の司馬仲達と對陣十二年に亙れり。◉南陽なんやうの舊草廬きうさうろ南陽は諸葛亮、即ち孔明の郷里、草廬は草葺の小さき家也。◉遊子いうし故郷を出て旅行する者。◉田夫野人でんぷやじんかの人々。◉望郷ぼうきつう故郷をのぞむ。◉鼾聲かんせいきく〻いびきの音。◉綠秧りよくわう稻の苗の綠なるところ。◉耦耕ぐうかう夫婦して耕作する。◉飄然へうぜんふらりと。◉悚然しようぜんぞつとする。◉佇立ちよりつたゞむ。◉明星みやうじやう宵に出るつよき光りの星。◉精金しやうきん尤もよき金、◉天の原はら云々つてゐるが、何千里と故郷に隔絶せる羈旅の客であるかと思へば感慨無量なり。◉春日かすが奈良にあり。◉千秋せんしうの下もとまでも、◉悽然せいぜんいたましむる。◉能因法師ういんはうしの者しやりう流にこもりゐて「秋風ぞ吹く白川の關」云々の歌をよみて白川の關を宛も超えた如くいひふらしたるといふ。◉琴線きんせんことの絲、こゝろにたとふ。◉妙音美妙なこゑ。◉德富猪一郎とくとみゐらう蘇峰と號す、志賀矧川、陸南暢と共に明治三大時文家の稱あり。

二四、諷諭

一、石清水詣

山城國綴喜郡にあり、男山八幡宮なり。

◉仁和寺にんなじ◉かちろいて、徒歩、あるなり。◉高良武内宿禰を祭れりといふ。◉かばかりと男山八幡宮なりと心得たこれだけの事か(これがゆかしかりしおくゆかしい。◉ほい本意。◉先達案内者。◉あらまほしきありたい。

二、獅子狛犬

神前の前にすゑるもの。

◉大社おほやしろ◉志太姓なり。◉しる處ところの地(自分領のなさめる處)◉いざ給へさあお越し下さい。◉かいもちひたぼ

ち。◉めさせむげん。◉具しもてひて。◉ゆゝしくに。非常◉信おこしたり信心の念を起したり。◉殿ばらさん。◉殊勝（すぐれた事めづらしい）。◉とがめずや氣が附かずや。◉無下けしからぬことの意。◉つとげ。◉おとなしくの意。温厚に◉さがなきわんぱくの、いたづらな。◉わらはべ子ども。◉奇怪けしからぬこと。◉去に

二五、國民の抱負　抱負は志を懷抱すること。その一

◉太古大昔。◉漠ばつとしてとりとめなきこと。◉史筆以來歴史ありて以來〇有史以來。◉滔々たうゝさかんなこと。◉朝宗そうぎ入れること。◉猶太人ジユダヤ人◉希臘ギリシヤ（グリース）。◉傳播傳へ廣むること。◉天職生れながら其身に自然なはりたるつとめ。◉羅馬◉蠻夷えびす。◉襲撃おそひうつ。◉剝奪はくだつうばひとる。◉掌握手に握ること。◉寄與あたへる〇貢獻。◉廣布ひろめしく。◉閊斷たえまひま。◉斬新極めて新しきをいふ（趣向の新らしきこと）。◉鼓舞はげます、ふるひおこす。◉衰頽おとろへすたれる。◉狀態ありさま。◉潤澤つや、うるほひ、かざる。◉燒點心中。◉風靡したがへなびかす。◉驚天動地天を驚かし地を動かす樣な大事業。◉瞠若驚きて目を見はるさま、あつけにとられたるをいふ。◉旗幟はたゝのぼり。◉呆然ぼんやり、あつけにとられたるさま。◉影響に波同じ。◉亘る◉一刹那ごくわづかな間〇瞬間。◉吹聽ふいちやうひろめる。◉私にひたかに◉蠢動しゅんどうぐづ〳〵うごくく。◉埃及エジプト◉攪破かきみだす。◉發顯ひらきあらはす。◉括約くわつやくしめくる。◉西漸せいぜん追々に西にうつること。◉睹みる。

二六、國民の抱負　その二

◉識者しきしやたる人、物事をよくわきまへ知識ある人。◉先覺せんかくる先輩〇學問又は知識ある先進。◉宣傳せんでんのべつたへる。◉悟了さとりれうし知る。◉堰せき

◉一日千秋の思つやうな思ひ。一日を千年も待　◉指導者なすもの。　◉思惟思ひかん　◉權謀はかりごと○策略。

◉術數たくみ、はかりごと。　◉一視同仁人に對するに甲乙の區別なく、公平ににに愛を以て接するをいふ。　◉横道あしき道。　◉勦誅ころす。　◉鎖港港内に外國船の入るを禁じ通商をなさゞるをいふ。　◉攘夷外國人を追ひはらふこと、　◉陋見間違つた考。　◉駸々盛にすゝむありさま。

◉修練へる○鍛練。　◉狂奔熱心に奔走すること。　◉抛つ　◉土芥土や芥の如く何とも思はぬ。　◉輕卒かるはづみ。　◉擧動ふるまひ。　◉身を殺して仁を爲す一身を仁義のためになげうつをいふ。　◉敏速すばしこくはやい。　◉沸騰水のわきあがることにて、事に熱中するをいふ。　◉師表○模範。　◉氾濫はびこりひろがる。　◉排除きのぞく。　◉絶海海遠くかけはなれたる海の上といふ意。　◉超越ぬきでる。　◉掃蕩はらひつくす。　◉扶持たすけたすける。　◉驕傲おごりたかぶる。　◉掣肘自由を妨げる。　◉壓倒おさへつける。　◉根絶ねだやしする。　◉化身りかはつた身○權現。　◉警醒いましめさます。

修訂中等國語讀本巻七字解終

修訂 中等國語讀本卷八字解

一、團結心と家族制

◉專制（せんせい）自己の意志の發動によりて政を行ふをいふ。◉廓大（くわくたい）大きくひろげる。◉族制（ぞくせいせい）治家族を國家社會の單位として、家長をして家族及び財産を支配せしむる、制度。◉交渉（かうせう）◉盡未來（じんみらい）時間のつゞく限り幾萬年の後までもの意。◉氏姓（しせい）氏は各個の家の稱號にして苗字ともいふ、新田足利德川等の如し。姓は氏族に呼ぶ名にして源平藤橘の如し。◉氏神（うぢがみ）氏の祖先をまつれる神、藤原氏の天兒屋根やはらぎむつまじくする。◉和氣靄々（わきあいあい）おだやかな氣のいつまじくする。◉歸趣（きしゅ）おもむき向ふところ。◉沈滯（ちんたい）しづみとどまる。◉萎（ゐ）

靡（び）勢がよわりちゞまる。◉犧牲（ぎせい）いけにへ。或る目的のためになげだして身がはりにする。◉歸嚮（ききやう）するところ（おもむきむかつてゆく中心點）。◉註脚（ちうきやく）説明をかきくはへること。◉抑揚波瀾（よくやうはらん）或は高く或は低く波濤の高低あるが如く、國勢の變遷すること。

二、壇の浦　その一

◉水手（かこ）船をつかふ水夫。◉かんどり（かぢとり）。◉檝（かぢ）◉射伏せられ（いふ）射ころされる。◉女院（にようゐん）皇太后の佛門に入り給ひ、門號ある御方の稱、こゝは安德帝の御母君をさす。◉二位殿（にいどの）建禮門院の母。◉女房（にようばう）宮中の官女。◉ともかくもれと（かれこと）。◉東男（あづまをとこ）關東男子。◉取り入れ（いれ）てる、◉しづかなるいた（おちつ）。◉練色（ねりいろ）◉そばし（は）。◉先帝（せんてい）安德天皇◉ねびととのほらせ（おとなび）たまふ。◉あてりつば（上ひん）。◉ふさやかて（ふさ〳〵し）居ること。◉御背（おんせな）にかけ（後髮をせなかへふ）りかゝれるをいふ。◉御氣色（みけしきやう）す。◉兵（つはもの）◉みもすそ河（がは）の流（ながれ）には（御裳裾河（五十鈴川の上流）は伊勢大神宮の

前を流れてゐる河なれば天照皇大神の御子孫なる天皇の御ちすぢになれば、涙の下にも都ありと今ぞ知れりとの意。◉八條殿の名。◉國母天皇の御母。◉建禮門院平德子、清盛の女、殿は支那にありて皇城にありし殿門の名なり、下の不老門も同じ。◉乳母帥典侍◉典侍◉とゝのへて。◉長生長生天皇のこと。◉萬乘天皇のこと。◉不老限りなきを壽きたるよりの名。◉鱗魚類。◉十善◉蒼海青い海。◉有待凡夫の身、いつか死ぬべきのみあるなれども誰とても賴みのあるべきことにあらぬどもの意、こゝの書きぶ方は「誰かたみのあるべきかはの身なれども」といはんが如し。◉誰かは、たれ◉清涼、紫宸殿の名。◉玉の臺共に御立派なてん。◉闘戰、兵革のこと。共に戰爭◉滿じる。◉御燒石温石（おんと）て冬季石をやきて體を暖むるもの、◉番人名なり。◉馬允眤◉郎等。◉熊手昔時敵をひつかけ捕ふるに用ぬたる一種の武器。◉から卷き手にまきつける。◉藤重◉御衣御きもの。◉翡翠つやゝかな髮。◉しほたれたる衣のぬこと。◉もしやの時萬一の場合。◉唐櫃支那風につくりたる脚のあるひつ。◉もたり持つてぬる。◉唐綾りたるあや。◉一襲◉畏り正しく座す。

三、壇の浦　その二

◉打物太刀。◉矢頃矢をいるべきほどあひ。◉あだ矢空しき矢、あたらぬ矢。◉よしなき事つまらぬこと、いらぬこと。◉あながちにて。◉九郎冠者源義經、冠者は元服して冠を着けたる壯年の稱。◉大童頭髮をふりみだしたるをいふ。◉草摺鎧の腰部にさがりたる短き裾。◉したゝめ仕たくする。◉小長刀◉僻目まちがひ。◉故太政入道清盛。◉尻足あしあとあし。◉除けそこのけよの意。◉ものもの し又めんだうな。◉早業◉さしくゝりたる船と船とをつなぎあはせたる。◉弓だけ二つばかり弓を二つつぎたるほどの距離。◉力なくなく。◉面を向け難しか

ひあつて、あひてになることかたし。◉安藝大領大領は郡司のこと。◉やは(やはか)。◉私の力業自分勝手の、人にしられぬ力業。◉剛の名強いふ名。◉仔細にや及ぶべきと承知したるないふ。相談には及びません◉錏て首をかくすもの。◉つれなきはたよりない、はかない。◉大臣殿◉一所二人。◉心う心うき○殘念。◉など何故。◉いづちこ。◉世に殊の外に。◉きはみり、きはま極。◉いかにもなり給ひなましたのであらう。どうにかなつ◉赤符赤き木のしるし、平氏は赤色を用ふる例なれば符も赤きを用いて平家の章とするなり。◉渚なみうちぎは。◉薄紅◉行列。◉蜀江の錦蜀の國は錦の名産地なり。◉玉樓、金殿共に立派なる御殿。◉思ひならべて彼れとこれとをくらべて。

四、修善寺便

◉雨の日ぐらし雨中の一日をくらして。◉無聊れづれなり。◉荒涼ものすごし。◉慘憺しきわざは。◉宿業前の世の罪惡によつて自ら作り出したるむくい。◉低回こと能はざる貌。◉一切經堂◉奥津城は◉考證證據を考へて證明する。◉丈六佛尺一丈六ある佛像。◉暗涙ひとしれぬなみだ。◉蒲冠者◉徹夜夜ぼし。◉黎明あけがた。◉交睫まぶたをあはす。◉玲瓏明にすきる。◉踴躍おどりあがる。◉撮影しやしんをとる。◉逸りあせる。◉應急にあはせ。◉やをら悠然。◉赤脚すあし。◉印畫にうつる。◉倥偬はしい。◉惡箋あしきかみ。◉才覺くめんする。◉居然そのまゝのといふ義。どつしりしたること。◉地紙扇子唐紙などに張る紙。◉短冊◉檀紙◉すがれ末枯の義。おとろへつきんとする意。◉山厨山中の臺所。

五、外人の觀たる富士

◉臥遊山水の畫幅などを見てたのしむこと。◉象徵そのもの自身が説明を要せずして直にある意義を發揮すること。◉超然ぬき出て居ること。◉端

然姿勢正しく。◉御衣の裳衣のすそ。◉優然ゆつたりと。◉湄◉一抹の翠黛どの緑のまゆすみ。◉配合の致のおもむき。◉紅曉くれない の旭日。◉暮靄くれ方のもや。◉超脱ぬけいづる。◉崇高かしこ。◉丹青家畫家。◉鐵筆家彫刻家。◉星斗闌干星の光のあざやかなること。◉餘蘊つゝみたをおちつけて休息する。◉眉目まくすがた。◉難俱儔共にならひたつことはできぬ。

六、自然のあはれ

一、月と露

◉をかしけれおもしろい。◉あはれ情がこもつておもしろし。◉折に觸れ時に際しては。◉更なりもちろん、いふまでもなく。◉心はつくめれあはれと思ふ心がつく。◉時をもわかず時を限らず、いつでも。◉沅湘沅水、湘水の二つの河なり。◉日夜よるひる絶えず。◉愁人こゝろにうれひのある人。◉折を定めずありくこまよひと、ぶらつく○逍遙。

二、花と月

◉隈なき晴れわたりて一點の雲なきをいふ。◉見るものかは見るにかぎつたものではない。◉垂れ籠め垂れこめて其の内にこもりねること。◉春のゆくへ知らぬ春のすぎ行くこともしらぬ、即花のひらき、ちるをも知らぬ。◉萎れ◉歌の詞書歌をよばえをかくこと、歌の前がき。◉まかりける行きけるといふに同じ。◉障るさしつかへ。◉さる事ともつな頃。◉望月十五夜の月○滿月。◉うちしぐれ少し時雨のふつて月の雲にかくれたる。◉又なく又となく、此上なく。◉椎柴椎の柴。◉きらめきひかりかゞやく。◉心あらむ風流心の有る。◉友もがなし友がほしい。◉閨ねや

七、百蟲譜

◉籠にくるしむ苦しむべき。◉莊周が夢莊子といふの意。◉古今の序古今和歌集の序文、(紀貫之、勅をうけて撰したる和歌の書)。◉つらま。◉翁芭蕉翁(俳人、正風派の元祖、松尾桃青といふ)。◉託しけめこの蝶に託してはかなさを諷したるならんと

◉さすがふものゝ。◉卯月四月。◉端居めづらしきいきのこりるなり。◉蚊遣焚き蚊をおひはらふ爲めにふすべる火。◉藪蚊と世に稱す。◉五月晴梅雨(つゆ)のはれあがりたる時。◉絞る◉七賢支那晉の世に七人の隱者あり竹の林にて宣會せり竹林の七賢人」

あの盛んに鳴く聲をきけば、秋になりてすぐ死ぬべきものとも思はれぬ。◉初蟬◉やがて死ぬけしきは見えず

聞ゆるなり。◉畫の梢暑さの絶頂の意。◉つくしこひし鳴く聲のしか

◉諺◉あはれものあはれなこと。◉蜀魂しよくこんほとゝぎすのこと。◉叫ぶ◉おなじ玉蟲も、黃金蟲も同じく寶の名

に呼ばるゝども。◉寶の名に呼ばれて寶の玉といふ名をもつて居るといふ。◉黃金蟲◉蜉蝣朝に生れて夕方に死する故、人間の常に譬へらる。◉蓼き草。◉物ずきの謗(俚諺に「蓼くふ蟲もすきずき」といふあり)。◉蝸牛◉もののであるに。◉雲水天下をあるきまはる行脚の僧にたとふ。◉歩横に歩行する樣、譬に引くものなしとなり。◉促織◉轡蟲◉音なく聲。

◉その木その名の松の木にばかり鳴く蟲にあらざるに。◉むくつけき氣もちのわるいいやな蟲(毛蟲のこと、毛蟲の中にも松蟲といふものありての意)。

◉一在所あるぬなか。◉後生未來のこと、即佛を信じて極樂往生を願ふなり。◉松蟲の類同じ名でありながら其行ふ所相反す。◉蟋蟀

◉つゞりさせなき聲、(秋なく故、衣をつゞりさせよと寒さを教へるなり)。◉われからと これもなき聲、(自業自得と身の上をなげく)。◉蓑蟲◉ちゝよ枕草紙(清少納言の著)に「蓑蟲いとうとましなり、鬼の產みければ親に似て、これもおそろしき心地ぞあらんとて、親の惡しき衣ひき着せて、今秋風の吹かん折にぞ來らんずる、まてよといひて逃げて去にけるも知らず、風の音聞知りて、八月ばかりになればちちよ〳〵と、はかなく啼く、いみじくあはれなり」とあり。

八、うへ野山

◉花上野の山は今やいちめんに花がさきそろつて、遠方より見れば、とのなき柳のいとによりてこそ、堪忍ぶくろはぬふことが出來るのである。◉時鳥時鳥の鳴くのを十分たんのうするほどにきくことの出來る地は、さかやへ三里豆腐屋へ二里と云ふほどの土地であるよとなり。◉時鳥時鳥のないた聲をきいて窓をあけて空をながむれば、時鳥は見えずして唯有明の月が一輪殘つて居る、あのぼんやりとしてあきれかほにのこつてゐるのは、後德大寺の見た月であるよとなり。◉月大空にまんまろくすんで居る月をながめつゝ考へて見れば、こよひは丁度中秋十五夜であるわい。◉雪古人はこまとめてもなしとよんだが、われはいま雪降る中を來つれども、雪袖うちはらふひまも坊主合羽を着て居れば、そんな心配もなしといふなり。◉歌人に贈る貫之は歌の德をあげて天地を動すと云うてゐるが、人か下手なれはこそだ、もし上手な人があつて天地をも感動せしめ、ゆるぎ出す樣の事があつたなればたまつたものでないと云ふことなり。◉述懷しまひにはかくなるものだと云ふことはかれて承知しながら、遂にこんなことになつてしまつたと、毎日々々愚痴をこぼしながら日をおくつて居るとなり。◉柳しなしなとして風のまにまになびいてあらそふこ

九、戰爭と文學

◉靜相的ずかな方面。◉動相靜相の反對にてはたらく方面。◉象ち。◉二者の關係の二つの活動の關係。◉複雜いる。◉換言へる。◉因緣因。◉果報結果。◉反映反射、つること。◉動機事おこるはじめ。◉因果す原因となり結果となる。◉佛國革命貴族等の專横を憤りて起り、途にルイ十六世を裁判して配刑に處し政權を國會に收めたり、實に紀元千七百九十三年なり、されど朋黨の爭次いで起り、殘忍の殺戮行はれ、恐嚇政治の頗る甚しかりしが、ナポレオン一世の出づるに及びて悉く壓服せられたり。◉ルソー十九世紀に於ける極端なる民主主義論者なり。◉唱道いふ。◉一導火一つのみちび。◉白日夢畫なかに夢見てゐるやうな。妄想。◉譫語たは言ごと。◉激昂はげみて意氣のたかぶること。◉得喪得失に同じ。◉聯關つらなる。◉普遍わたること。◉三昧熱中すること。◉枘鑿相容れざる枘にて四角なる栓、鑿は圓鑿にて丸くくりた（あまねく）。

ろ孔（アナ）なり、即丸きあなに四角の枘をはめんとするをいふ。◉殺伐（さつばつ）あらつぽい。◉等閑視（とうかんし）なほざりに見る（輕く見らるゝこと）。◉詩靈（しれい）文學的の精神。

◉天馬（てんば）詩靈と同じ意なり心の變幻極りなく一種ふしぎなるはたらきをいふ。◉蟄（ちつ）する（つこむ）、かくれる（ひ◉純乎（じゅんこ）全く純然。◉客觀（きゃくくわん）の詩客觀的に世態人情をうつしたる文學をいふ、即世態人情を外面より見て、作者の意見を加へずして、ありのまゝにえがき出せる詩なり。◉主觀（しゅくわん）の詩自分の感想をうつしたる詩、客觀の反對にて作者のこゝろを主として外面の一切を觀察したるもの。◉抒情（じょじょう）情をのべる。◉述懷（じゅっくわんかい）をのべる。◉實感（じっかん）實際のかんじ。◉多感（かん）感情に富めること。◉多情。◉繻腹（しゅちゃう）はなやかなこゝろ（詩文の思想にとみてあること）。◉哭（こく）せる。◉現（げん）現在と未來（當來の略）。◉好（かう）尚（しゃう）ずき。◉吐露（とろ）いひあらはす。◉協（かな）ふ◉揣摩（しまあてずゐり）やう〇臆惻。

一〇、爲朝（ためとも）の軍議（ぐんぎ）その一

◉新院（しんゐん）崇德上皇は鳥羽帝の御子、五歲にして即位し給ひしが、島羽の寵姬美福門院、皇子體仁親王を生む、帝これを鍾愛して遂に崇德帝をして位を讓らしむ、體仁在十五年にして崩ず、是に於て崇德上皇、皇子重仁を即位せしめんとしたまひしかど、美福門院これを忌みて、上皇の弟雅仁を立つ、これを後白河天皇といふ、時に關白藤原頼長ひかに崇德上皇にすゝめ兵を擧ぐ、源義朝、平清盛等擊ちてこれを平ぐ、これを保元の亂といふ。

◉大炊御門表（おほいのみかどおもて）◉平馬助忠正（へいまのすけただまさ）平正盛の子清盛の叔父。◉多田藏人大夫頼憲（たたのくらんどたいふよりのり）◉六條判官爲義（ろくでうはうぐわんためよし）◉猛勢（たうせい）なるべきが源氏のこと故、軍勢も多くさかんなるべき筈なれども。◉多分（たぶん）大部分。◉鎭西八郎爲朝（ちんぜいはちらうためとも）爲義の第八子爲朝の弟、豐後に居りしを以て鎭西八郎と稱す。◉具（ぐ）する從へ。◉不覺（ふかく）しくじり、あやまり。◉西河原表（にしかはらおもて）は北殿の西方の門にて西は加茂川の川原なり。◉器量（りやうこ）體格の意。◉矢（や）つぎ早矢を射ることの最もはやきこと。◉手利（てきき）上手。◉弓手（ゆんで）弓をもつ方の左のこと。◉肘（かひな）◉馬手（めて）馬に乘りてたづなを持つ手。右のこと。◉矢（や）束（つか）矢の長さ（束は矢の長さをはかる名）。◉不敵心（ふてきこころ）剛い。◉所（ところ）を置（お）かず（ゆつらぬ）。◉傍若無人（ほうじゃくぶじん）人を人とも不興にて勸當すること。◉めのと役（もり）。◉總追捕使（そうつひをし）罪人を捕へる

諸國の檢非違使を總轄する役。◉勢も附かざるに軍勢も未だ集まらざるに。◉押しなつて強てなる(官の許しなく私になること)。◉香椎宮◉神人神官。◉いにし去る。◉公能◉上卿宮中の會議の頭。◉外記太政官所屬の記錄を司る役。◉宣旨みことのり。◉宰府◉忽諸ゆるがせ。◉朝憲朝廷のおきて。◉綸言天子の御旨。◉梟惡あしき行ひ。◉狼藉らん藉ばう。◉禁進亂暴をとゞめ、捕へて朝廷へ進める。◉執達文章を取次ぐことの如しの意。◉如レ件かくの如しの意。◉參洛都へまゐる。◉解官官をやめる○免官。◉科つみ。◉上聞おかみへ。◉形の如く普通の如く、あたりまへ。◉三町礫

一一、爲朝の軍議　その二

◉目角眼のかど。◉二つ切れめじりに二本の筋ある英雄の相。◉直垂◉八龍◉鎧◉唐綾◉威し緒よろひのこざれを結にてぬふこと。◉大荒目たゞしの糸のあらきなり。◉尻鞘毛皮にて太刀の鞘に合せて袋に作り、遠行の時、刀のさやにはめるもの。

◉五人張の弓五人がゝりにて弓をまげてつるを張メ強弓をいふ。◉釖矢をとめるうち釘。◉三十六差(矢を入れる)に三十六本の矢を入れる。◉黑羽の矢鷲の羽の矢。◉樊噲漢の高祖の臣、猛勇を以て名高し。◉ゆゝしかりきこと勇しきこと。◉張良の高祖の謀臣。◉吳子、孫子共に兵法の達人。◉養由弓の名人。◉翔る◉擧り物ことごとく見折つた。◉高松殿主上後白河天皇の御殿。◉心にくくも候はず頼みにするほどの大將もあらず。◉眞中指して喉のまんなかをねらひて。◉射透し射て貫く。◉へろへろ矢ひよろ〳〵した矢。◉御ゆるされ御免を蒙りて。◉駕輿丁ごき。◉掌を反す わけもなく容易なるをいふ。◉荒儀あらつぽい申し分○疎略。◉無下にみに。◉見參お目にかゝること。◉公卿三位以上の人。◉殿上人四位五位の昇殿をゆるされたる人。◉上べ。◉承伏其の說に從ふ。◉退り◉先蹤先例といふに同じ、ためし。◉似も似ぬ合戰のことは學問上の事とは似よりもつかぬ別事なりとの意。◉大衆多くの僧侶。◉保元物語保元月

後白河常と崇德上皇との御戰爭の事を記す、著者不詳。

一二、奥の細道

◉風騷の人風流人。◉俤◉白妙◉あやめ葺く日五月五日。◉馬酔木◉四維國界四方の國境。◉按察使諸國の風俗教化の狀況を視察する官。◉歳次はしまり。◉節度使地方の軍旅をすべかれて諸政を收締る官。◉歌枕歌によみ入るべき雅なる地名。◉行脚の一德諸國をめくりあるいた一つの利得。◉存命の悅いのちをながらへて居つた甲斐あるよろこび。◉羈旅の勞たびのつかれ。◉泪◉入相の鐘かれの音。◉蜑の小舟あまぶねうしのこぎゆく舟。◉國主藩主。◉宮柱◉ふとしくてまうける。◉彩椽色どれるだん。◉朱の玉垣朱にて赤くれりたる社の垣。◉塵土◉俤やうす。◉きらびやかきら〳〵する。◉階きざはしい◉午日中○正午。◉雄島◉こと

ふり云ふも陳腐に屬すれども。◉扶桑日本國。◉好風よきけしき。◉洞庭◉西湖支那の有名の湖なり。◉浙江◉敲つたつ。◉匍匐はらばひ。◉ためする。矯正◉宵然深遠のさま。◉美人松島のよき景色にたとへたるなり。◉ちはやぶる神の枕詞。◉大山づみ山の神。（大山祇）◉造化の天工自然の巧みなる細工。◉雲居禪師◉座禪佛道を修行すること。◉木蔭◉松笠○松毬。◉草の庵草ぶきの小屋。◉復あらたまりぬ又別段なり。◉瑞巖寺◉眞壁平四郎入唐後臨安の佛鑑禪師に學べり。◉入唐◉開山創めて寺をたてる。◉德化德の高き教化。◉七堂山門、佛殿、法堂、方丈、食基、浴室、東司の七つ。◉甍瓦棟の◉平泉◉芻蕘草や薪を樵る者。◉黄金花咲く◉儆らん◉まどしき貧し。◉袖のわたり地名なり。◉尾ぶちの牧◉まゝ地名。◉墟◉衣川◉功名一時の叢功名てがらもたゞ一時の事にて、今は昔のあともなく、たゞ草むらとあれてたとなり。◉國破れて

山河ありゝ　一國が亡びてたゞ河が昔のまゝに殘つて居るばかりの意。　◉夏草や、つはものどもが、夢のあと　夏草の茂れるところ、こゝが數多當年の戰士が屍を晒したところなるか、さても榮枯は夢のやうなものなり。　◉光堂　本堂のこと。　◉棺　◉珠の扉　昔の立派なとびら。　◉頽廢はれる。　◉空虛　あとかたもなきこと。　◉記念み。　◉五月雨の句　概して鬱陶しきものなるはこゝばかりは五月雨かふりのこしたと見えて、金色燦爛としてうすくらきさまはなしとなり。

一三、木枯

◉木枯の句　けさおきいでゝ見れば波のおとが高くきこえる、はにくぐらのほゆるが如きこゑかきこえる、ゆうべあらしでも吹いたのであらうとなり。　◉枯蘆の句　冬がれの河ばたに來て見れば、日毎かれあしのはがながれて行く、荒涼のさま想ふべしとなり。　◉易水にの句　川ばたに來て見れば蔥のかれはがながれて來るが、上流にては此風寒き夕に、ねぶかを洗ふものがあると見えるとの意なり。　◉應應　◉あかつきやの句　冬曉の空寒き海上との句　ゆきふれる日友許訪うて門をたゝけば、室内にて返辭をするこゑはきこえるが、とんと出て來るさまもない、人の心のほども知らぬのかとなり。　◉いざ行かんの句　さてもふりにふりたる雪なるかな、いざ雪見にでかけやう、よし雪中に倒るゝともそはそのときのことだ、この絶景を如何で見すてゝ内にばかり居られやうかの意。

一四、日野山の閑居

◉六十　◉露消えがた　去るに近づきたるをいふ。　◉末葉　晩年のこと。　◉世の常ならずふれた世間の樣でない。　◉方丈　一丈四方。　◉土居　四方に壁の如きものを造る。　◉打覆　やれのこと。　◉つぎ目　家のあはせめ。　◉煩面倒くさきこと(多くの費)。　◉用途　入費。　◉日がくし　日おほひ。　◉すのこ　簀(竹の樣)。　◉閼伽棚　佛へたむける水を入れる棚。　◉落日　入日。　◉眉間　◉帳の扉　畫像を安置したる前にあるとびらなり、帳(まく)のかはりにたてなく故、帳の扉といへるなり。　◉普賢菩薩の名。　◉不動像　不動明王の像。　◉皮籠　つゞら。　◉合　ふたのある器物をかぞふるにいふ語。　◉往生要集

書名。◉抄物（ぬき書き）したもの。◉箏（十三絃）のこと。◉蕨（わらびの生長してかたいもの。◉つかなみ（わらにて作れるしきもの（むしろの類）。◉文机（炭櫃、火鉢のこと。◉よすがり。◉姫垣（小さい垣。◉かけひ（筧。◉岩をたゝく（石をつみあげる。◉つま木（たき）。◉正木のかづら（蔓草（かづら）のこと）。◉観念（佛道をかんがへ念ずる。◉藤浪（藤の花）。◉紫雲（めでたき雲。◉子規（ほとゝぎす）。◉死出の山路（子規の異名を死出のたをさといふ）。◉ふりかくいへり。◉空蟬（うつそみ）現身（うつそみ）と書くべし現在の身なり。◉あはれぶ（あはれとおもふ（面白く見る）。◉罪障（罪ありて往生のさまたげとなるをいふ。◉ま（誠）め（実）。◉口業（口詞より起る罪業。◉禁戒（佛のいましめ（五戒あり）。◉境界（罪をつくる場合。◉迹（あと）のしら浪（吾身のはかなくたのみなきこと白涙の如しと思ひよりたるときはの意。◉岡の屋（宇治河の東岸。◉満沙弥（歌のこゝ。◉風情をぬすみ（歌を慕ふ。◉桂の風葉をならす夕（秋の夕のこと。◉潯陽（琵琶を弾じて楽むをいふ。◉源都督のながれ（琵琶を楽むをいふ。◉秋風の楽

◉流泉の曲　◉小童　◉つれづれしい。◉岩なし（南天に似たる実を結ぶ灌木。◉ぬかこ（零餘子、むかごに同じ。◉すそわと。◉田居（田のこと。◉ほぐみ（稲の穂を組むこと、いなかけともいふ。◉羽束師　◉勝地は主（あるじ）なければ（土地の風景は別にもちぬしといふものはないから風景を賞するに遠慮はいらぬとの意、白氏文集に「勝地本來無二定主一、大山都屬二愛レ山人一」とあり。◉遠くいたる時は（遠くまで遊びに行きたく思ふ時は。◉蟬丸翁（宇多帝頃の歌人、琵琶をよくす。◉猿　◉猿丸大夫の墓（平安朝初期の歌人墓は近江國曾束山中にあるべし。◉家苞（みやげ（わらづとにいれて持ち帰る）。◉眞木の島のかゞり火（山城國久世郡、宇治川の西に眞木の島といふあり、昔はあじろを設け、かゞり火をたきて魚をとりたりといふ、こゝは螢の光を古のかゞり火かと思はるゝとの意なり。◉ほろほろ（山鳥のなき聲にて、涙のほろ〳〵とおつるさまにかけていへるなり。◉かせぎ（鹿。◉埋火（火鉢の火。◉あからさまわづかの間。◉數ならぬ（普通の人。◉方丈記（鴨長明の著、長明は鎌倉時代の歌人、世々鴨神社の氏人なり、後剃髪して世を遁る。

一五、死と永世

◉訝しぎ。ふし　◉解脱人生の苦をのがれる。　◉宿罪前より作りしつみ。　◉贖つぐな　◉永生永久に生きる、即形骸は死するとも靈魂は不滅なるといふ。　◉安心立命心を安んじ(心に苦しみ憂ふべきことなき境界)て天命に隨ふこと。　◉遺わす　◉究竟きうきやういきづまり、終極。　◉厭えん世の中を厭ふ。　◉樂天世の反對にて世の中を樂しく思ふ。　◉超絶ちやうぜつ死より以上にでぬける。　◉涅槃ネハン功德を圓滿にし煩惱生死の雜染を滅盡し迷妄の情念を脫すること。　◉魂魄たましひ。　◉鏤めちりば　◉渝かはり　◉桑滄さうそう桑田變じて滄海となるといふ語より出づ、世の變遷のこと。　◉墓標はかじるし。　◉史蹟せき歷史のあと。　◉蕩々たうくさかんなる貌。　◉汨汨へきへき水流るる貌。　◉哲人てつじんえい智の人。

一六、義士討入の模樣を報ず

◉壽ことほぎ　◉社中しやちう文璘一派の俳友の組織せる社を云ふ。　◉忘年ぼうねんとしわすれ。　◉丑三うしみつ午前三時ごろ。　◉文臺ぶんだい文机。机の小さなものにして短冊などのするもの。　◉料紙所用の料とする紙。　◉蒲團ふとん　◉夢のうき世夢の世の意。　◉けはしくらしあらしく。　◉浪らう人家を去りたるもの。　◉扶持にはなれて主　◉年來ねんらいとしごろ。　◉遺恨うらみ。　◉よしみ情誼。　◉末代すえの世。　◉不覺かくこころの望を達すべき時が來たとをもえば、何のこれほどの雪が苦になろうかいの意。　◉日の恩ひのおん　◉生涯しやうがい一生あさはかなること。不覺悟。　◉神妙しんめうけなげなり。殊勝。　◉本懷ほんくわい本望。　◉大石主税おほいしちから良雄の子。　◉穩便おんびんおだやかに。　◉日の恩やの句御厚恩によつて忽の間にさすがはりつめた氷も碎き得て年來の目的をとげえましたといふ意。　◉追善つゐぜん死者の忌日に供養すること。　◉文璘ぶんりん秋田藩士梅津文右衛門を云ふ。　◉月雪の句義士復讐の擧は武士としての至極の面目にして、且又機宜を失はざ死して餘榮ありと云ふべし。當夜の光景その擧に對し一段の光ありと云ふべしとて、夜景を取りて此の擧詩化せしなり。

一七、福澤先生を悼む　その一

◉長嘯風月に吟咏すること。◉瞻望くびをのばしてみる。◉舌を鼓する舌をふるふ。◉氣焔意氣を盛にすること。◉巨人偉人。◉愁眉うれひのまゆ。◉六旬六十。◉鞭韃むちうつ。◉故態もとのさま。◉後進後輩。◉憖にひして。手を出さずともよきに手を出して。◉白玉樓死者のおもむくところ。文人の死を云ふ。◉音容こゑすがた。◉儕輩◉凌駕のりて人の上にたつ。◉機緣機會の生するしほ。◉一轉機心の他にうつる機會。◉純乎他にまじりけのない。◉烱眼あきらかな眼。◉觀光他國の光華を觀察すること。◉背馳正反對になる。◉機事きみつの事。◉眼底まなこのそこ。◉推移次第にをしうつる。◉洞觀みとうす。◉殺氣さつばつなる心。◉徵用ようめしだして用ゐらるゝ。

一八、福澤先生を悼む　その二

◉鼓吹者はげましたてゝ力をつける入。◉逸居いつきょらくにくらす。◉鼓動はげましたつる。◉陶冶人材を育成する。◉匹たぐひ◉殘るなかばのこる舊思想。◉月桂冠桂の枝にてつくれる冠。希臘人の文學奬勵のために設けたるもの。◉獨創◉常識人各の執る所の業務における特殊なる知識技能の外に有すべき健全なる一般的理解又は道義心。◉薫陶火の物を化し陶の器を作るが如く感化すること。◉招牌看板。◉巷間◉誘掖前にありて手をひき傍にありてたすける。◉喧擾くさわがし。◉時流時の流俗。◉天人冥合天と人とが暗合する。人間も一切の色相を除却すればおのづから天と合一するといふ意。◉深邃ふかくしづかなること。◉幽玄おくふかくして探り知るべからざること。◉宣傳ろめつたへる。◉裨益たすけてためになる。◉獨立自尊人にたよらず人に屈服せず人の束縛をうけず。人の下につく。家來となる。◉汲汲つとめる。◉軒冕軒は大夫以上の車冕は大夫以上の冠、高位高官の意。◉隸屬◉泥塗ろ。◉拜金宗金錢を絶對に無上のものとすること。◉過渡の時機舊態を脱して新態未だ成らざる途中の時代。◉警醒いましめさます。◉俗氣のは俗僧なれぬ僧。◉髣髴たり。◉荀卿の說儒學をまなびて性惡說を唱へたるを云ふ。◉李斯の徒云々李斯は荀卿の門人なれども其說くところ刑名を主

として天下を治めんとし始皇崩して趙高と共に二世皇帝を立て後趙高と隙を生じて殺されたるなど其師の儒家たる荀卿に似たるところなきを云ふ。

◉稱道云ひたてる。◉形而上神上の考察を云ふ。◉處士官途につかざる人。◉天爵徳高くして自然に人に尊ばるゝを云ふ。◉貌視ばつとみる。心にとめざる貌。◉齒年。◉堀川の實踐學派伊藤仁齋の學派を云ふ。◉懷疑哲學の一派にして認識を否定し、眞理をうたがひ、一に虛僞として看取する説。人の説をうたがひあやぶむ。◉一貫の行逕一つの主義をおしたまざること。◉典型てほん。

一九、歡樂境

◉肱を曲げ　◉甘雨人の望みたるときにふる雨。◉條を鳴ざず靜に治まりて太平なるをいふ。◉塊を壞らずくろはふこと。◉豊稔みのる。◉酷吏租税をきびしく取り立てなどする慘酷の役人。◉賊民人民をそこなふ惡吏。◉莫逆よい。

◉市賈あきんど。◉貳價二樣にいふ。◉直ぎらず　◉身を殺す論語に「身を殺して仁をなす」とあり。◉臣附臣となりて隨ひ附く。◉蠻貊野蠻の國。◉來貢みつぎものをもつてくる。◉麒麟獸の長。◉鳳凰鳥の長。◉連理枝をつられる木。◉靈芝めでた草。◉兵庫兵器を納めるくら。◉理亂治亂と云ふなじ。◉傲り慢る　◉向へる膳食事中にも賢士の來訪あらば、食事の終るをまたず、はしを措いて直ぐに對面する、(士を待つの禮なり)。◉結びかけたる髮をゆひかけて出對面すること。◉蠶飼◉堯舜周の聖帝、我君を堯や舜の如き聖帝になさんとするなり。◉三司太政大臣、左右大臣。◉修羅道(地獄のくるしみ)。◉番傘番號をつけた傘(雨傘)。◉宵闇日くれのやみ。◉貸し下借りて其のまゝ自分のものにして返へさぬこと。◉下部めしつかひ。◉物詣神佛のおまゐり。◉孝悌孝は父母に事ふる道、悌は兄に事ふる道。◉斷金の交交りの厚くなかよきこと。◉神主　◉氏子　◉丹精を抽んで心をこめて祈る。◉和尚　◉布施　◉檀那寺の信者　◉讀經お經をよむ。◉方藥

方法。◉二季盆と歳末。◉瀧澤解馬琴といふ。徳川時代の小説家、解は其名、號を嘉永元年十一月歿す。◉夢想兵衛蝴蝶物語

二〇、丹波少將

◉治承高倉天皇の御代の年號。◉成經藤原成親の子、治承元年父の事に關し藤原成朝の俊寛と共に鬼界島に流さる。◉平康頼入道子平判官と稱す。◉鹿瀬の庄◉わたりたる。居られ◉有木の別所別所は別莊に同じ、成親はこゝにてころされたるなり。◉舊りたるなつた。◉すさびさみ。紀念。◉かたみ◉信俊成親の從者、北の方の文を持ちてこゝに來りしなり。◉三尊彌陀勢至、觀音をいふ。◉來迎佛の出現にて來り迎ふをいふ。◉便◉九品往生極樂にゆきて生まれること。◉欣求淨土淨土を願ひ求むるをいふ。◉一簇◉かひがひしくたのもしい。◉遠き御守ことをいふ。◉憂き身◉在りがたくをぼつかなく。◉さすがしかしながら。◉まさしくたしかに。◉この世に渡らせ居らるゝ。◉在生ゐきてゐ◉生を隔てたるあのよと、この世と◉山莊別莊、しもやしき。◉すあま殿殿。◉築地ついぢ。◉おほひ屋根。◉秋の山山城の名所。◉紫鷲おし。◉白鷗かも。◉逍遥ぶらぶらさまよふ。◉欄門すかし模樣のある門。◉蔀格子を下してその上をおほふもの。◉遣戸上下のみぞにはめて左右に開閉する戸。◉ところそこその意。◉妻戸御殿の四隅にあり て兩方に開く戸。◉折しり顔にいろいろなれ花のさくべき時節を如つた顔に色々と咲きにほへども。◉桃李不レ言春幾暮。烟霞無レ迹昔誰栖。桃李は幾春を送りし事か、問へども答へず、煙霞空しくたなびきてその昔何人のすみしか、迹もなくなれりとなり、この詩は和漢朗詠集の菅補昭の詩なり、即ち山中景色月花低、石床留レ泪嵐空拂、玉案拋レ林鳥獨啼、桃李不レ言幾春暮、煙霞無レ跡昔誰栖、玉喬一去雲長斷、早晩空聲歸二故溪一しとあり。◉口ずさみ吟詠すること。◉折ふしの折から。◉墨染僧侶の きる衣。◉隅もなきなきをいふ。◉さてしもばかりも。◉心なし心やりなし。◉尻方。◉憂かりし嶋鬼界が島

たさす。◉一業所感善惡の業によりてその報をうくることにて、こゝは同じ苦しみを共にせしことをいふ。◉先世の芳縁さきの世のいんねん。

◉つゞけけるれた。詠ま　◉ふるさとの云々久しぶりで歸つて見れば、故里の軒の板間は一面に苔むして、おもつて居たほどに月も漏れないとなり。

◉寶物集七巻あり、寶のことを論じて佛方を寶とすることをのべたり。

二一、比良の山風

◉侍り　◉左近中將良經藤原兼實の子、建永元年薨ず、歌集を月清集といふ。◉さくらさく比良の山風云々比良の風に櫻花の吹き散らされて志賀の浦の波の上にたゞよふをいふ。◉志賀のうら琵琶湖の志賀郡に臨める地。◉擣衣ころもをうつこと。◉源俊頼朝臣大納言經信の子、堀河、鳥羽、崇德の三朝につかへ才藝多し、最も和歌をよくす。◉松かぜのをとだに云々松ふく風の音を聞いてさへ秋はさびしいのに、今こそ玉川の里で衣をうつ音をきくと尙更さびしいわい。◉心のほかも思ひの外、おもひかけぬ。◉さつまがた沖の小嶋に云々八重の潮風よ、われはこの薩摩の沖の鬼界が島といふ小島に流されて居ると親につげてくれよとの意。

繪島は淡路じまの國にあり。◉西行法師本名は佐藤義清、藤原秀郷の孫、鳥羽上皇に仕へ北面の士たり、後僧となる。◉こぞ去年。◉しをり山に入るに枝を折りて道に迷はぬやうに目じるしをつけおくをいふ。◉關路花逢坂山では櫻の花に嵐が吹くによつて、この關の杉むらあたりでは嵐までが霞んで見える。◉宮内卿後鳥羽天皇の宮女なり歌をよくす。◉あふさかや木末の花を云々杉のむらがりはえたる所。◉ふくからに吹くによつて。◉杉むらにはえたる所。◉藤原定家朝臣俊成の子、新古今集の撰者、小倉百人一首又定家の撰ぶ所なり、著書多し。◉藤原家基白基平の子、正應二年關白となり左大臣に至る。◉見わたせば花も紅葉も云々海岸の苫ぶき小屋の秋の夕暮の景色を見ると、花もなく紅葉もなく、誠にもの淋しいことであるわい。◉とまや苫にてふきたる漁夫の家をいふ。◉藤原家隆朝臣中納言光隆の子、歌を俊成に學ぶ、後鳥羽帝の師たり。◉志賀の浦や云々志賀の浦で曉方に月のでるのを見ると浦邊を遠ざかつて行く涙の間から氷のやうな月が出る實に寒夜のものすごき景色である。◉身まかりこと。死ぬる◉皇太后宮大夫俊成俊忠の子、幼より歌をよく

し、基俊に學ぶ、元久元年薨ず、年九十一。◉まれにくる夜半云々自分はたまに來て、夜中に松風の音をきいてさへ毎日聞くことで有らうがさぞ悲しいことであろう。◉初瀬◉禪性法師傳記を詳にせず。◉初瀬山云々初瀬山を夕方越えて宿を尋ねると、宿はわからないで三輪の檜の林に秋風が吹くばかりで、實に淋しく心ぼそい。◉檜ばら林をいふ。

二二、落花の雪

藤原俊基は大學頭種範の子、官藏人頭右中辨に至る、後醍醐帝の寵遇を蒙り、資朝と共に中興の謀に預る、事顯はれて高時に捕へらる、即本章は鎌倉へ下ることを記せるなり。

◉交野河内國。◉櫻がり花見に行くこと。◉旅寢となれば物うきに交野の花見、或は嵐山の紅葉狩の如き面白き遊びでも旅寢となると心苦しきものなるを、況んや妻子に別れて行末知れぬ旅に出立つ身はさこそあはれに思はるゝなり。◉ちぎり因緣（契）。◉ゆくへも知らず身の行末の何如になるかわからぬ。◉憂きをばとめぬ關所は行く人をとめるものなれど、悲しさをとめぬとなり。◉あふ阪近江國。◉袖沾れ◉うち出の濱「うち出る」と地名とをかけたり。◉潮ならぬ海はない海、即湖水のこと（琵琶湖）。◉うき舟身を憂く思ふの「うき」と「浮き舟」とにかけたり。◉とゞろむ馬の歩たり。◉うねの野世を憂といふを地名にかける。◉たづ鶴。◉もる山時雨の洩るといふを守山の地名にいひかく。◉くもりて見え分かず鏡山といふ名の縁によりて見えぬといへり。◉夜のま一夜の間に（あまり心配すると一夜に髪が白くなりて老ゆるといふ）。◉おいその森「老い」に地名をいひかく。◉駐め◉下破の關屋◉わが身のをはり「身の終り」を尾張にいひかく。◉八つるぎ（執田神宮に草なぎの劍を祀つれり）。◉なるみ潟「潮干になる」といふを「鳴海」にいひかく。◉明けぬ暮れぬ夜が明けた、日が暮れた（旅に日を送ること）。◉とほたふみ遠江國。◉ゆふ暮「夕暮」を問ふに遠江にかけたり。◉池田の宿宿は驛といふに同じ、宿場といふ、旅人の宿る所。◉匹馬のうま。◉いばえなく。◉家郷の

天の故郷の空。◉西行法師人なり。名高き歌◉命なりけり小夜の中山を又も越ゆべしと思はざりしに命あればこそ再び越ゆることを得たりとの意。

◉隙ゆく駒日月のたつことのはやきにいふ「人生二世間一如二白駒過隙耳」。◉亭午正午。◉轅を敲き車のかぢ棒をたゝく。◉古もかゝるためし光親の菊川にて誅せられし例をいふ。◉きく川の「菊川」に「ためしを聞く」をいひかけたり。◉龍頭鷁首の舟龍の水鳥の首をかざりつけたる舟、天子の御座船のこと。◉眞葛葛のこと、ま添へたる詞。◉うち枯れしぼみかれること。◉蔦楓◉業平中將在原業平志を得ずして關東に下れり。◉波の關守清見潟の關守なり。◉三穂が崎◉興津◉蒲原◉上なき思ひ此上もなきおもひ。◉浮島が原◉下り立つ田子の田に下り立つ農夫の如くの意。◉足柄山足といふにかけたり。◉こゆるぎ波が越ゆると地名にいひかく。◉いそぐ「急ぐ」と「磯」をかけたり。

二三、故事二則

一、塞翁の馬塞上に近き地に住居したる翁の馬。

◉世をわたる便つる生計を立る便宜。◉とふらふ見舞にゆく。◉いづち何處。◉あざみあざける。◉つれなく心強く。ぶあいそに。◉さもあるものたつもの相當役にとなく。自重すること。◉内外典内外の經典。我國の外國のとのなしへ。◉よき人人。賢き人。◉うごきなく心のまよふこ

二、知音

◉はかなく死すること。◉經藏◉遺文三十軸の詩元槙の死後にのこれる詩文三十卷は、ことごとく金玉のすれあふが如き調の高いものばかりである。龍門原上の土は君の骨を埋むるとも、君の名は千歳の後までもうづもれずして、後の世までものこるであらうとなり。◉交情鄭重金相似の詩二人の間の交情はかたきこと金石の如く、詩の風調の高きことは玉のすれあふ音もおよばずとなり。◉阮家の南北晉書阮咸傳に咸字は仲容、籍と道南に居る。諸阮は道北に居る。北

阮は富みて南阮は貧し。七月七日北阮は盛に衣服をさらし、皆錦綺目に粲たり。咸竿を以て大布犢鼻褌を庭に掛く。或人之れを怪む、答て曰く未だ俗を免るゝ能はず聊か復しかするのみとあり。◉斷金伐木の契たつべしとの故事伐木は詩經の伐木の歌をうたひて宴饗して相たのしむが如しといへる語より出づ。◉口づくろゝ意。◉友なし小舟てこぎゆく舟。

二四、光頼卿の參内

◉僉議相談、會議。◉勧修寺左衛門督光頼信頼の叔父。◉過分身分に相應せぬ。◉あざやかに立派。◉束帯はれの儀式に着する大禮服。◉蒔繪の細太刀鞘にまき点を施したる細き太刀、細き太刀は實用にあらず、裝飾のもの。◉おとなしやかと上品。◉乳母子乳母の子。◉腹巻きる具足。◉雑色中間以下の從卒。◉自然の事萬一の出來事で死ぬる場合。◉前高らかに追はせ聲高く先拂させて。◉ひらめる。伏せる。◉そばめる。片よ。◉一座第一の上席につく。◉上

蔭達上三位以上の人。◉末座の宰相宰相は參議のことにて八人あり、其八人の參議の末席のもの。◉しどけなう取りしまりなく。◉色代えしやくする。◉閑々。◉むずかと。◉居懸りよりかゝる。◉ふしめにくさま。◉あさましどく。◉下重の尻下重は下襲と書く、袍(うへのきぬ)の下に着るもの、下襲の背に長く地に引きたるものあり、これを裾といふ、即「下重の尻」なり。◉引き直しひきつくろひ。◉衣紋繕ひ禁を正し。◉笏長一尺六寸廣三寸厚五分の板、五位以上の人のもつもの。◉氣色けしきばみ。◉衛府近衛、兵衛、衛門の役所を總稱して衛府といふ。◉御諚御仰せ。◉つい立ちてつつと立ちあがる。◉惡しう參つて候まらなく、むだあしをしたりとなり。◉さんぬる去る。◉仕出したることとよれたるかな。◉打ち返して文字を上下におきかへるなり。◉なぞ云何故に、下の「あれほどの云」の上におきて見るべし。◉附きる名をつけること。◉聞かじは聞くまい。◉忍笑に笑ふなり。◉小蔀板戸の如くにして、板をはりて横にしげくさんをうちたるもの、格子の外にあてゝ風雨をよくるものなり。◉見參の

板伺候の人のふみならず板なり、ふみならして案内を請ふ。◉荒海の障子清涼殿の北の方にある戸。◉有職學問知識のすぐれたる人、ものしり。◉尻後ろ。◉神樂岡◉以ての外けしからぬ。◉近衛大將信頼をさす。◉檢非違使別當惟方をさす。◉先蹤先例。◉天氣天下の命令。◉勅諚天子の御詞。◉一議ひとこと、意見をいふこと。◉曩祖せんぞ。◉勸修寺内大臣藤原良門の子高藤。◉三條右大臣高藤の子定方。◉聖代世。◉德政德ある君のよき政治。◉有道道義を知り。◉讒佞人をそしりわるくいふ。◉非難せらるゝ。◉御邊手前。◉かたらはれくみして、なかまに加へられる。◉累家の佳名先祖代々のよき名譽○累世の美名。◉切部の宿紀伊國日高郡にあり、熊野に通ずる路なり今切目と書す、清盛此處まで來りしに、京師より急便ありて俄に引かへしたり。◉若干ならじ澤山でもなからふ。◉廻すべきすごすべき。◉灰燼火事にてやけうせて灰となるをいふ。◉相構注意へてして。◉黑戸の御所惟方の返答なり、黑戸の御所には清涼殿の北にあり、御賄所なり。◉一本御書所式乾門の内侍從所の南にあり。◉内侍所御寶鏡。三種の神器の一。◉溫明殿紫宸殿の東方にあり、内侍所はこの殿内にあり。◉劍璽寶劍と玉璽とにて共に三種の神器の一。◉夜のおとゞ主上の御寢殿なり。◉朝餉「あさがれひ」の間を略したるなり、朝夕の供御をめしあがる所にて清涼殿の西の方にあり。◉櫛形鬼の間の壁の窓にある三日月形の穴をいふ。◉女房官。◉影ろひつる。影のうなれあれの意。◉ござんなれくこそ。◉異國外國。◉前代未聞古からの聞いたことがない。◉のろのろしげしげに。◉宿業の報ひ。◉許由故事前に說けり。◉許由の耳を洗ひし◉上の衣袍。◉ゆゝしゝ。◉菱れ◉平治物語平治の亂の始末より源頼朝兵を起すまでの事を記せる書なり、作者は葉室時長なりと云へど明ならず。

二五、奈良時代の歌平安時代の文

◉摸作摸擬して作つくる。◉嬰兒こども。◉祝詞神に告くる詞。◉傳說ひつたへ人。◉抒情歌おのれの感想をのぶるうた。

◉反歌（はんか）　うたへし。　◉純文學（じゆんぶんがく）　文學に關する諸種の學科に對し、詩歌文章に關するものを云ふ。　◉膾炙（くわいしや）　人々の口に稱するを云ふ。　◉津津（しんしん）　いづるをいふ。　◉韻文（いんぶん）　韻脚をふみて作れる文。　◉散文（さんぶん）　韻脚平仄などの制限なくして書きたる通常の文。　◉詞賦（しふ）　支那の韻文なり。　◉脚色（きやくしよく）　ぐみ。　◉年中行事（ねんちゆうぎやうじ）　一年間宮中に行はるゝ一定の公事。　◉搢紳（しんしん）　貴族を云ふ。　◉描寫（べうしやうつし）　出す。　◉絢爛（じゆんらん）　あやあつてはなやかなること。　◉融合（ゆうかふ）　とけあふて一つになる。　◉冗長（じやうちやう）　くたくだしくながきこと。　◉簡朴（かんぼく）　簡潔にしてかざりなきこと。　◉莊重（さうちよう）　おもおもしい。　◉嫋々（でふ）　よわくしてなよ〳〵したること。　◉柔輭（じうせん）　なよ〳〵してやわらうかなること。　◉隨筆（ずいひつ）　筆のまに〳〵何くれと記錄するをいふ。　◉奇警（きけい）　眞情を云ひあらはしたる詞。奇拔なる詞。　◉錯綜（さくそう）　くみあはせいまじへる。　◉右往左往（うわうさわう）　右へゆき左へゆき思ふまゝにあやなすこと。　◉行事（ぎやうじ）　朝廷の公事。　◉本紀（ほんぎ）　紀傳體の歷史にして帝王一世の事を記したるもの。　◉紀傳體（きでんたい）　歷史の一體にして記事の體裁により本紀傳記列傳等其人の一代の傳を記列するもの。

修訂中學國語讀本卷八字解終

修訂中等國語讀本卷九字解

一、御國（みくに）ゆづり

◉さがなき御ふるまひ　よからぬ御ふるまひ。　◉生太刀生弓矢（いくたちいくゆみや）　生は接頭語にして美稱なり。執持主の命長く生くべき德ある太刀弓矢といふ意。　◉青人草（あをひとぐさ）　生民。　◉大八洲（おほやしま）　淡路、四國、隱岐、九州壹岐、對馬、佐渡、本州。　◉高天原（たかまがはら）　下界に對して天上界を云ふ。天孫種族の故鄕なり。　◉天菩比神（あめのほひのかみ）　天忍穗耳命の弟。　◉建御雷神（たけみかづちのかみ）　伊都之尾羽張神の子にして天安河の河上の天石屋に坐す神。　◉あらぶる神　亂暴なる神。　◉十握劍（とつかのつるぎ）　握は四指を並べたる長さを云ふ十握は劍の長さなり。　◉汝（な）がたもちたる　汝が領有せる。　◉とかく申さじ　獨斷には何

とも御返事は申兼ます。◉事代主命太國主命の子。◉建御名方神事代主命の弟。◉いらへ応へ。◉千曳石千人力にて引く程のおもき岩。◉忍び忍びで内内。◉若葦を云々摧け易きをたとへて云ふなり。◉はらから兄弟。◉天つ神のまにまに天つ太神の命のまゝに。◉底つ岩根土地に穴を穿ちて、深く地底に岩石のあるまで穿ちて。◉宮柱太知りたてゝ太き宮柱をより次第に家を建てし、其宮に居て統理して。◉氷木高知り屋根の兩端に斜に十文字に組みて高くしたる木を氷木と云ふ。この氷木を高く作りたる宮にて統理して。◉退き隠れして退隠。◉百八十神國主命の子を云ふ。大多くの神たち。◉御舎殿官。◉仕へ人べき人仕へ奉る。◉厚く齋ぎてあつく心神をきよめてつかふること。◉いつきしづめつるしづめたりの意。謹みつかへしめて。◉八百萬の神多くの天上の神。◉安國太平なる國家といふ意。◉天の磐座高天原の高御座をいふ。天上の御座所。◉天の八重雲幾重にも重り棚引ける雲。◉天つ日嗣日本の國を嗣ぎ天位を受けたまふ義。◉いやつぎつぎいやがうへにも長くあとをうけつぎて。◉よろづ千秋千萬の秋の長き秋の末までも。◉ゆるぎなく動搖することなく。◉大八洲大和島根共に日本の國名なるなり。

二、南へ南へ

◉健翼つよきつばさ。◉盡日尋春下見春に花を見當らなかつた。終日春の花をたづねてはるをみず終らじを穿つてあまれく畑道などをふみすごした。◉歸來笑撚梅花嗅花をひねつてかはへつてから笑ひながら梅の花をひねつてかいで見ると。◉春在枝頭已十分春は既に枝頭に來て居ると見えてはや十分芳香をはなつて居つた。◉厥命維新天命によりて王政が復古して百事新になれるを云ふ。◉道破ぶる。◉好警句眞情をいひあらはしたる奇拔な句。◉居然坐して動かざる貌。◉士君子◉朝宗江漢の河海に集る如く歐米に集るをいふ。◉漲溢みなぎりあふれる。◉眩惑目もくらむばかりにおどろきまどふ。◉經綸國家を治めと、計畫する。◉企畫方策を立てゝ◉等閑なほざり。◉混混水の流れて◉制御おさへつけて使ふ。◉鞠者列國のはたがしら。◉壟

利益の獨占を斷なすに云ふ語。◉依然もとのまゝで。◉局面物事の成行狀態の場所。◉權略一時の便宜上の謀略。◉胡馬北風に嘶き北方より來れる馬は北方より吹きくる風に依望す。◉越鳥南枝に巢ふ南方より來れる鳥は南枝に巢宿して舊國を思ふ。◉本能本來具有せる性能。自然に要求し自然に行動する性能を云ふ。◉累累かさなりあふ。

三、四季の變遷

四時の變遷。

◉をりふしのうつりかはり。◉あはれおもしろし。◉さるもの尤なること。◉春めく春景色らしくなる。◉けしきだつ。◉心あはたゝじ心がせけてせはしくなる。◉名にこそおへれ昔を忍ふと云ふ名を負ひたれどなり。◉清げにやみかなさつぱりとしていさうに。◉おほつかなく今におちさうにて不安心なるさまに。◉灌佛四月八日に釋迦に水をあぶせかけて祭る佛會といふ。◉世のあはれしろさ世のおもしろいを。◉人の戀しき花をたよつて訪ひ來し人の事などこひしく思ひ出てらるゝ。◉あやめ葺く五月五日には毒氣を退くとて家毎に軒に菖蒲をふくをいふ。◉水鷄のたたくくひなの鳴く聲が物をたゝくが如くにきこゆるによつていふなり。◉心細からぬかは心細くないことがあらうか。◉あやしき家まづしき家。賤しきものゝ家。◉六月祓六月三十日に半年間の犯せる罪を拂ひのぞく式。◉又をかし又一興あり。◉なまめかしなまめきて見ゆ。◉わさ田早稲をつくる田。◉とりあつめたる事さまざまのおもしろき事。◉野分秋ふく暴風をいふ。◉おぼしき事思ふこと。◉腹ふくる胸の中に欝しとゞこほる。◉あぢきなし益なし。面白くもなし。◉掻いりすつ反故などの中におしやりすてる。◉やり水寛の水。細き流。◉すさまじ致なきこと。◉御佛名殿の御帳の中にうつして行はせらるゝ佛會なり。◉荷前の使諸國より奉る貢の荷の前を、諸陵墓に奉るによつて荷前といふ。この奉幣使を荷前の使といふ。◉やんごとなし貴きことゝいふ意。◉公事朝廷にて行はる公の儀式。◉春のいそぎ春の準備。◉いみじき甚た嚴重なり。◉追儺十二月三十日に鬼を追ひはらふとて行はるゝ儀式。

◉四方拜元日寅の刻に天地四方及び山陵をおがみたまひて、年の災をはらひ寶祚を祈り申さるゝ式。◉松どもともし松明などともして。◉ことぐしくんさうに。◉のゝしりまはる。◉足をそらにちつかず足が地にお。◉さすがにながら。◉年のなごりば今年も今日ぎりだと思へば心殘りの氣持がする。◉心細しくおもふ。◉ひきかへに反對。◉はなやか美麗。立派。

四、芭蕉

◉正風情懷の眞面目にして用辭の滑稽ならざる俳諧一種の流派。◉大旆はなは。◉俳壇俳人の社會。◉古池やの句人のゆまれなる古池の傍にたてるなりしもあれ蛙のとびこみて天地閑寂の氣を破りしさまを詠めるなり。◉犬童犬なとおひまはして遊ぶが如き小兒。◉馬卒かた。◉城代大名の江戸勤番の留守中城を守りて一切の政事を司る家老。◉仕官を辭して致しること。◉風流三昧風雅の事のみに心をかたむける。◉古風談林風の新派に對して古き風といふ。◉檀林の時調談林派の流行風。◉禪機心を靜にして世の俗調をはなれたる心のはたらき。◉風骨風姿。◉私淑己れをよくする。◉幽趣幽玄なる趣。◉詞藻文辭上のあや。◉作意作意上の意匠。◉奥底心おくそこ。◉玄理幽玄なる理。◉鬱勃もつてなる。◉目睫目とふ意。◉森羅萬象宇宙間にあらはるゝ數かぎりなき一切のもの。◉自失しきけのすること。◉感興物に感して起る情懷じ。◉波紋柳揚頓挫。◉軒輊あがつたりさがつたり。優劣。◉豪壯氣象のつよくして勢の壯なること。◉幽寂無の境をはなれる。◉舊套ふるきかた。◉蟬脫外形はそのまゝにして內容のぬけ出てたる如く、超然として世外に脫出すること。◉大小共に存し大小共にすききらひを云はずして心に任す。◉清濁幷せ呑む君子小人善人惡人の別を立てず自分のものとする。◉星の如く砂の如し數多きをいふ。◉牛耳主盟者。◉濟々衆盛なる貌。◉雜然さつぜんごた〳〵。◉別天地俗人以外の境涯。◉流離流涙すること。◉轉沛諸國を流涙して困難すること。◉皷蕩ゆれうごかす。◉幻化ゆめまぼろし

の如く變化の甚しきこと。◉渾然圓滿にして缺陷なきこと。◉半截半分にたちわる。◉閑寂主義幽靜の情を養ふを主とする心の主張。◉俳文洒脫に巧なる一種の文體。◉幽捿心しづかに幽靜なる地に住居すること。◉夷然心平にしてあくせくせざること。◉切切切ごろにゆきとどく。◉慟哭こゑをたてゝなきさけぶ。◉風化感化。◉木曾殿との句秋の夜はからずもこの木曾山中に來て、義仲をまつれる寺に一宿したるも、何かの因緣であらうとなり。◉識をなし豫言となつて。◉墓門はか。◉追懷往事を追想すること

五、梅一輪

◉梅一輪の句梅花が一輪々々さくに從つて、日々暖になつて來るとなり。◉これはこれはの句吉野山に來て滿山一面の花なる壯麗なるさまに見とれてしまつて、賞讃のことばも出なかつたとなり。◉花の雲の句何心なく庭に出で滿都唯花なるとんよりとした花ぐもりの空をながめつゝ、上野の花や如何に向島や如何ならんとおもひやるときしもあれ、つき出す鐘にあれは上野かあさくさかとおもひはかれる樣をよみたるなり。◉春の海の句春の永き日に終日波の大きく うねりながら、不活潑にしかも眠たさうに岸うつさまが、何となく長閑にあるよとなり。◉菜の花やの句廣漠たる野に唯一面の菜の花、黃波風にゆらるゝ折しも、日くれんとして夕日の色紅にしづまんとせるに、はや月は東山の一角にまどかに跳り出でんとするさまの、えも云はれぬ佳景なりとなり。◉おほ原やの句おほ原の地に來て、おぼろ月夜の花をながむれば、落花繽紛として風に飛べるは、恰も胡蝶の花にたはむるゝが如しとなり。◉水澄みての句苗代田の水すみたるところ、今やもみの芽は青く出でなんとす。萬物育成の氣宇宙に充ちたるなるべしとなり。◉手をついての句古今集の序に、貫之が水にすむ蛙もうたを歌ふと云ひたりしかりて詠みたるなるべし。蛙のさま言ひ得て盡せりと云ふべし。

六、有王島くだり　その一

◉鬼界島の流人頼成經、康俊寬。◉不便にしてかけて。◉忍びてうに世をさけて。人目にかゝらぬやう。◉此の瀨場合。今度の◉唐船商估の外國船。◉夏衣たつ夏衣きるべきときに出てたつ。◉彌生陰曆三月。◉船津船の出入する津。港。◉あやしめはへる。危害をくはへる。◉姫御前◉髻結◉事の數ならず事の數の內に入らぬといふ事にて、聞きしにもまさりての

意。◉法勝寺　◉執行寺務を執行する意にして、總檢校の下におきたるものなりしも又長官なりともいふ。◉いざとよにあらず。◉覺束なさ　如何かも知れぬ、或は居るかもしれぬの意。◉白雲跡を埋めりたる人の跡の見えわかず。白雲深くとざして、山に入◉晴嵐夢を破りし　夢にだも見たしとおもへども、あらは夢を破りてそれさへかなはず。◉沙頭に印を刻む　砂の上にあしあとをのこす。◉よろぼひよろ〳〵としてあるく。◉空様に生ひのびたつ。うへざまに◉藻屑　海中の藻などのくず。◉皮ゆこひ　外がはのたわくして居ること。

◉諸阿修羅等故在大海邊由旬を經て、諸〳〵のあしゆら等は大海の邊にありと云ふ佛說なり。須彌の東千大海の下鞞摩質多羅阿修羅王の國あり。天帝の敵なりとなり。阿修羅は業果拙きもの生を擬する所。戰鬪たえず。常に梵天帝釋などと權をあらそふ者を云ふ。◉三惡四趣　三惡は地獄餓鬼畜生を云ひ。修羅を加ふれは四趣となる。◉餓鬼道　六道の一なり六道とは地獄餓鬼畜生修羅人道天道を云ふ。餓鬼は不淨處に居り飲食を得ず、常に鞭打を受け苦惱無量なり。慳貪の業餓鬼となる。◉消え入る　たゐ。◉幻に立つ　現在せざるものゝ現在せるか如く見ゆるをいふ。◉現在。◉よすかたより。便。○◉あさましぶる〳〵、

おどろく。◉寺務職　寺務をあつかふ僧官の職の義。◉庄務　庄園の事務。◉棟門　◉平門　◉所從　家來者。◉眷屬一族のもの。

七、有王島くだり　その二

◉資財雜具　財産及び諸道具。◉うしなひ果て　殺してしまふ。◉北の方　貴人の妻の稱。◉この童　有王自身を云ふ。◉むつがるなく。◉いひがひなしたゝぬ。◉はかなさ　あはれなることよ。◉宮仕　宮中に仕へること。◉人の親の云々　中納言兼輔の歌に「人のおやの心はやみにあらぬとも心をおもふ道にまよひぬるの哉」とあり。◉麥秋云々　五月を云ふ。朗詠集に「千峰鳥路含梅雨。五月蟬聲送麥秋」とあり。◉白月黑月　初一日より十五日に至るを白となし十六日より三十日に至るを黑といふと補四域記にあり。◉この世一つ云々　現在の世のみならず、後生までの契であるぞとなり。◉つれなかるべし　人情をくまぬと云ふものであらう。◉臨終正念　今はの時に心の迷をお

こさずして往生を得たしと云ふ。

八、人材論

◉陰謀陰に計畫する謀略。◉擧世世をこぞざること。◉氣節氣概と節操。◉淫心をみだす。◉滔々水の盛に流るゝが如くに多勢の者が皆同一なる樣に。◉移す守操をかへしむる。◉屈す服從せしむる。◉毅然心のしつかりして動かこはし。◉不覇人の拘束を受くるめこんで自由にあやつる。◉偏僻かたよりれる。◉剛直心一途にたゞしく◉蟬翼◉懸隔かけはなれる。◉籠絡人をわが手の内に◉傾向むき。◉時流當時の風潮。◉俗情人の心。◉圓滑事を處するにかゝずして、變化きはまりなきこと。◉鮪魚◉刀鋸鼎鑊共に刑具なり、刀は割刑に用ゐ、鋸は刖刑に用ゐ、鼎鑊は人を煮るに用ゐる。◉非難つけてわるく云ふ。◉歡心よくする。◉說を左右にす自說を都合のよきやうにかへる。◉識者識見明なる人。◉拜趨かけづつき從ふ。◉凡庸世の常の人。◉旗幟◉輿論世上多數の人かたくまもる。◉狂瀾を既倒にかへす甚だしく亂れおとろへたるをもとにひきかへす。◉周章狼狽あわてふためく。◉固執

九、いざよふ月

◉ふみの名孝經ふ書なり。◉夢ばかりもしも。◉みづぐきの岡讃岐にあり、葛の名所なり、地名にみづぐき(筆のこと)をかけたるなり。◉葛葉かへすがへす葛の葉は風にうらがへるもの故、かへすのかけ詞に用ゐたり。◉かひなきがない。◉さてしもあらでそのまゝにすてておくこともならずて。◉このうれへこそ子を思ふ道。◉あだなるすさびわけもないなぐさみ事。◉神樂◉ひじり聖賢(紀貫之は古今集の序に世を治め云々書けり)。◉ためし多かれど敕を撰びし人は古來其の例多けれど。◉代々に時の帝に。◉もゝち百千。◉反古ぐ。◉えにか因緣にや。◉道をたすけ

歌道を起す。◉はぐくめ教育せよ。◉後の世をとへ後世をとむらへ。◉細川のながれ細川の領地の末。◉せきとゞめられく細川の庄を故なく没收せらる。◉法のともし火後世を弔ふ爲めに佛前に供へる燈火。◉きえをあらそふいつれかさきに消えるであらうかの意。◉忍びへる。◉あづま鎌倉幕府。◉龜の鑑裁判を受ける。◉えうなき物の無用の（はかなきものと覺悟するなり）◉ゆくりもなくに。不意◉み冬頭語。◉ふりみ降つて見たり。◉ふらずみやんでみたり。◉きほふ競ふ。◉人やりならぬ他人をつかはすことのできぬ。◉いき憂し行くことがつらい。◉めかれせざりつる目を離さなく、常に見て居る時でさへも。◉ましてと自分が行つてしまへば猶更荒れはてるであらふ。◉袖の雫を惜む涙。◉いひこしらへぬだます。◉十六夜日記後大納言爲家の室阿佛尼が著けるものなり、其子爲相の庶兄爲氏なるもの。所領細川莊を預かりて返さゞりしかば、阿佛尼その訴訟のため鎌倉に下りし時の旅日記なり。

一〇、新島守　その一

◉おりさせ御位を讓られ。◉春宮皇太子、どうぐうとよむべし。◉この御齡にて受禪あり御鳥羽帝も上御門帝も四歲にて御位につき給へり、この帝も亦四歲にて天子になり給ふ。なり、おとゞは大臣なり。◉おぼしかまふること（御くはだてのこと北條氏追討の企）。◉院號のさだめ新に位を讓られし故院名の評議あるなり。◉家實のおとゞ近衞基通の子◉ひがしざまの鎌倉（北條氏）方にても。◉その心づかひすべかめりその用意すべき樣子である。◉あづまの代官關東より遣はしおかる京都の守護をいふ。◉かつがつぼつ。◉御勸じ勅勸にておとがめのこと（上皇光季を召し給へども參らざりし故之を誅し給へ）。◉いみじうく。甚し◉さるべくてくにしてくの如ら（義時も滅ぶべき時節到來したりと思ひながらも）。◉あなれの略。◉ものからものがら◉はかなき見苦しき。◉おほやけ官軍。◉みづからしたまふこ

とならねば上皇親征し給ふことにはあらず、君側の逆臣どものする事なれば、官軍といへど防戰を試みん。◉かつは又一つには。◉宿世前世の因緣。◉思ひなりてに心になりて。◉本意かねて心に思ふこと○素志。◉うしろ見えなむ敵にうしろを見せる（見を正しとすれど古來のならはしなり）◉うしろめたきうしろめ痛きにてうしろぐらきの意。◉横ざまの死ぬ犬死。◉かたみに父子互に。◉むねうちさわぎてて驚き。◉鳳輦天子の御乘物（こゝは上皇をさす）◉りんこうのげんぢう臨幸の嚴重（陛下の御親征をいふ）。◉とばかりらく。◉うち案じて思案して、考へて。◉かしこくもも。◉御輿おのりもの。◉さばかりの時も時には。◉かしこまり謹慎。◉軍兵をたまはせば軍兵のみをさし向け給はば。◉おぼしまうけべしと思ひ設ける。◉引かせて取りのぞく。◉ことなり特別である。◉御うまごのこともと公經は御孫を關東に遣はしたる緣故はいふもさらなり。◉北の方公經の奥方。◉はらから同胞（兄弟）。

◉さしいらへ返答。◉輕き事輕卒なる企。◉御ゆかり（緣故）。◉上達部◉殿上人◉あかで御心に滿足せず、いやく〳〵ながら。◉ものしたまはねど言ひ給はれど。◉世のいと心やましき世の中の甚だ面白からぬ。◉まじらひたまはざめり中院は此度の騒動に加はり給はらざる樣子である。◉おなじ御志にて後鳥羽院と御同意にて。

一一、新島守　その二

◉龍馬馬。◉あやしくなやめり非常に困難せり。◉ひびきのゝしる騒動する。◉まねびかたまれをすることしともできぬ。◉世界遠きところの意。◉誠のきは其の場合。◉みかた官軍。◉たか潮高き波、大波。◉みだれ入り都に亂入するなり。◉物にぞあたりあわてさわぎて物につきあたること。◉保元のためし保元の亂に崇德上皇を讃岐に遷し奉りし例。◉女院上皇の御母七條院、御きさき承明門院、修明門院。◉宮々御子雅成親王、賴仁親王。◉網代車あじろにあみたる車。

◉あやしげ粗末。◉今日をかぎりの御ありき都にゐ給ふも今日限りの御有樣。◉ものにもがなや昔の御代に恢復したきものよ。◉御ぐし御髮。◉おろす給ふ。◉をしかるべき御髮を落すにはまだ早き御年ばえなり。◉七條院の後鳥羽院の御母上。◉おり給ひ御位を讓る。◉土佐院土御門院。◉佐渡院順德院。◉天の下にはおなじ事なりしかば御位を讓りても天下の政治は在位の時も同じ事なれば。◉津の國のことば。◉こやのひまなき屋の如くに、この院(後鳥羽院)より出でし事なれば。こやにある葦にて葺きたる小すきまもなき。◉貌姑射の山仙人のすむ山、仙洞、霞の洞ともいふ、それより上皇の御所のことにいふ(以下は上皇のかぎりなく榮えさせしをいへるなり)。◉霞のほらに同じ。◉のどけくて世の中治り靜かに。◉ありてのまゝにありて。◉よしなき一ふしは事のことに。◉おのがちりぢり三上皇を初め皇子だちちりぢりに遠國にうつされ給ふ。◉さすらへ○流離。◉磯のとまや海邊の漁夫の小屋の中に交りて。◉ことゝとふれる。◉あま小舟漁師の舟。◉それまでと幾日間と。◉うしろめたさに不安心なるに。◉いつをはてまひはいつを限ともわからず、各院宮々の再び御對面のほども知れぬ御有樣。◉雲の浪遙かに遠きをいふ。◉おはします處隱岐の國なり。◉海づら海面。◉かたそへせる。◉けしきばかりしたりといふだけ(家の形ばかり)。◉ことそぎたりつである。簡略、そま◉柴のいほり新古今集西行の歌に、「いづくにも住まれずばたゞすまであらん、柴のいほりのしばしなる世に」とあり。◉たゞしばしとゝかの間と。◉さるかたになまめかしく簡略なれども、品よく風流に。◉ゆゑづきてけ何となくわありげに。◉しなさせ。作ら◉水無瀨殿後鳥羽院の離宮にて攝津國水無瀨川のほとりにあり。◉二千里の外はるばると海面をながめやること、伯樂天の詩に「三五夜中新月色、二千里外故人心」とあるをとりていへり。◉今さらめきたり今更の感じがする。◉こちたく甚しく、ことごとしく。◉われこれは我こそこの島に遷されて新にこの島守となりし者よ、沖ふく風よ注意して荒く吹く勿れの意。◉同じ世に今こそは斯の如き遠隔の島に流されて島守の身となれるが、一

生のうちに(同じ世に)再び都に歸りて住吉の月を見る事もあらんかとの意。

一二、都の錦

◉みわたせはの歌　一目にざつと見ると、柳の色と櫻の色とをまぜあはせて、この見わたした處の京都の景色が、とりもなほさず春の錦といふのであらう。◉ひさかたの歌　日光ののどかにしてゆつたりとした春の日なるに、なぜなれば花はこんやうにさわさわと心ぜわしくちりゆくのであらうとなり。◉はちす葉の歌　はすばは世の中の濁にそまぬと經文の中にといあるが、その樣な清淨なる心で、なぜあのやうに葉面の露を玉と見せかけて、人をあざむくのであらう。◉すみの江の歌　すみの江の松を秋風がさあ〳〵と吹くと、そのまゝだうだうと沖のあなたより浪の音をうちよせて來ると云ふ意なり。◉しら雲にの歌　さてもさやにすめる月なるかな、雲の上へとぐくほどの高い空をつれだつてとんで行く雁の數までが、ありありと見えるよとなり。◉朝ぼらけの歌　夜のくわつりとあけわたりたる時に見るほどに吉野の里へ雪がふつたよと云ふ意。◉しほの山の歌　しほの山のさしての磯にすんで居る千鳥の鳴くのをきけば、君の御代をばやちよ〳〵と鳴くのであらるよといふ意。(しほの山は能登の國にあり)。◉むすぶ手の歌　惣體山の清水といふものは、淺いものなれば、飲まんとして手にすくへば、その手よりおつるしづくのためにすぐ濁るによつて、思ふやうに掬ひてのまれぬものじや、丁度その通りにさて〳〵まあ殘り多き人に別れたことであるよ。◉瀬をせけばの歌　川の瀬をしがらみにてせきとむれば、流れゆく水でも淵になつて止まるものぢや、それに死んでゆく人をせきとむるしがらみがないのか、まゝならぬ浮世なりけるよ。◉わすれてはの歌　あまりのことにふと忘れては夢かとおもはるゝほどに、この深き雪をふみわけてかゝる山里に來て、君に謁見せんとは實におもひがけぬことであるよ。

一三、江戸時代の文學の一斑

◉布衣　無位無官の匹夫。◉弊竇　惡しき弊害のある事。◉鼓吹　意見を公表して主張する。◉儒教　孔子の說きたる教。倫理を修め品性を修養し、完然なる人格を養成せんとする一種の學風。◉經史　經書と歷史と。◉材幹　事をなすに役にたつべき技能ある人。◉人物登庸　人をひきあげて用ゐる。◉輩出　人物の相續いで出づること。◉碩學鴻儒　◉和漢混淆　◉憧憬　あこがるゝ。心はるかにおもひよる。◉慊焉　あき

たらざること。◉發揮あらはし出す。◉自ら任ずのやくめとする。◉雅文みやびたる正しき言葉にて書きたる文。◉排列べる。◉引喩たとへをひく。◉雅俗みやびたる正しき言葉と俗なる言葉。◉飄逸世外に逸脱して著處なきさまにいふ語。◉狂文つけい輕妙なる文。◉假名草子かながきの物語などの冊子。◉翻案本來の仕組をかへて立案する。◉隱微おくふかくかくれてあはれざるところ。◉淫靡みだらなる風俗。◉挑發事をいどみおこす。◉常套文句。◉推敲字句を考へ練る。◉浮世草子元祿時代に行はれた世態人情を描出したる小說本の類。◉赤本享保頃の草紙類。◉黑本天保文化頃の草紙類。◉青本◉黃表紙◉向上進歩すること。◉素養たるしたぢ。◉造詣學問の奧義に到達し熟練するを云ふ。◉戲作娛樂的の讀物などを作ること。◉滑稽本おどけほん。◉戲詩演劇に歌ふべく作りたる韻文。◉新生面新しき方面。◉絢爛あやありてはなやかなる。◉史劇歷史上の事實を仕組みて劇としたるもの。◉淨瑠璃◉市井間まちのあいだ。◉巧緻たくみにしてちみつなること。

一四、和藤内

◉知らぬ火の筑紫にかゝる枕詞にて、末もしらぬの緣語となせり。◉筑紫◉差へず◉鄭芝龍◉李蹈天◉韃靼支那北方の夷狄の名。◉吳三桂◉乳母が袖に捨て置きり乳母に預けて去りたりとなり。◉天地の父母天を父、地を母とたのむをいふ。◉承引承知する。◉具しれる。◉頓智にはかの思ひつき。◉憩ひ◉灣陽◉赤壁◉東坡姓は蘇、名は軾、唐代の文章家なり。◉配所罪をうけて流されし地。◉かひがひしくも、忠實に。◉たづきも知らぬ○よすがもなき。◉たぎつ波流るゝ水。◉末果しなき行末の限りなく遠い。◉ほうとと。◉我をぬかし自失すること。◉脚骨に。◉なぶるよなん、まよはすならん。◉魅さば◉小豆の飯の相伴狐は小豆飯を好めるもの故、その御馳走に預からんとなり。◉攻皷◉攻太皷◉喇

吼（ほ）◉ひやうひやうどの音。太鼓な　◉すはは（さては）。そりや、　◉茫然（ぼうぜん）やり。　◉どうどう風のふく音。　◉すさまじ（すごくおそろしい。）　◉臆（おく）せず（わるびれず、びくともせぬ。）　◉よめたりつた。（わかつた。）　◉鉦（がね）　◉列卒（せこ）獣をかり出すもの。

◉嘯（うそぶ）くる。（ほえる。）　◉所爲（しわざ）　◉大人氣（ちとなけ）　◉一挫（ひとひし）ぎ　◉西天竺（さいてんてん）（印度）　◉摺（ず）り　◉爪（つめと）磨ぐ（爪をみがく。（爪をむき出すこと）。）　◉左手（ゆんで）　◉右手（めて）　◉もぢつて（身をもぢる。）　◉根（こん）しんぼう（根氣）。　◉大童（おはわらは）（髪をふりみだしたる形。）　◉髪膚（はつぷ）（髪やはだえ（身體の末までも神より賜はりしをいふ）。）　◉五十鈴川（いすゞがは）（伊勢大神宮の前を流るゝ川、（身にぬるをいすゞとかけたり）。）　◉納受（なふじゅ）　◉神祕（しんぴ）（神の不思議。）　◉じりゝ〳〵（そろ）。　◉わなゝきへる（ふる）。　◉尾筒（をづゝ）（尾のこと。）　◉ひるむ（よわる。）　◉天の斑駒（あまのぶちこま）　◉素盞嗚尊（すさのをのみこと）　◉うぬま（きさ）。　◉風來人（ふうらいじん）いもの。　◉笑壺（ゑつぼ）こび（よろ）。　◉ほざくり（ぬかした）の意。　◉舌長（したなが）しふに（過言といふに）同じ。　◉つき出し（ところ）語に用ゐたり。　◉詫（わび）言させ（禮をいはせよ。）　◉いかな事（こと）（決して、どうあつても。）　◉睨（ね）め　◉近松門左衛門（ちかまつもんざゑもん）巢林子と號す、淨瑠璃作者の泰斗にして古今獨歩と稱せらる、享保九年十一月歿す。　◉國性爺合戰（こくせんやがつさん）淨瑠璃本なり。

一五、理想（りさう）

最上最高の眞理と考へたる觀念

◉一旦夕（いつたんせき）（一朝一夕と）いふに同じ。　◉徐々（よくぼつ）。　◉著々（ちやくちん）〳〵と。　◉勇猛精進（ゆうもうしやうじん）（勇氣を出し一生懸命に修行する。）　◉名聞（めいもん）外聞（名譽評判）。　◉輕擧（けいきよ）みの行ひ。　◉歳華（さいくわ）歳月。　◉白駒（びやつく）の隙（ひま）を過ぐる（歳月の流れて早きたとへ。）　◉忽焉（こつえんすぐ）に。　◉毫釐（ごうりん）ちよつとでも。　◉耳已（みゝすで）に蟬鳴（せんめい）を聞きき夏もすぎて。　◉鬢已（びんすで）に霜色（さうしよく）を現ずくなる。（頭髪白　◉明日（あす）ありと櫻（今日見なくとも明日もあるからと心に油斷をすると、はかない櫻の花（仇）に夜の中に風が吹いて散らさない者とは限らぬ、人事又斯の如くなすべき時に猶豫なくなすべし、明日を頼む勿れとなり。）　◉矛盾（むじゅん）（矛はほこにて人を殺す兵器、盾はたてにて矢をふせぐ兵器、矛を造る者と盾を造る者とは其用途の目的を異にするより反對す

ろの意に用ひる。◉箴誡しめ。◉浮屠氏佛者。◉煩惱即菩提す色々の思ふ慾心はとりもなほさず菩提(無慾の佛の心)心である。◉平等即差別平等は則差別である。◉會し了解する、さとる。◉會得了解。◉墮獄す地獄におちる。◉因循ぐずぐずとする。◉踟躕ためらひまよふ。◉全分實現全體を實際にあらはす。◉盡忠誠意をつくす、まめやかにつとめる。◉刹那ごく短い時間。◉未得まだ自分の物にならぬ。◉既得既に手に入る。◉腸を斷つはらわたをちぎる程の苦痛○斷腸の思ひ。◉芭蕉を德川時代に於ける俳諧の名人、正風の一派を開く。◉融會自在充分に會得する。◉如意不斷たえず心中にあがく。

一六、人の心

一、驥のたぐひ

驥は千里の馬を云ふ。

◉すなほ淳朴。◉世のつねろしき人。世の常のよ◉下愚の性云々甚だおろかなる人には教育の效果およばぬといふ。◉僞はりて云々至愚の人はいつはりて小利にて帝の名なり。◉驥を學ぶ揚子法言に晞驥之馬亦驥之乘也晞顏之人亦顏之徒也とあり。◉舜の聖

二、賴むべからず

◉勢ひ權勢家といふ。◉左右廣ければ云々左右身邊さわるべきものなければ身のわづらひなく心やすしとなり。◉前後遠ければ云々前後にゆとりがあれば身窮迫を告ぐることなしとなり。◉きびしい物にゆとりのなきこと。◉天地は限るところなし天地は洪大無邊にしていれざるところなしとなり。◉人の性何そことならむ人の性天地の洪大なるに何の異りたるところがあらうぞとなり。◉寛大にして極らす云々ひろく洪大にして極りなきが如くなれど、物としていれざるところなくして、喜怒もおこらずとなり。

一七、春夏秋冬四篇

一、雨後の花

◉都のみやび　都の風流。はなやか。◉心そらにつかず　心おちつかず。◉ばうぞく　放俗。無風流。◉やごとなき　高貴の人。

◉つゝましみてみだり　事をつゝしみてみだりにせざるをいふ。謹慎。◉ひさごたん。◉かうより　紙よりり。◉われはがは　自分こそはといはんばかりのほこりがほ。◉風情す。◉はやてく　俄に烈しく吹く風。◉ひらめく　ひら〳〵と光る。◉いかに此花云々　此花を見すてゝかへるのは、雁の春霞のたなびくころになると、花を見すてゝかへるにならつてゆかといへるなり。◉つらさ　花をみすてゝかへるつらさの意。

◉櫓の聲云々　雁の聞を櫓にたとへて、櫓聲ばかりを雁にならへよかもしらずし、花をみすてゝかへることはまなぶなよと云ふなり。◉ひろごるかる。◉露　うろたへさわぐ。◉なる神　かみなり。◉心おごり　心にたかぶる、先見の明にほこる。◉かぞいろ　父母のこと。◉思ふ　時はどの詞を加へて解すべし。この下に注意すべしな。◉松平定信

二、泊酒舎にて蓮を見る

泊酒舎は清水濱臣の家の號なり、下谷池の端にありき。

◉大比叡　近江の琵琶湖（大わだは大海）なすは「如く」の意。◉比良の大わだなす　近江の比叡山。（即泊酒舎なり）。◉あらがねの　枕詞。◉土さへ裂く　暑の盛をいふ。◉おほせたる　おはせる、つけたる。◉ゆはたぞめ。◉宮路　都の大路。◉衣笠　天蓋、絹布に張りたる笠。◉わらうだ　藁にて作れる圓き座ぶとん（圓座。◉五百津つどひつないだ玉。◉いろくづ　魚類。◉衣の紐を解きさげ　暑さに帶紐をときゆるめてくつろぐなり。◉おばしま（欄干。◉みづ枝　みづみづとした若葉の枝。◉えならぬ　何ともいへぬよき。◉たとしへ　たとふべきかた。◉西の湖　支那の西湖をいふ、東京河内省懐府永順縣にあり、風景絶佳を以て世に鳴る、故に我國の詩人、不忍池を小西湖と稱す。◉異國の書　漢書。◉さる方の友垣　その方（漢學者）の友だち。

◉丹塗ぬる。赤く　◉唐兒　支那の子供、支那江南の俗、婦人蓮をとりて戯とすとあり。　◉日の入る國　西の國（日本を日の出づる國といふに對していふ）。　◉法に心を寄する　佛たに歸依すること。　◉上の品の臺　極樂に八功德水の池あり、その池の蓮の臺に座るをいふ。　◉あれ出で出る。　◉よび出づ　吟出する。　◉もだもあらず　居られず。　◉なべて世の　清き心の人の友とすべき花はこの蓮の花なりとの意。　◉しのぎ　おしほして。　◉ふくめる　つぼむ。　◉をち方　遠方。　◉加藤千蔭　加茂眞淵の門人にて國學者なり、和歌和文をよくし筆蹟に巧なり。　◉朮が花　千蔭の歌集なり。

三、江の月

◉つゞりさせて　ふ蟲　きりぎりすのこと（秋になりてなく蟲、きりぎりすのこと）。　◉いにしる　去る。　◉たゆたふ　ぐずぐずする。　◉長月のかげ有明になりなむ　九月もなかばすぎて殘りすくなくなる（九月末）。　◉寢待十九夜。

◉ゆくりなく　用意もなく急に。　◉挙ふる　つれる。　◉つふやき　小言をいふ。　◉物せむ　月見をする。　◉心あての舟長居た船頭。　◉寢おびれける。　◉ないがしろ　ぞんざいにしどけなく。　◉をりしもこそあれ　今夜でなくてもよき折もあらうに。　◉面もち　つき。　◉すさまじげなるものから　興ざめがほであるが。　◉舟よそひ　出船の用意。　◉なかなかて　却ての意、却つて無駄である。　◉けに　殊にまさりて。　◉かうやう　かくの如き。　◉水馴棹　船をやる棹、一首の意は、棹さして我が月見にこなかつたならばこの月は水の上で誰も見る人もなくひとり空しく照らすことならんとなり。　◉ほこりがが　じまんがほに。　◉うそふく　口すさぶ。　◉すみ渡る　すみわたるこの月に來給ひし君の船の友として漕ぎ後れて來れる人はこゝにある、強ち君ひとりの月見にてはなきものをとの意。　◉むくつけき　氣味わるい。　◉いざなはばや　誘はんか。　◉從者（供）。　◉客人　◉ものぐるはしきじみた。　◉おくらかされぬる　氣ちがひとりのこされる。　◉せんぜられぬる　先んぜられたる。　◉むやひ

舟と舟とをつなぎ合せる○もやひ。◉舷　◉うちあげげる。　◉野矢常方國學者和歌をよくす。　◉蓼園集常方の歌文集なり。

四、雪中の眺望

◉籬き。　◉山となりくになる。山のごと　◉妹がね妻。　◉ほだきぐ。帽、た　◉砥利。酒德　◉蓬が庭蓬などの生ひ茂りし庭。　◉玉しきわたし雪のふりつもれるなり。　◉見さくる遠く見やる、見わたす。　◉そくへのきはみろへ退きたるはて。　◉刀根の川浪川。根　◉水上　◉秩父　◉五百重山　◉たゝなづく合ひつゞく。　◉なづらふ秀でゝ高き(池に　◉時じく季白雪をいただく(四　◉つぎていで。　◉はゞかるひろがる。一ばいに　◉うつらうつらとり。　◉見つゝしをれば見て居れば(しは詞をつよめる辭)。　◉片ひらきなるきたる。半分開　◉ひとりごちとをいふ。ひとりご　◉橘守部德川時代の國學者。

一八、春光秋色

◉熙熙やはらの草木などを枯すこと。　◉凋落おつる。　◉雍雍和樂の貌。　◉穠艶つやつやしく貌。　◉金氣秋の氣。　◉肅殺秋氣

いて春ものどかにおもはぬとなり。　◉世の中にの歌長閑であらうにこの花があるために此のやうにさま〳〵心がそわつ　◉反言へす。　◉月みればの歌月見れば千々に心のくだかれていろ〳〵物になぜなれば自分のみが悲いのであらうぞとなり。かなしい事ぢや自分ひとりの秋ではないの　◉直叙感想を直にそのまゝ敍述すること。　◉石激の歌水の流れておちかゝる垂るとの早蕨が冬の間は土中にかゞまれる春の暖氣にあひて萌え出づる樣になりたるがよろこばしとなり(これは志賀の皇子が垂水の地を封戸に加へられたまひしをよろこびてよみたまひしなるべし)。　◉今朝の旦開の歌春日山の草木も霜がふりかゝつてさぞかしいろづいて居るであらう故郷のしたはしくて吾心もおのづからいたむとなり。　◉和氣洋々のとかにおだやかな氣がみちたりてあふれんとするさまをいふ語。　◉雀躍よろこばしくてこおどりすること。

一九、餅の辭

◉常住（じやうぢう）平常。◉奈良茶（ならちや）飯のかゆにして中に、大豆正月のものとたしかにきまらずの意。◉雑煮（ざうに）◉具足鏡開（ぐそくかがみびら）き餅（もち）昔武家にて正月男は具足に女は鏡臺にそなへし鏡其月の二十日に切りて食しいことあるを云ふ。◉睦月（むつき）陰暦正月をいふ。◉彼岸（ひがん）春分秋分の日を中心として、前後三日合せて七日間行ふ彼岸會をいふ。◉春雨（はるさめ）つれづれとふる　はるさめがしとしとものさびしくふる。◉搔餅（かきもち）にひし餅を作るをいふ。◉ふけ行く　春もふかくなりゆく。◉いぢりやき　火の上におきていぢりながら燒く。◉身（み）にしむ　身にふかく感ずる。◉卯月（うづき）陰暦四月。◉蚊帳（かや）◉軒（のき）にもちつくて　のきさきにむれて上下し餅つく樣して飛ぶこと。◉牡丹（ぼたん）餅（もち）牡丹の咲く頃きなこ又はあんにてまぶしたる餅を作りて牡丹餅と云ふ。◉千團子（せんだんご）四月十六日に江州三井寺の鬼子母神へ參詣するに、此神子供千人あるを以て餅千個を供する故に云ふ。◉粽（ちまき）茅にてまきたるもち。今のかしはもち。◉水無月（みなづき）陰暦六月。

◉氷餅（こほりもち）餅を寒の水にて作り乾したるもの、六月一日に氷室を開きて宮中に獻ぜしが、近き頃氷餅を作りて氷室の節供として用ゐたり。◉土用（どよう）年に四度あり。夏の土用は小暑の後十三日七月廿日頃より立秋に至る間を云ふ。◉水餅（みづもち）水にひたせる餅。黄粉砂糖をまぶして食ふ。◉上戸（じやうご）酒量多き人。◉文月（ふみづき）陰暦七月。◉魂まつり　盂蘭盆會。精靈會。◉お萩（はぎ）お萩の餅のことなり。◉秋もたけ　晩秋となること。◉こもち　粉餅にて黄粉などまぶしたる餅をいふ。◉もち月の團子（だんご）十五夜の月見團子なり。八月十五夜の月見團子をいふ。◉栗の子餅（くりこもち）栗をつき交ぜた餅。重陽の節物。◉亥の子（こ）十月亥の日に萬病をはらふとて搗く餅をいふ。◉時雨（しぐれ）◉こがらし　秋のくれより冬にかけて吹く風。◉御佛事（おぶつじ）のもちひ　報恩講とて十二月廿二日より廿八日迄開眞宗本願寺にて本末諸寺共修する式にして、此日親鸞上人の御影の前に鏡餅を供ふるより云へるなり。◉つもる粉雪（こゆき）粉雪は細かくふるゆき。◉もち雪（ちぎつてなぐ）るが如き雪。◉霰（あられ）も酒の名のみにあらず　霰も霰酒てふ酒の名のみにあらず、餅にもありとなり。◉おとご餅　十二月は一年の最終の月なれば乙子月といひ、其朔日を乙子の一日といふ。此日餅をくへば病をさくと云ふ俗説あり。◉師走（しはす）陰暦十二月。◉詩人は酒のみ云々

李太白、杜子美、白樂天など皆酒を友とし愛したるを云ふ。

二〇、酒

◉ともある毎に兎もあれ毎にの意にて何事かあるたびになり。◉人めをはかりる他人の注目するを考へて。◉すずろ何故となくむやみに。◉うるはしき人容姿端正なる人。◉おこがましくばからしく。◉息災無病壯健。◉あさましさ興むる。◉よびふしみてれる。◉生を隔つ幽明處をへだつの意にて死人の如くなるを云ふ。◉おほやけわたくし公事私事。◉わづらひ迷惑。◉ねたく口をし腹立しく殘念なりの意。◉ひとの國外國。◉これらになき人ごとにて此の國にはなき他事にて單に話にのみに。◉あやしくめずらしく。◉ひとの上他人の上。◉心憂しろづらし。◉思ひ入りたるさまさまに思慮深きに。◉心にくしおくゆかし。こゝろの底のはかられぬほどの意。◉思ふところなく不用意に。無思慮に。◉紐はづし裝束の紐をゆるむること。◉用意なき氣色不心得なりたりしほどの人。◉すぢるでる。一曲かな◉興じ見るおもしろがつて見る。◉我身いみじきわが身分のすぐれたる系圖などの意。◉傍痛くかたはらいたし、そばに居に氣の毒におもふまでに。◉下ざまの下々の人。◉のりあひ言ひあふ。◉いさかひ口論する。◉はぢがましはづべきことと思うて。◉許さぬもの人の承知せぬもの。◉おし取るむりにとる。◉物にものちぬきはらぬ馬、車、などにもの中以下の人。◉よろぼひよろめくこと。◉ついぢ土塀などをいふ。◉えもいはぬ事云々言葉にいはれぬ事をする。嘔吐などする。◉如何がはせむ如何にせん。

二一、世界の四聖　その一

聖は智德の圓滿無缺の人をいふ

◉宗師柱となり師となる。◉儀表世のてほん、のり。◉釋迦◉孔子◉基督◉宜なるかなもつともの事

である。◉伽毘羅國ヒマラヤ山下、ガンジス河の上流にあり。◉淨飯王◉麻耶夫人◉悉達多◉族名種族の名稱。◉佛陀◉出家成道後妻子をすてゝ修行の爲家を出て人生の大道をさとりし後。◉奥儀ふかきどう眞理。◉正覺に徹底さとりをひらく。◉巡錫めぐりまはる。◉跋提河◉哲學宇宙の眞理を研究する學問。◉思索研究。◉欽ぴ◉幽玄おくぶかい。◉談理理をかたる。◉慘憺むごたらしい、あはれな。◉苦行くるしい行。◉流派學問の流儀。◉元々〳〵百姓。◉歸命天命を信じて心を安んずる。◉無邊へんかぎりなき。◉木鐸人のみちびき（教令を布くときならす鈴）。◉歸依歸したのむ。◉丘◉魯國◉令聞評判。◉擢多くの中より抜でえらばれる。◉大司寇三公の一なり。◉治績政治のきばえ。◉想望したひのぞむ。◉齊王◉老軀を挺し老年の身をひつさげて。◉高足すぐれた門人。◉遊說自分の說をのべまはる。◉蕩然大に衰へすたれたるありさま。◉地を掃ほろびてなくなる。◉食み◉陵夷おとろへる。◉頽廢すたれる。◉慨然なげきいきどほるかたち。◉故國生れた國。◉狂瀾を既倒に飜さんとす高き涙の今にもくづれかゝれるをもとへちどす（衰へたる國勢を元の如くに引きかへす）。◉漂浪ろうろうさまよふ。◉名教大義名分。◉老脚蹉跎老たる足もよろ〳〵とする。◉子貢◉夫子先生といふ如し。◉下學低い所からだん〳〵學ぶ。◉希臘◉雅典◉彫刻師ほりものし。◉奇ふしぎ。◉詭辯學派Sophism（ソフィスト派）天地に不思議の眞理なし、たゞ人々の觀念に對して存するなりといふ說を唱へる一派。◉跋扈はびこる、勢力をほしいまゝにする。◉空文文字の上ばかり。◉裨益ためになる。◉時弊當時のあしき弊害。◉自ら任じ自分より外にない、それが自分の任務だと信じて一身をその事にまかす。◉諄々〳〵親切に、こまかに。◉論法ぎろんのしかた。◉一歩も假借せず少しもゆるさず。◉侃諤の正議強直なる正しき議論。◉稀代世にめづらしいすぐれた。◉風靡風が草木をふきなびかす如くに世の中の人をなびかし從はす。◉喬木高い木。◉群小多くの小人ども。◉讒訴そしりつたへる。◉惑亂まよはしみだす。◉抗

議答へ駁する論。◉慨世世の中をうけんそんせなげく。◉百世の眞理後世に至るも動かざる眞理。◉傲岸おごりたかぶる。◉不遜ぬ不禮の者。◉泰然おちつく、平氣。◉命のみ天命なり、時の運。◉脱獄ろうをにげる。◉輙ち何爲るものぞ如何なるものぞ（何で もないものなりの意）。◉従容ゆつたり、へいき。◉逝きぬ死ぬ。◉耶蘇◉膏灌がれたる者救世者。◉猶太◉木匠大工。◉豫言者未來の出來事をいひあてる人。◉洗禮身體を清めて信者となる儀式。◉傳道布教して道を天下に傳へひろめる。◉迫害人より難儀な目にあはされる。◉福音幸福を與ふる。◉萠芽きざし。◉胚胎物のはじまりにいふ語。◉災異わざはひやあこもる、できる。◉荐に◉寧日安心な日。◉收斂人民より租税をこもる、できる。◉侮慢あなどり。◉淫祠みだりなる神、◉放縱ほしいまゝ、勝手きまゝ。◉詭辯譎詐なる辯說。◉缺焉物たらぬろさま。◉渴望深く望む（のどかはき）。◉使命を負へる天の命令を身にうけて。◉昂然精神を高まる。◉渴望て水を望むありさき）。◉麾

然◉磔刑けの刑。◉晏然ゆつたり、平氣、おちつく。◉彼等基督を刑せし官吏をさす、彼等がこくかなしみ哭なげく。◉抵抗さからふ。◉景慕あこがれと。◉詠歎なげき。◉讒奸讒佞なる奸智にたけたる人。◉釘殺て殺される。◉顧慮かへり見る、死すること家へ歸へるがの如く。◉嗟歎なげく。◉衆生一切の動物。◉脅迫迫害に同じ。◉揚言ことばをはりあげる。◉憤怒怒り。◉悔恨くやむ。◉怨嗟なげく。◉怨恨うらみ。◉怨望うらみ。◉怨讐かたき。◉怨言うらみ。◉怨聲うらみ。◉怨毒うらみ。◉怨恨うらみ。◉怨望うらみ。◉怨讐かたき。◉怨言うらみ。◉怨聲うらみ。◉怨毒うらみ。

三三、世界の四聖　その二

◉煩惱人間のあらゆるわづらはしき情慾、願望、苦慮。◉斷滅なくする。◉涅槃去りて正覺に入る。◉我利慾の心。◉執着その心ばかりに深く思ひこむ、しうねん。◉脱却とつてなくする。◉究竟つまり、至極まる。◉百行すべての行ひ。◉稟

◉後天の氣質教育や習慣によりて養成されたる性質。◉これを天からうける性質をいふ、後天に對して先天といふ。◉知德合一說

◉靈魂精神。◉垂訓たれたるをしへ。◉極意究竟の意味。◉包括つゝみこめる。◉右の手に爲す所云々

善をなすに人に知らしむる勿れの意。◉鑒たまふ◉是非善惡を評する。◉啓か◉窄く◉磐◉精髓極意に同じ。◉色彩を加ふいろ〳〵とかざりをつけ加へていふ。◉凛々りゝしい、いきいき。◉累代るゐだい〳〵。◉道念道德上の觀念。

◉安慰なぐさめ○安心立命。◉高山林次郎文學博士、羽前鶴岡の人、樗牛と號す、明治卅五年十二月歿す。◉樗牛全集高山林次郎の文章をあつめたるもの。

二三、妹を諭す

◉洗米精米を清く水にて洗ひ神佛に供へたる米。◉精進身をきよめて◉潔齋不淨に接せざるものいみする。◉靈神樣の先祖をまつれるもの。◉番人獄屋の番人。◉精進日釋迦の誕生なる日ればなるべし。◉法華經◉普門品普門の法を明にし普く人を佛道に引き入れたまふ門戸の意。◉觀音力觀音の法力。◉首の座首うたるべき人の座する所。◉大乘佛の眞理をとき乘方便を設けて俗耳に入りやすからしむるやうは卑近にときいるもの。◉下根生れつきの劣れる人。◉上根生れつきのすぐれたる人。◉ひたものひたすら。◉一心不亂心を一點に集中して他事を混ぜざるを云ふ。◉難題應じがたきひがゝり。◉苦患くるしみなんぎ。◉退轉却行の意。◉不退轉深く佛を信じ心を他にうつさぬやうにするを云ふ。◉耳に入らぬ解せざること。◉出世間生老病死の四苦を免るゝ教をいふ。◉濟世世をすくふ。◉濟度衆生を苦海よりすくひて彼岸へわたすをいふ。人の生死を此岸といひ、煩惱を中流とし證果を得たるを彼岸といふ。◉禍福は繩の如し禍福の輪轉定りなきをいふ。◉死せざる人死して猶其言行の世に賞讃せられて人の爲め世のためになるをいふ。◉所詮つまさま運の意。◉勘辨かんがへわきまへる。◉心學本心學として神儒佛の三道を綜合して、平易なる言語と通俗なる比喩とを以て、善心を啓發するを目的としたる一種

の説き方　◉のどかさよの句　神佛を信心するにはあらざれども、あまり天氣よくのどかなる日和なれば、とて、寺詣するものもあるよと云ふ意にて、神佛詣をするからとてあながちに信者といふわけではないその意。

修訂中等國語讀本卷九字解終

修訂中等國語讀本卷十字解

一、國典の研究

◉國典（こくてん）邦書。◉懷抱（くわいはう）もつ。◉反問（はんもん）へす。◉淵源（えんげん）事の本源。◉基礎（きそ）もとゐ、どたい。◉典籍（てんせき）書籍。

◉故典（こてん）古昔の儀式又は諸の法式。◉譬喩（ひゆ）たとへ。◉贅言（ぜいげん）贅はこぶなり。無用の言葉。◉腦裏（なうり）頭腦の裏。◉策略（さくりやく）はかりごと。

◉明瞭（めいれう）あきらか。◉要素（えうそ）事物の成立効力等につき必要なる元素。◉主腦（しゆなう）おもなるもの。◉包括（はうくわつ）ひつくるめる。◉斟酌（しんしやく）彼是を參照して善惡を取捨すること。◉折衷（せつちう）事の中をとりて輕からず重からず適當なる處を得しむるを云ふ。◉六經（りくけい）詩經、書經、易、春秋、禮記、樂記。◉隻手（せきしゆ）かたて。

◉註解註をいれて本文の意義を解釋すること。

二、明治の詔勅

凡そ臨時の大事には詔と稱へ尋常の小事には勅といふ。さのを勅とす、故に外國使臣に命を傳へ、改元、改錢、大赦、神社、山陵の告文、立皇后、立太子、任大臣等を詔書とし爾餘を勅旨と稱す（我公式令に據る）

一、五箇條の御誓文

◉萬機の政治。◉公論輿論に同じ、公平す る一般多數の議論。◉經倫國家ををさめととのふるはかりごと。◉官武一途一般の役人も陸海の武官も公平にへだてなく。◉陋習よろしくない習慣。◉公道正しき道。◉皇基國家の基礎。◉振起ふるひおこす。◉國是國を治むるに尤もよしと考ふる政策。

二、大日本憲法發布御詔勅

◉祖宗皇祖皇宗に同じ、天照大神及歴代の天皇のこと。◉遺烈のこされたいさをし。◉惠撫慈養いつくしみめぐむ。◉念ヒ ◉懿德大きな德。◉良能善良なる知識才能。◉翼贊たすけたすける。◉履踐ふみ行ふ。◉卒由したがひよる。◉循行たがひ行ふ。◉統治すべ治める。◉愆ラ ◉享有所のもの。◉紛更いろいろと改める。◉在廷朝廷に居る。

三、韓國併合の詔書

◉杜絶ふさぎたつ。◉堵ニ安ンゼズ堵は墻なり墻内に安んじ居るをふい（安心せざること）。◉瞭然あきらか。◉優遇てあつきあつひ。◉綏撫やすんじいたはる。◉鞏固かたくする。◉總轄一つにすべてくくわつする。◉有司つかさびと。◉體し身とめておこなふ。◉緩急危急の場合をいふ。

三、菅公その一

◉味酒安行　◉流竄島流し。　◉臺閣中央官廳。内閣。　◉寵臣　◉遨陲　◉遷客流人。　◉轉變

◉悲慘あはれ。　◉悽惻かなしみいたむ。　◉こち吹かばの歌春風が吹いて氣節があたゝかになつたならば、毎年の通りに花を開いて芳香を放てよ、主人がゐないからとて春をば忘れなよとなり。　◉君かすむの歌最愛なるわが妻よ、御身がすめる宿の梢の見えなくなるまで、後をふり向きふり向きしながら、予はなつかしき我が家をあとにして都を出たぞとなり。　◉太政官八省百官をすべ、天下の大政を總理する役所。　◉官符太政官のかきつけ。　◉純然つたく。　◉慘憺あはれ。　◉自從勅使駈將去勅命により流人となり警固の士におくられて京を退いてより。　◉父子一時五處離親子は同時に五箇處にはなればなれとなつた。　◉口不能言眼中血口には何もいはぬが眼中は血の涙である。　◉俯仰天神與地祇俯して地に訴へ仰いで天に告げて我が寃をはらさんとすれども。　◉東行西行雲渺渺蒼天はいたづらに雲渺々として、或は東に或は西にゆきかふのみにして何のこたへもなし。　◉二月三月日遲々二月三月とすきゆけども春日遲々として日は徒になが く、誰語はん友もなし。　◉重關警固知聞斷くとざされて出入の客もなく、京の消息も杳としてわからない。　◉單寢辛酸夢見稀ひとり寢の誰が身の不遇をなぐさめん人もなく、夢にさへ京の事を見ることがまれだ。　◉山河邈矣隨行隔山河はたゝばつとして行くに從つて京の地をとほざかり。　◉風景黯然在路移どこを見ても見るところの風景は明かならずして、行くさきは皆同じことである。　◉平到謫所誰與食幸に道中つゝがなく無事に流竄されたる地に到達するとも誰と共に食することが出來やうか。　◉生及秋風定無衣このまゝにて生きながらへて風颯々たる時節になつたならば、定めて衣がへすべき衣もなからう。　◉古之三友一生樂古人は琵詩酒を以て三友として無聊を慰むるの具としてたのしんだが。　◉今之三友一生悲の此身にとつては、三友はかへつて身をいたましむるの具となるのみである。　◉古不同今今異古年月のかはると共に時勢もかはるべく、昨の非今の是となりて今の是も後の非となるは何のふしぎかあらうか。　◉一悲一樂志所之悲といふ樂といふのも唯心のゆく所のまゝによりて如何とも云ひ得らるゝのである、あきらめてしまへば何のことはないのである。　◉腸を斷つかなしくならしむる。　◉姨　◉蓬萍き草の如

く轉々處を定めざるを云ふ。◉鳴けばこその歌鷄の聲のきこゆればこそはや夜があけたとて別れもせればはなのじやさすれば、こんな別のつらさを見ることもなからうに。◉驛長莫驚時變改りかはるをおどろくな。◉一榮一落是春秋人間の榮枯盛衰は四季の變遷の如きものである。彼れも一時これも一時じやぞよ、あきらめてしまへば何のことはないのであるぞ。◉長亭短亭しゆくばみちの或は長く或は短き。◉絶好このうへなきよき。◉名利名譽と利益。◉危殆身をあやうくするもの。◉憂悶うれへもだへる。◉懷慕したふ。◉現境の境遇。◉思料おもひはかる。◉詠歎詩歌を吟詠すること。◉天分生れつき。◉煩惱心をなやます妄念。◉讒訐讒言をいひこじ訐者。◉無告の流人むじつの罪を訴んにも訴へるところなき流人。◉大成りあげる。◉天道天地主宰の神。自然の道。

四、菅公その二

◉性靈しやうれいもちまへのふしぎの心靈。◉洗錬あらひあげきたふ。◉藻思詩文の上にあらはることばのあや。◉汪溢大にあふれる。◉面目躍如目の前にあらはるゝ。◉摯實つすぐなり。◉痛切に適する。◉卒讀にはかうちつけによむ。◉封緘◉紀長谷雄◉菅家後集◉離家三四月家を出てからはやなみだをとすひやくせんかうなみだがとめどなく行ながれてとゞまらぬ。◉萬事皆如夢人間の事といふものは皆夢の如くはかないものである。◉時々仰彼蒼時々彼の大空をあふいで長歎息をする。◉杜ぢ◉警吏警固の役人。◉檢束自ら心をとりしまつてつゝしむ。◉一從謫落在柴荆ひとたびろにんとなつてわびしき住居をしてより以來。◉萬死兢兢蹋蹐情覺悟しておそれつゝしんで戒愼の情にたへない。◉都府樓纔看瓦色都府の樓は近けれども屋根の瓦が見えるのみである自分は少しも外へは出ない。◉觀音寺只聽鐘聲觀音寺は遠くしてたゝ鐘の聲をきくのみで寺は見えない。◉中懷好逐孤雲去心はたゝ空ゆく雲をおうて都の空へ去り、◉外物相

逢満月迎目にふれるものみな憂愁のたねならぬはなく、はや十五夜の月を見るときは來た。◉此地雖身無檢束ぶんを束縛するものはなけれども。◉何爲寸歩出門行門をいで外出することができやうか。◉一縷の望すぢの望。◉我爲遷客汝來賓こゝのまろうどであるぞ。◉共是蕭々旅漂身がら汝もわれも共に旅の身の上である。◉欹枕思量歸去日のく日をかんがへてみれば。◉我知何歳汝明春汝は明春になればかへるのである。◉重陽九月。◉愁臥づんてをる。◉去年今夜侍清涼去年のこよひは清涼殿に侍て天子のおそばに侍り。◉秋思詩篇獨斷腸秋思といへる題にて詩を詠して奉りしことを思ひいで、ひとり今昔の感にたへぬ。◉恩賜御衣今在此君よりたまはりたる御衣はいまもさゝげてこゝにある。◉捧持日日拜餘香もちて當時の餘香を拜して居る。◉顔容たちて。◉黄萎顔色白霜頭顔色はやせおとろえて血色なく、頭髪は霜の如くまつ白くなつてしまつた。

◉況復千餘里外投かにある身においてはなほさらである。◉昔被榮華簪組縛昔京に居たときは笄や組紐に衣冠をとのへた身が。◉今爲敗謫草萊囚今は流人となつて荒蕪したる地にとらはれ同樣の身となつた。◉月光似鏡無明罪わが寃罪をあきらかにするよすがもなく。◉風氣如刀不破愁風はさむくして身を切ること刀の如くなれども、わが愁心をたつことはできない。◉隨見隨聞皆慘慄みるものきくものみなわが心をいたましめざるものはなく。◉此秋獨作我身秋たましむるあきとなつたのである。◉不遇はせ。◉天命の否塞運命のふさがり。◉夕されば歌くれがたになつて各處にたちのぼるゆふげのけむりとなり。◉山わかれの歌山にたちわかれてとんでゆく雲のくれ方になれば、又かへつて來る影を見るにつけても、吾が身もやがて此の如くに京にかへり得らるるならんとおもへば、たのもしくおもはるゝとなり。◉あめのしたの歌わがきて居る衣のかわくひまのないのは、天の下わくひまもないほど雨がふるためであらうか。

◉つくしにもの歌　むかし在原の業平は遠く紫匂ふむさしのにすむべき宿をもとめたといふことであるが、このつくしにも紫草の生ふる野邊はあれど、あらぬ寃罪をうけてそれで同情してくれる人はなしとなり。　◉左遷　官をおとさること。

五、琵琶行

◉小夜　◉人もなぎさ　人もなきなきさ。　◉怪しき心　奇しと思ふ心。　◉引出物　もの。　◉みめかたち　容色。　◉ありしにもあらず　昔のさまでもない。　◉世に經る力　世をわたる力。　◉詮方なく　得ずして。　◉とつぎ　人の妻となる。　◉別を惜むく　わかれづらおもふ。　◉懇にせねば　しんせつにせぬから。　◉待たすしもあらず　まちこがれぬといふことはない。　◉空しき船　身ひとりの船。　◉すさまじごし　ものすごし。　◉司を遁れして　官を辭して。　◉洸めりて居る　洸淪して居る。　◉心ほろし　こころさびし。　◉ほとほとど　殆んど。　◉袂くちぬ　涙のために衣の袂もくちた。　◉いにしへにの歌　昔ありにしことの始終をつくしてきくことのなくば、なみだにひぢて悲みなげきたりとなり。　◉ものがたり　昔の物語をきゝしが故に、同情の念にたえずしてなげ

六、狂文二篇

一、鼠を責むる詞

◉偃鼠どぶれずみ。　◉肉池　にくたい。　◉はめなんかめんか。　◉おとし　穽。捕鼠器。　◉枡おとし　に量らばますおとしにかけて罪の輕重を計つたならば。　◉内縁のえんこ。　◉鼠算の過料　過大の科料。　◉追放　おひはらふ。

◉むらさきの歌　論語に紫の朱を奪ふをにくむといふことがあるがこのむらさきいろの外ににくむべきものは、肉いれの朱をうばふれずみであるぞとなり。

二、上野廣小路蕎麥飯の報條

◉家傳　家に傳來せる法。　◉一子相傳　家代々うけつぐ。　◉あわ雪　春ふる雪。　◉趣向　◉鐘は上野か淺草

海苔　花の雲かれは上野か淺草かの句より來れるなり。　◉とうがらし　唐辛。

七、世の中

◉世の中の句　世の變遷人事の轉化の速かなるをいへるなり。　◉物言へばの句　互による所を失へば自ら滅亡するに至るべしとなり。　◉今日になりて句　心づきたるときのすでにおそきをそしりたるなり。　◉千なりやの句　一念三千の法界を具へたるを詠みしなり。　◉ふぐ食はぬの句　世の辛酸をなめつくした人にあらすば、人世の行路難をかたるにたらずとなり。　◉雪の日やの句　雪ふる月可憐なる童のたるよせつゝあるを見て、惻隱の情にたへずしてよみたるなり。　◉來年はの句　來年は來年は明日明日はといつて居る中に、ことしもはやくれてしまつたとなり。

八、鉢の木　その一

謠曲なり、北條時頼隱居して下民の狀況を見んとて諸國を行脚して上野國佐野常世のわびずまひに宿りてその落魄を救ふ筋なり、この事本謠曲に見るのみにして正史に見えず、夫とあるは常世、嫁は其の妻、僧は時頼なり。

◉一所不住　一所に住家を定め郡。　◉友の里　伴野といふ、佐久郡にあり。　◉離れ阪　これも信州の地名。　◉浅間の嶽　◉遠近人　◉大井山　佐久信州

◉佐野の渡　◉あら笑止　あゝこまつたことよ。　◉いかにをしく　人を呼びかける詞、まといふ如し。　◉申さうずる　申さんの意。　◉ともかくも　御勝手。　◉鷲毛　鷲鳥の毛。　◉鶴氅羽衣。　◉徘徊どりつ。　◉袂も朽ち　身の貧しくおちぶれし有樣をいふ。　◉細布衣陸奥のことばなり。　◉たゝずみ　立ちとまる。　◉さん候ふ　左樣に候ふ。　◉平に　ぜひ。　◉體あり　ていさま。　◉なかなかして。　◉曲もなや　つまらぬことじや。　◉よしもなき。　◉前世の戒行　ぜんせかいぎやうさきの世の修行。　◉知遇　ちぐめぐりあふ。　◉然るべくば　しかなるべくばならば。　◉なうなう

人を呼ぶ時のことば。◉聞えぬげ聞える樣子。◉三輪が崎大和磯城郡にあり。◉一樹の蔭一本の樹の蔭へ立より共に雨やどりするも◉この世ならぬ契らの因緣。◉軒ふりふるびて。家があれ◉うき寢ながらの草枕野原などはやどりする（うきれ）と同じ旅であるの意。◉夢より霜や結ぶらむ夢のむすばぬさきに、霜がむすぶであらう。

九、鉢の木　その二

◉いかに申し候ふ何と申すぞ。◉なににても候へ何かなる粗末な物にもせよ。◉折節◉飯◉日本一のこと大へん結構の事。◉世にありし時世にあつて用ゐられた時分。◉盧生唐の開元七年に盧生といふもの邯鄲の地に至る、呂翁といふ道士あり枕を貸し與へらる、盧生しばし寢れし夢に五十年間の榮華の夢さめたり、其寢る前にしかけたる粟飯が丁度出來上りたりといふ、これより盧生が夢とも邯鄲の夢一炊の夢ともいふ。◉邯鄲の假枕◉一炊粟飯の思ひ出すたく間。◉おもひでたより。◉鉢の木鉢に植ゑた木。植木。◉木數寄

◉祕藏大切にする。◉埋木土中に埋もれたる木。◉難行行をする。◉法の薪佛の爲めに用すてた人、僧のこと、即時賴をさす。◉冬木梅。◉折かけ垣竹などを折りまげて作れる粗末の垣。◉かねて思ひきや前より思つて居らうか、思ひもよらぬことなりの意。◉わぶる悲しと思ふならん。◉わびて住む侘びずまひ、苦しきくらし。◉ひ櫻火櫻（火にぐべる故）緋櫻（赤いさくら花）をかけたり。◉御垣守宮中の御垣をまもる役人。◉衞士宮中守護の兵士なれどここは仕丁（しちやう）の事、仕丁は庭中の掃除などする者。◉たゞ人普通の人。◉自然の時自然と何か事のありし時の爲に聞いておきたし。◉なれる果た身の末。◉散々の體ていひやうのなきあさましきありさま。◉押領領地を無理に奪はれる。◉御沙汰おもてざたといふに裁判のこと。◉最明寺殿◉具足よろひかぶと。◉とつて投げかけ取つて身に着る。◉著到かけ集つた者の名前を帳面につけられる。◉なんぼうどれほど。◉よしや身の云々たとへかゝるあはれの身となりても、いかでこのまゝに朽ち果つべきや、わがこの世に生きて居る間（世の中にあらほど）はわれをたよりにせよ

（たゞたのめ）となり。◉ゆきの日の雪に行きたゝいひかけたり。◉かり衣（狩衣）は旅の衣なり、衣宿を借るにいひかけたり。◉希有が

る法師げな僧。◉かひがひしへはなけれどもど。そなたの力になる程の身ではなけれ。こころきいたことなるけれども。◉公

方の縁鎌倉幕府へとりなす縁を結ばんとなり。◉御沙汰訴訟。◉出舟の縁語なり。

一〇、鉢の木　その三

◉勢軍勢。◉白金打ちたる銀のかなものを打ちたる。◉絲毛の具足を絲毛といふ、ひをどし、黒絲をど

し、卯の花をどしなどあり。◉かひに飼うたる十分にかひ養ふ）（よくこえふとりてたくましきをいふ）。◉打物たな。◉物その

ものにあらざる氣色樣子（みすぼらしく粗末なるをいふ）。◉所存忠を思ふ心。◉上意おほせ。

◉なかなかのこと左樣に候ふの意、當時の俗言なり。◉某が敵人人と思ひ。◉謀叛人と申し上げ拙者を謀

叛人なりと讒言したる故。◉ためなあるよ。◉力なし及ばぬ。◉大床大ひろま。◉きらら綺羅（立派なるをいふ）。

◉横縫ぐりたる絲毛。◉古腹巻の一種。◉神妙〇奇特。◉勢使軍勢のこと。◉當參今參つたる。

◉切なりし親切にありしは。◉自筆の狀將軍自筆の知行を賜はる狀。◉安堵土地の所有を承認する教書。◉たびひ給。

◉佐野の舟橋萬葉集の歌に「上野の佐野の舟橋取りはなし、親はさかれど吾はさかれかへ」とあり。

一一、西洋文藝復興と明治の盛大

◉西洋文藝復興十三世期の末期より近世の初にわたりて主として伊太利に起りたる文藝の復興をいふ。◉帝政時代紀元三十一年「オクタビアヌス」の埃及平定の年以後、國王は鋭意治をはかり文物燦然としてかがやき、紀元九十六年より百八十年迄は、名君相繼ぎ古今無雙の盛をきはめたり。此の年間を云ふ。◉暗黒時代文物道德の腐敗して戰爭の多き時代。◉長夜の闇いつまでも夜の◉王朝文明近江朝以來奈良朝時代迄の文明。◉目覺しめる。目のさ

◉參政（さんせい）まつりごと　◉端緒（たんちよいと）ぐち。　◉研鑽（けんさん）みがく。　◉産聲（うぶごゑ）はじめてうまれたること。　◉享樂（けうらく）のしむ。

◉靡然（びぜん）くさの風になびくやうな勢。　◉銷沈（せうちん）しづみきつて。　◉厭世（えんせいうき）世をやに思ふ。　◉烹塾（かうじゆく）　◉佛蘭西革命（ふらんすかくめい）土地の貧富の甚しき相異、商工社會の組合の束縛負擔の上にかろく下に重き行政の紊亂財政の困難相緣り米國獨立をうらやみておこりたる革命。　◉大刷新（たいさつしん）弊害をのぞいて物事を新にする。

◉進化論（しんくわろん）動植物の外界の事情により下等より高等に進むにつきて論究したる實驗科學說。　◉攝取（せつしゆ）おさめとる。　◉釀（かも）し成るなす。熟し　◉渾然（こんぜん）差別なく圓滿なる。　◉海嘯（かいせう）つなみ、　◉濁浪（だくらう）にごれるなみ。　◉奔盪（ほんたう）なみのさかんにうごくこと。かけくるふ。　◉飛揚（ひやうとびあがる。

◉奮迅（ふんじん）ふるひたつて勢はげしく進む。　◉庸劣（ようれつ）凡庸なる劣れる人。　◉懦弱（だじやく）勇氣なくいく

一二、重盛諫言（しもりかんげん）その一

◉心ゆかず滿足せざること。　◉赤地（あかぢ）の錦（にしき）の直垂（ひたゝれ）　◉黑絲縅（くろいとをどし）　◉胸板（むないた）せめ鎧の胸板をおしつけろ樣につめる。

◉靈夢（れうむ）不思議のゆめみせ。　◉現（うつゝ）に賜（たま）はる現在賜はる。　◉蛭卷（ひるまき）長刀の柄を籐にて間をすかしてまきたるを云。　◉中門（ちゆうもん）の廊（くわう）大門と寢殿との間にある門に南北に連れる廊。　◉ゆゆし重大なり。　◉木蘭地（もくらんぢ）黃紅色の雜色の地合。　◉新院（しんゐん）崇德院。　◉一宮（いちのみや）重仁親王。

◉故刑部卿（こぎやうぶのきやう）忠盛。　◉養君（やしなひぎみ）御養育申し上げたる君。　◉故院（こゐん）鳥羽上皇。　◉院內（ゐんない）仙洞と內裏と。　◉七代（しちだい）子孫々。

◉不當人（たうにん）道理をわきまへざる人。　◉結構（けつかう）たくらみ。　◉院宣（ゐんせん）上皇の敕旨。　◉御幸（ごかう）上皇のみゆきを云ふ。　◉きながせ腹卷胴丸などよりも草摺長き鎧の一種。　◉主馬判官（しゆめはんぐわん）　◉かう候ふ（かう）〳〵ございます。の有樣　◉禪門（ぜんもん）清盛をさす沸門に入りたる男子の稱。

◉物狂（ものぐる）はしし狂氣した。　◉卿相雲客（けいしやううんかく）公卿殿上人。　◉受領（じゆりやう）國守。　◉衞府（ゑいふ）六衞府の官人。　◉諸司（しよし）院司內膳司錢司齋院司などの司人。　◉居（ゐ）こぼれ居並られずして外に居ること。　◉ひしと竝（なら）びひし〳〵と壓しあふてならぶ。　◉烏帽子（えぼし）　◉直衣（なほし）貴人の常の服なり。　◉大紋（たいもん）の指貫（さしぬき）大紋のつきたる指貫。　◉そばとる取る。　◉さやめく（さやめく）れの音をたてる。衣ず

◉へうずる世を世ともおもはず自分一人の世の樣に思ふ。◉いさめ意見を加ふ。◉五戒不殺不盜不邪婬不妄語不飲酒。◉五常仁義禮智信。◉おもはゆう心はづかしい。◉素絹

一三、重盛諫言 その二

◉流石 ◉邊地自ら罪惡を捨てず自修の功を積むを知ず、往生の成否を疑ふが如き人の往生する地。◉粟散の境粟のちらされたるが如き小國。◉甲冑をよろふ身につける。◉就中 ◉法衣こころも。◉破戒無慙五戒を破りてはばちとおもはぬ。◉心の底はらの中。◉衆生世の中一切の有情のもの。◉普天の下天のあまねく覆ふところの下。◉率土の濱地の長くつゞける限り。◉潁川に耳を洗ひ許由といふ人堯の天下をゆづらんといひしをきけがらはしとて耳を潁川にあらひしといふ。◉首陽山に薇を折る伯夷叔齊の二人武王の紂王を征せんとするをききて諫めて用ゐられず、武王天子となるに及んで首陽山にかくれしといふ。◉蓮府大臣の異稱。◉槐門三公を三槐と云ふより これも大臣の稱となる

◉進止司配といふ意。◉傍若無人人を人ともおもはぬわがまゝなるしわざ。◉召し置かるる召しとりおく。◉如何なる不思議どんな奇怪なる所爲。◉所當の罪科律にてらしたるそれ〴〵の所罰。◉撫育下民をいたはり扶育する。◉佛陀ほとけ。◉冥慮幽冥なる間のおほしめし。◉感應信心の程神佛の心にかなひて通ずる。◉叙爵叙せらるるをいふ。◉大臣大將内大臣近衛大將。◉一入再入一度も二度も染液にしたした。◉逆臣叛逆の臣。◉谷れり ◉所詮理のつまり。◉再實なる木はその根必ず傷む年に再び實を結ぶ水は枯れやすし、人も事しげければ短命なりの意。◉御壺垣の中の庭前の意。

一四、朗詠數則

◉早春の詩天氣晴朗なる日水鄕を見わたせば、新に萌え出でたる柳の若枝の、そよ吹く風に靡ける生えたる何の生氣なかりし水苔の鬚を洗ふとなり。◉花の詩子の日に松をひきてこれに觸れ携はるときは、風霜にたへたる常盤の緣は手の中に滿ち、梅花を手折つて頭にかざすときは、

その花ちりて時ならぬ二月の空に雪が衣秋におつるとなり。

◉首夏の詩　甕の中の酒は冬作りたるものなれども春になつて漸く熟し、階の下にある薔薇は夏の季節になつて初めて花がひらくとなり。

◉納涼の詩　池邊の松陰にたちよりてあつささくれば、池水波涼しくして三伏の暑熱をおぼえず、松は亭々として梢より吹きおろす一聲は、すゝしい竹葉は酒の異名。

◉八月十五日の詩　月の十二回轉する一年十二月中、今宵ばかり月光のまさくきこえてさながら秋のこもれるが如し。

◉雁の詩　北斗星の炳然として大空にかゞやくあたりを、北邊より來れる雁の一列は横斷して、南に向へる樓臺の下に、月光を浴びつゝを我が家のものとして爭ひ賞するならんとなり。

◉蘭の詩　聖明は天日の光なきにあらざれども、浮雲之れをおほひて光を失ひ、叢蘭芳しからざれども、秋風の爲めにくだかれて其外征せる夫のために寒衣をよせんとて衣うつよとなり。

◉山水の詩　千山萬岳相重なりて、奇巖怪石鑿にてけづりなせるが如く、如何なる名工の手工を施こせる香を失ふと云ふ意にして、藤原氏を以て浮雲にたとへ、自ら蘭にしたるなり。

◉將軍の詩　腰に帶せる雄劍を一るにやあらん。水又水悠々として綠の淵の染め出したるが如き、これ果して誰が家の藍の染め出したるものにやありけんとなり。

◉帝王の詩　帝の恩澤は四海の外におよび、惠のときは、三尺の秋霜光を放ち、口中に雌黃をたくはへて縱横に發するときは、流麗にして玉聲の寒夜にさえわたるさまに似たりとなり。

つゆのしげきは筑波山の陰よりも滋くして至らぬところなく、浦變して瀨となるが知き歎聲を發するものは寂として聲を絶ち、小石の長じて巖となるまでも、君が代の永かれとことほぎ奉れる聲のみ耳にみつとなり。

一五、わが國の繪畫

◉混融　まじりてとけあふ。

◉區劃　くくわく

◉科學　特殊なる現象の原理に關し、概括して一主觀の系統に統一せられて論述證明せらるゝを云ふ。

◉理性　理法に從ひて判斷する人間の智的能力。

◉顯官　顯達し人。

◉衙　くつわ

◉描線　輪廓の線

◉瀟洒　さつぱりとしていやみなきこと。

◉輪奐　りんくわん　建物の大にして美しきをいふ。

◉高士　志高く守操すぐれたる人。

◉巨勢金岡　こせのかなをか

◉彫塑　彫刻物や肖像の稱。

◉形相の具足　外部の形のなりとゝのへること。

◉法成寺　はつしやうじ

◉法勝寺　ほうしやうじ

◉廢墟　はいきよすたれたるあと。

◉金堂　こんたう　本堂。金色に塗りたるを以て云ふ。

◉鳳凰堂　わうたう　平等院にあり。

◉憧幡　どうはん　寺堂の前にかけたるはた。

◉蓮華頻散　散華とて法事儀式のときに、金銀種々の紙にて造りたる蓮華を散ずるを云ふ。こ

の花開くときは諸佛來り坐し、惡神は之れを嫌ひて
さくが故に法會のときなどにはこれを用ゐるなり。
雲たなび　◉彩華炫耀はなやかにしてきらきらと目
くをいふ。　もまばゆきばかりにかがやく。　◉轉讀字句をぬいて經文
慈悲の相好を　◉忿怒破邪不動明王又は四大王の如き相好あり
具備せること。　りと云ふこと。　◉精華きつ　◉慈悲圓滿　◉新佛敎眞言宗
の盛時　◉逸品すぐれた品。　◉提嘶手をひきつれ　◉結跏趺坐兩脚をくみあぐらを　◉寂靜の
たいふ。　つながり進む。　かきて坐すること。　◉敎外別傳口舌言說以外に別に精
境身心一切の故意の活動を止息　して心を平靜ならしむる境涯。　◉以心傳心言にあげず心を以
て心に　◉泥む拘泥　◉蒼枯俗をはなれて　◉恬澹安靜にして淡　◉破墨一掃細かな筆か
つたふ。　す。　かさぶること。　泊なること。　はず
幕にてはきたる如く亂暴なる書き方　◉われを忘る文藝の極致なる忘我　◉流風餘韻遺風の近
にて、毫も形似に注意せざる書き方。　の境に至るを云ふ。　代まで傳
はりたる　◉穠麗うつやかにうるはし。　◉枯淡俗をはなれて淡泊なること。　◉門閥いへがら。　◉糟粕かす。　◉浮世繪

時樣の風俗を　◉時勢粧まやすがた。　◉鄙俗下品にして俗　◉匠氣卑俗なる職人かたぎ　◉氣韻
う(せる一派。　
生動生氣位たかくして
生氣あること。　◉價値ち。

一六、玉づき四篇玉づさは手紙のこと。

一、小澤蘆庵主のもとに

◉千さと千里(遠き道のりの事)。　◉こゝら許多、多く。　◉うちつけなるものからだしぬけのことながら○唐突。　◉ち
かへる春新年。　◉ほぎことよろこび(御祝詞)。　◉もゝ世百年(長く)。　◉ものみなはみなはあたら
しきよし唯ひとはふりたるのみ　萬葉集にものぞよろしかるべしとあるによる。

二、人の冰をおくれるに

◉つちさへ裂く（地面もひびわれる といふあつい頃。）◉わらはも。◉めでくつがへり（非常にうれしがり。）◉おほやけのもの（天皇の御飲料。）◉おもの（主上の供御。）◉いぶせきろしい。◉伏屋（小屋。）◉心やりぐさみの物。◉かしこきわざ（もつたいないこと。）◉御まのあたり（お目にかいつて。）◉あなめづらしなあ（珍らしきことかな（なは感嘆の詞）。）

三、月の夜友のもとに

◉いざたまへもろともに（どうか月見にお出で下さい、御一所に。）◉所せきつぼ（場所のせまい庭。）◉なりどころ（別荘。）◉あるじまうけ（御馳走○饗應。）◉ありきたがひて（いきちがひて。）◉あらぬほどならば（留守であつたら。）◉律師（僧の意。）◉塵をよそ（俗塵の外、世の中をはなれた。）

四、雪の朝友のもとに

◉いつしかとのみ（いつ雪がふるかとばかり。）◉たゝずまひす。◉かゝらぬをりだに（こんな景色のよい折でなくつてさへも。）◉あたらしくに（あつたらもの殘念に。）◉よし蹤つくとも（たとひ雪にきたない足あとをつけても。）◉をかしさろさ。◉思はずに（思ひやりがなく、意外に。）◉さりとも見過しがたく（さてもこの景色を歌もよまずに空しく見過しがたくは思はるゝ事ならんか。）◉しろしめすやうに（御承知の通り。）◉うひうひしき（初々しきにて、まだ未熟なる。）◉筆のしり（歌を添削してくれる。）◉博士（先生の意。）◉そこには（あなたに。）◉心ふかき言の葉（極めて面白き和歌。）◉せばき庭（自分の庭を謙遜していふ。）◉さうざうしさ（ものさびしさ。）◉鳥の迹（文字。）◉しみこほる（凍え氷る。）

一七、祭のことは

◉平春海氏は村田、春海は其名、學和漢に達し尤も歌文をよくす、眞淵の門、千蔭と同窓の友なり。◉芳宜園大人　◉おくつき墓所。◉うなねつきさげる。◉かも同じ。◉このかみ兄。◉そのかみむかし。◉童も。◉縣居加茂眞淵の家號。◉御はかし佩刀。◉あひうるはしみく互に交はる。◉はらから兄弟。◉おととひ弟。◉つら列なみ。◉世のさがし世のならは生業。◉かゝづらひかかりあひ○關係。◉うきことと憂ふべきこと。◉はたとせ二十年。◉つねなき無常。◉心しらひこゝろばえ。◉しづ機の枕詞。◉みやびごと風雅。◉株を守り舊き習はせに耕すあり田中に株あり兎走りて株に觸れ頸を折きて死す、宋人田を捨てゝ株を守りて兎の又來らむことを求む、されど兎は再び來らず、宋の人皆之を笑ふとあり。◉舟にきだつくる これも同じ意にて舊法を固守して移らぬ故事昔楚に江を渉る人あり劍を船中に置きしに劍河中に落つ、その人、船に刻みて是劍の落ちし所なりとて之を探せしも、その時船は已に進行せしが故に劍の落ちし所と異なりたりし故に遂に劍はなかりきといふ。

◉たまあひて意氣投合する。◉うづなひうづなふ。◉寧樂奈良朝。◉おもておこし面目を施す。◉價なき價のほども分ぐる。◉天がけりけり空をかけス。◉金の聲立派なる ことば。◉玉の響金聲に同じ。◉ことあげていふ○申上

一八、文學藝術の三作用　その一

◉琴後集春海の歌文を集あたるもの。◉趣味性　◉陶然よへるが如くにして心の何となく樂しきこと。◉刹那一指彈ほどの しばらくの間。◉忘我われを忘れて惘然たること。◉鑑賞かんしやうめきゝ。◉輸贏ゆえいしやうぶ。◉惘然知覺を失ふ。◉屑屑せつせつあくせくし たらく。◉營營えいえい忙しく する。◉心境心の上の境涯。◉同化融合すること。◉魅せられ執念くつきまとふ。◉圓圓滿にまとまる。◉能事のうじわがつくすべきこと。◉幻影まぼろし。◉心酔心をかたむけて一事にふける。

一九、文學藝術の三作用　その二

◉槿花の花。◉一朝の榮が如くしばらくの榮華。◉日日を懸く永久に日月の照せるが如く死滅せざること。◉鼓吹けてはげます。◉育英英才を教育する。◉たづさはる關係する。◉教化人を教へて善にすゝむる。◉超脱世外にぬけいづる。◉めいるゝ心のうきたゝぬこと。◉融會互にとけあふ。◉勸化寄進をたのむ。◉浮哇浮華にしてみだりがはしい。

二〇、鏡の影

一、時平の勅勘

◉延喜の帝醍醐天皇を云ふ。◉世間の作法したゝめ延喜格を定めたまふを云ふ。◉過差格式にたがひうぞく裝束。◉殊の外めでたき格外に美麗なる。◉内にまゐる參内する。◉小蔀殿上六間にあつて主上の殿上をも覽せらるゝところ。◉職事藏人。◉一の人攝政關白をつむる人の稱。◉わなゝくわなゝく〳〵。おそれ◉御隨身兵仗を帶して警護する近衛の舍人。◉みさき先驅。◉門をさゝせ門を鎖す。◉勘當勅勘をうけたるをいふ。◉うちうち内々。

二、鶯宿梅

◉藏人天子の御そばに待り て政治にたづはる役。◉一京東の京ひとつの意。◉あるやうこそはこはわけのあること ならんと思ひての意。◉敕なればの歌敕命なればかれこれいはんも畏多し、さりながら宿しめてなれたる鶯がかへり來りて、わが宿は如何なりしと問はゞ何と答んとなり。◉あやしくぎに。

三、けづり屑

◉下の闇　二十日頃より後の暗夜。　◉五月雨も過ぎてふりすぎて。雨く。　◉かきみだれ　空かきくもれる。　◉さうざうし　寂し。　◉むくつけきわるい。　◉人勝なるに人が多くてさへ。　◉いなむやや　行かれかうか。　◉えまからし　かじ。　◉豐樂院　天子宴會の御所。　◉仁壽殿　◉塗籠　物をいれおく納戸やうのところ。　◉大極殿　◉便なき事　都合あしき事。　◉殿原道隆道兼。　◉益なし無益なり。　◉私の從者　しぶんのともびと。　◉昭慶門　◉仰せごとたべ　おふせごとたまはれ。　◉にがむにかむほして。　◉陣　衛士の詰所。　◉承明門　◉中關白道隆。　◉念じてへて。　◉ゆく手　ゆくさき。　◉術なくすべきやうなく。　◉粟田殿　道兼。　◉臺　仁壽殿の内西北にある舞臺。　◉砌　石畳。　◉身のあらばこそ身命ありてこそ。　◉さりげなく　然るやうすもなく。平氣で。　◉事にもあらずげに　何のかはりしこともなささうに。　◉のどかにおちついて。　◉ただにてにて　空手の。　◉ののしり　はやしたてさわぐ。　◉羨し　うらやま　◉つとめてやく。　◉けざやかにはつきりと。

四、大堰川の三船

◉逍遙　ぜうそぐろあそび。　◉たへなるすぐれた。　◉小倉山の歌　秋ふけて小倉山の嵐の風が寒きゆゑに、紅葉の錦の衣を著ざる人はないと云つて、紅葉がちりかゝるさまをよみてなり。　◉中しうけ　自らのぞみて承諾を得る。　◉遊したりなよくよみたまへりとなり。　◉かばかりの詩どこれほどの詩。　◉名の擧らん云々　一層名もあがるべき事もまさりませうに。　◉心おごり　慢心。

二一、御民われ

◉御民われの歌　天地清明にして風雨時に從ひいや榮えに榮ゆるこの大御代に逢ふことの出來ましたのは、私共等は國民として生ける甲斐がございます。　◉今日よ

りはの歌　めしに應じてまゐります私共は、今日より後は家のこと妻子のことはかへりみることなく、一心不亂に陛下のみ楯となりて、おつかへ申しますでございませう。　◉たび人の歌　遣唐使となりて出でたつ吾が子の、宿りすべき野に、霜のふることもあらば、汝が羽毛を以て吾が子を羽ぐめよ、空ゆく鶴よたのむぞとなり。　◉父母かの歌　吾が父母がおさなきときに頭なでつゝ將來幸福を得て、家名をおこせよとおほせられたる言の葉は、いまもなほ忘れずして居りますよとなり。　◉神風の歌　吾が夫はは　ま風のふきすさぶ伊勢のはまべに、はま荻をなり伏せてそれを臥床として、旅寢をすることであらうとなり。　◉をのこやもの歌　ますらをと生れたる甲斐にしく世を終へて、萬代までも語りつぐべき名なからんや、しかるに吾れ老病にかゝり、功名たつる所なくして死するが口惜しとなり。　◉しきしまの歌　吾が本國はびやかに發達した國であるぞ、吾等がこの國に生れあひたるはまことに吾等の幸福であるぞとなり。

三三、孟子と教育

◉庶民もろ〳〵の民。　◉人倫人たるものゝみち。君臣父子兄弟夫婦朋友の五倫。　◉三代夏殷周。　◉天爵徳高くして自然のたつとぶところとなるもの。　◉人爵人の貴くするもの。　◉貴於己者いふ。　◉良貴本來自然にたつときもの。　◉趙孟趙氏の大夫。　◉膏粱粱は五穀の最美なるもの。　◉令聞よきひやうばん。　◉廣譽ひろきほまれ。　◉施於身身にくはゝる。　◉文繡衣服の美。　◉褫奪ふ。　◉拱把ひとかゝへ、ひとにぎり。　◉桐梓共に良木なり。　◉彛古の射の名手。　◉彀弓を十分ひきしぼりたるをいふ。　◉規矩さしがねぶんまはし。　◉道在邇き處にありの意。　◉詮索さがす。　◉梓匠細工人大工。　◉輪輿車工。　◉不能使人巧其たくみなるところは妙處を自得すひきあてゝおこなふ。　◉敢爲おしきつて事をなす。　◉性之天性を全うして修爲工夫をくはへざるを云ふ。　◉身之修爲工夫を用ゐて其性の本然たるところを身に行ふ。　◉五霸齊桓、晉文、秦穆、宋襄、楚莊。　◉假之仁義の名をかる。　◉尚志志を高尚にする。　◉大人大徳の人。　◉奚有於是なんぞ形體の異同によるのであらうぞの意。　◉烏獲之任烏獲は古の力つよき人任はにもつ。　◉餘師師とするところ多きを云ふ。　◉不

存焉者ざるもの本心の存せるをいふ。

二三、小原御幸 その一

◉供奉御供を申し上ぐる人。◉清原深養父天武天皇七代の孫豐前守房前の男。◉よしあるさまる樣子。◉甍破れ云々屋根かこはれてはたちこめたる霧は、不斷たく處の香の烟かともおもはれ。◉樞落ちては云々扉のとぼそがおちてはさし入る月は、常燈の燭をかゝくる火かともおもはれる。◉八重立つ雲幾重にもかさなれる雲。◉池水にの歌池水の水ぎはにある櫻の花がちりて、波の花の上にかきなりてあるやうに見えるよりな。◉綠蘿の垣みとりのうすものゝ如き垣。◉翠黛の山みどりの如きみどり山。◉瓢簞屢空し云々水をいれる瓢さへしばしば空しきほどの貧しき顏淵のすまへる巷こは、みどりの草がおひしげりてあり。◉藿藜深く鎖せり云々愚憲のすまへる宅をとざして帷布よりは雨のしづくがとぼそをつたひておつるとなり。◉たまるまる。◉いささ小笹なる笹。◉世にたゝぬ世にていたる身。◉言傳づけ。◉ませ垣目のあらき垣。まがき。◉言とふ訪れ來る。◉爪木の斧の音薪きの音。◉正木のたづら常緣なる葛の一種。◉青つゞらあをきかづら。◉いらへ返辭。◉五戒偷盜邪婬妄語殺生飲酒。◉十善十惡を身に行はぬこと。◉果報前の世にて保したる果によつて得たる報。◉捨身世をすてたる身。◉なじかはなぜか。◉つやつやいさゝか。◉さめざめ涙を潸々とたとす。◉いとほしみ寵愛。◉忍びあへぬたへぬまでなること。◉目もあてられずられず見ても居

二四、小原御幸 その二

◉來迎の三尊來迎の衆生をむかへ來りて、八億四千の罪を滅し、光明の內に伴ひてゆかせ給ふべき、彌陀觀音勢至の三尊の佛。◉普賢亞聖。◉善導淨土の祖師。◉蘭麝。◉色紙和歌又は俳諧などしるす方形なる料紙。◉笙歌管絃の音。◉孤雲一つの雲。◉聖衆極樂の佛

菩薩にて、まよひをはなれさとりに至れる聖衆をいふ。◉思ひきやの歌小原山のおく深く世をすてすまへる身が、雲の上の月を見やうとはおもひもよらぬことであるにとなり。◉たへなる敬奇をつくした。◉綾羅すもの。◉錦繡にし。◉さなから全然。◉花筐◉先帝安徳天皇。◉御乳母もりそだてる女。◉典侍局◉閼伽水の梵語佛に◉御見參對面すること。◉一念ひとすぢに佛を念ずる。◉攝取後生の光明をさめとる。◉十念彌陀の稱號をとなへて結緣を得んとすること。

二五、神道

◉掛けまくも申さんも。◉しろしめす領したまふの意にて統御したまふこと。◉むかふす雲の向の方のとほく見ゆるところ。低く伏したる如◉谷蟆谷蟆へる。◉さわたる單にわたるの意。さは接頭語にして◉まつろふ服從。◉天皇◉言擧たてゝ特別にとり云ふ。◉手振手振はし。◉まがふ紛るゝ。◉まねぶ。◉もはら專◉みだりかはしき亂さま。◉ときはに常盤なる岩の意にて永久と祝ふに用ゐる。◉かきはに壁固なる岩の意にて永久と祝ふに用ゐる。◉靈しくしく。◉奇しく不思議。

修訂中等國語讀本卷十字解終

●文部省英語讀本字引　金十五錢
●淺田氏英語讀本字引　金廿五錢
●簡野氏再訂新編漢文字引　金廿五錢
●落合氏新訂中等國語字引　金四十錢
●スタンダードチョイス讀本字引　金三十錢
●新訂スタンダードチョイス字解　金廿五錢
●神田氏スタンダードリーダー字解　金廿五錢
●落合氏修訂中等國語字解　金廿五錢

大正元年十月五日印刷
大正元年十月廿日發行

不許複製

編纂者　朝野編輯所
東京市神田區橋本町二丁目五番地
發行者　朝野文三郎
東京市牛込區榎町七番地
印刷者　渡邊八太郎
發行所　東京市神田橋本町二
振替東京壹六七五番　朝野書店
日清印刷株式會社印刷